

## 『兎狩りゲーム』

学校: 仙台コミュニケーションアート専門学校

専攻: ライトノベル・小説作家専攻

3年

氏名: 熊谷まりな

-----

梅雨の季節は過ぎ去ったようだ。ついこの間まで雨の香りがしていた風も、今日は初夏の心地良い香りを乗せていた。

その風の中に煙草の独特な匂いが混ざる。

俺は狭い路地裏の壁に寄りかかり、オレンジ色に灯るたばこの先を見つめた。

僅か数メートル先で華々しく輝く夜のライトとは正反対にどこか儂く頼りない光。数十歩先に行けばお酒と、女の化粧の香りと、そして希望の匂いが漂う。

だがこうして数十歩離れると初夏の香りと煙草の香りと、そして絶望の匂いが漂う。

煙草から口を離すと、その光の儂さを表すようにぼとりと灰が足元に落ちた。

俺は溜息を一つ吐き、煙草を落として足で火を踏み消した。

おんぼろの革靴がなじるように煙草を踏みつける。

そのまま大して高くもないスーツの内ポケットから携帯灰皿を取り出し、ぐしゃつとなった煙草を拾って入れた。

それと同時に舎弟二人が戻ってくる。

「ひなたの兄貴、あいつ帰って来てやしたぜ」

スーツのポケットに手を突っ込み、猫背な岡崎忠志が厭らしい笑みを浮かべて報告してきた。

細身で短髪が特徴的なこの男こそ俺の大事な舎弟の一人であり、まさしくヤクザのような形相をした奴だ。

だが俺は岡崎に向かって舌打ちをした。

「その名で呼ぶな」

「でも兄貴、大空って名字も嫌ってますよね？」

野太い声が割って入る。

俺はもう一人の舎弟を睨んだ。

岡崎とは正反対で体格がよく、スキンヘッドはなかなかインパクトを与えてくる。

こいつが歩けばどんな混んでいる道でさえ一発で開けるのだからすごい。

しかしこいつは見た目の割に小心者で少し臆病なところがある。まさしく高木優斗、名前通りだ。

「ああ。つぎどっちかで呼ぼうものなら命はないと思え」

そして俺もまた見た目と名前が合っていないことが細(ささ)やかなコンプレックスであり、苛立ちの原因だったりもする。

大空ひなた。

一体なんの嫌がらせか。大空から降り注ぐ太陽の光、という意味でも込められているのだろうか。

だが残念ながら当の本人はそんな世界に生きちゃいない。七歳で三歳の妹を連れて父親が出て行き、八歳の時に母親が自殺。今やヤクザとして借金の取り立てをする人間。

闇を彷徨い、闇の中で生きる意味もなく淡々と息をし、組長の元で身を捧げる。強いて言うなら、もしどこかで父親を見つけたなら殺してやろう、くらいの復讐心は持っている。

だが、大事な妹を、唯一の家族を失った今、この世に光など存在しない。

「すみませんでした……」

「おいらも気をつけます……」

岡崎が素直に謝り、高木が項垂れる。

それだけ俺の言葉に冗談を感じない、ということだろう。実際冗談なんかじゃないしな。

俺は二人を一瞥し、壁から背中を離れた。

「分かったら行くぞ」

そう言って歩き出すと、二人もせこせこと後を追ってきた。

明るい街並みから離れ、住宅街へと向かって歩き出す。

夜は闇でありながら、しかし真っ暗になることを知らない。最近では夜中の二時でも平気で家々の電気が灯されている。

しかしそれは決して希望の光でないことは確かであろう。

そういう意味ではまだ明りの少ない公園の方が闇でありながら穏やかであるかもしれない。

人の気配を感じさせない、ただ静かにひっそりと遊具が立ち並ぶ公園。昼は子供の遊び場として一役を買い、夜は誰にも迷惑をかけることなく、静寂を保つ。

いや、本当にそうだろうか？

俺は右手に見えた公園をちらりと見た。

人の陰が二つ、見える。

俺が公園の前で足を止めると岡崎が二歩ほど前で、高木が俺にぶつかるようにして歩を止めた。

「兄貴？ どうしたんすか？」

「しっ！」

岡崎を睨みで叱責し、公園の中を指差した。

岡崎が眉根を寄せ、猫背な体を更に猫背にして公園の中に目をこらした。

高木も首を傾げて公園を覗く。

先を歩く人陰の後ろをもう一つの人陰が追う。

その追っている方の人陰の手には何か棒のようなものが握られていた。数少ない電灯がそれを照らす。

きらりと光ったそれは、バッドだった。

「あいつ、殺(や)るつもりだ」

俺はそう言うと同時に公園の中に入って行った。

「ちよ、ひなたの兄貴！」

「お前あとで絞め殺すぞ」

「ひい！ す、すみませんおいら……」

おどける高木の声にバッドを持った男が気がつき、振り返った。

その瞬間に俺はそいつの目の前に立ち、バッドに手を伸ばしていた。

男は舌打ちをし、思い切り俺に向かってバッドを振り下ろしてくる。俺はそれを交わし、むしろ肩を掴んで強く引っ張る。

ゴリッという鈍い音が暗い公園に響いた。

「うわあああああ！ いてえええええ！」

肩を外された男はバッドを取り落とし、膝をついてもがき叫ぶ。

俺は更にそいつの背中を蹴り、地面に叩きつけた。そのまま肩甲骨から肩にかけてぐりぐりと踏みつける。

「うるせえ。近所迷惑だ。このまま殺されるのと、大人しく帰るの、どっちがいい？」

静かに尋ねると、男は一瞬怯んだ。

しかしすぐに顔を引き締め、足の下でもがいた。

「覚えている。主は必ずその男を殺す」

「どういうことだ？」

岡崎がその男の隣にしゃがみ、顔を覗き込んだ。

だが俺はゆっくりと足をどかしてやる。すると男はすぐさま立ち上がり、俺を睨みつけると、何が起きているのか理解できていない被害者の方をちらりと見る。

俺は伏し目がちに応える。

「俺には関係ない。ただ俺の仕事の邪魔になるようなことはするな」

夜空に吸い込まれるようにして消える声は、公園という場所にはあまりに不似合いだった。

だが男はそれ以上何を言うでも、するでもなく、黙ってその場を後にした。

この程度で引くのだから笑わせてくれる。貴様の殺意はその程度か。

つまらないことに時間を割いてしまった。

俺が踵を返して舎弟の元に行こうとしたその時だった。

「あの……！」

襲われそうになっていた陰が俺に向かって声をかけてきた。

振り返るとそこには勤勉そうな瞳があった。微かな街灯の光でもわかる、確かな強い光と強い意志を宿す真っ直ぐな瞳。

せり上がる胃液を呑み込み、俺は相手を睨んだ。

俺には無縁で、俺にはほど遠い存在は拒絶反応を起こす。

「どうもありがとうございました」

見たところそれなりに上等なスーツである。それに皺ができることを気にも留めず、奴は深く頭を下げてきた。

だが俺にお礼を言われる筋合いはなかった。

別にこいつを助けたかったわけじゃない。

今ここで何か問題や騒ぎを起こされることの方が、この後の俺の仕事に支障が出ると思った。だから先にそのフラグを折った。

それだけのことである。

俺はそのまま黙って立ち去ろうとする。

すると男は姿勢を戻し、食いついてきた。

「あの、せめてお名前を！ お名前だけ、教えてください」

「別に名乗るほどじゃない」

「でも……！」

「ひなたの兄貴！ そろそろ行きやしょうよ」

「ちょ、岡崎、急に走るなよ……」

ぜえはあうるせえやつだな。

俺は二人に向かって舌打ちした。

「岡崎、どうやらお前も殺されたいみたいだな？」

「ひっ！ つ、つい……！ すいやせんでした！」

「はあ……はあ……はあはあ」

「ひなたさん……って言うんですね」

「東京湾に沈めんぞ」

男の方に向き直ると、奴は恐れるでもなく、ただ穏やかに笑っていた。

「はあ、はあ、はあ……」

「素敵なお名前だと思います」

嫌味の籠らない澄んだ声が、そう言った。

その瞬間後ろから頭を強くぶたれたかのような錯覚に陥った。

こいつは正気か？

「命の恩人の名前は忘れません。きっと連絡先を聞いても教えてはくれないのでしょ

う？」

「はあはあはあ……」

「またいつかどこかでお会い出来たら、改めてお礼をさせてください」

「はあ、はあ……はあ」

「あなたとならまたどこかでお会いできる気がします」

俺は黙って奴を見据えた。

そしてすっと踵を返す。

「行くぞ」

俺の低い声に舎弟二人の肩がびくんと震えた。

そのまま歩いていくと、小走りに二人も後を追ってきた。

「兄貴、あいついいんですか？ なんか変わった奴でしたけど……」

「はあ、はあ……」

「あいつの胸に赤いバッジがついてた」

「バッジ？」

「はあ、はあはあ……」

公園を出て元の住宅街を歩き、ある場所を目指す。

時間がとられ過ぎた。かなり遅れている。

スマートフォンの数字は二時三〇分を示していた。

ちらりと確認したスマートフォンをポケットに戻し、速度を上げる。

「つまり捜査一課の人間だ。警察だ」

「あの男が？」

「はあ……はあ……」

「騒ぎを起こすと面倒だ」

「兄貴よく見てますね。さすがです！ 俺一生ついて行きます！」

「なら」

キッと睨みつけると岡崎がぶるっと震えた。

「二度と俺の名前を呼ぶな」

「ひっ！」

「はあ……」

「あとお前もその息切れ、どうにかならないのか」

高木の方に視線を向けると、ふうと汗を拭った。

「すみません。素早い動きになれなくて」

あの程度で素早い動きと言っているのか。たかが数メートル走っただけだろうが。

「……お前、痩せた方がいいと思うぞ」

「同感だ」

もはや怒る気力もない。ただただ先が思いやられる。

もしいつに迫力のある図体がなければ俺がこの手で役立たずと言って殺していたらろう。

「あ、兄貴がそう言うなら……」

そう言っとうな垂れる高木を横目で流し、借家であろうおんぼろの家の前で足を止める。

はがれた壁、セキュリティーにかける玄関。

もはや人の住む家だと宣言して良いものか。こんなの物置きとほぼほぼ変わらない。それでいて中がどうなっているかもだいたい想像できるからこそ、物置と言う言葉の信憑性が増す。

「予定より遅れている。さっさと済ますぞ」

俺がそう言って玄関の前に立つと、岡崎が左側、玄関の取っ手が付いている方に立った。そして高木が反対側、俺の右斜め後ろに立つ。

それを確認して俺は軽くノックをした。

このご時世インターホンがないというのが実に不便である。それでいてさっきの警察がまだ近くにいる可能性が十分にある。

騒ぎになってはめんどうだ。あまり音は立てたくない。

このくらいの玄関ならば蹴り飛ばせば開けられそうだが、繰り返すように音は立てたくない。

だがやはりこれくらいのノックで人が動く気配はまるでなかった。

俺は咳ばらいをし、もう二、三回ノックした。

すると、中からぶつぶつと文句を言いながらこちらに歩み寄って来る足音がした。ガチャ……。

「誰だよこんな夜中に。常識わきまえ……ろ」

扉が少しずつ開き、中の様子が見えて来るにつれ、男の文句は威勢を失った。

そのまま岡崎が扉の隙間に足を突っ込み、閉めて閉じこもるなんていう逃げ道を先に潰す。

それを瞬時に察した男は怯えて数歩後退し、尻もちをついた。

その隙に岡崎ががばっと扉を全開にする。

露わになった廊下と男の様。

見るも無残な滑稽の極み。

散らばるごみからは生ごみの臭いが漂い、だらしない体を包んだ汚いTシャツからは汗の臭いがした。

四十にしてお風呂にも入らず、白髪交じりの手入れ一つされない頭はフケだらけ。やつれた頬とくぼんだ瞳は七十と言われても違和感はない。

もはや人ではない。

「で、人に常識を説く前にてめえの常識を確かめようか？」

低く小さいながらも威圧的な岡崎の声に、男は尻もち付いたまま後退する。

「人から借りたものは返せって、学校で習ったよね？」

岡崎が土足のまま家に上がり込み、真上から見下ろすように男の前に立った。

その後が続いて高木も土足のまま上がって行く。

俺が最後に入り、静かに玄関を閉めた。

「ま、待ってくれ！ か、金なら！」

「しっ！」

腰を曲げ岡崎がぐいっと顎を掴み、言葉を遮った。

「うるせえんだよ。外に響くだろうが」

こけた頬に岡崎の爪が食い込んでいる。痛々しそうに表情を歪ませている様さえも、ただ滑稽に、間抜けに見えた。

だが荒波は立てたくない。

俺は高木の肩を掴み、避けさせ、岡崎の元まで歩いて行く。

そして男の顎を掴む岡崎の手を引き離させた。

「兄貴……」

そのまま奴を突き飛ばすようにどかせ、男の前にしゃがんだ。

「山神大介、単刀直入に答えろ。金は用意できているのか、いないのか」

俺の問いに山神は生唾を飲み込んだ。

「で、できている」

その声は震えてはいたが、どこか確信を持った言葉だった。

俺は目を細め、立ち上がる。そして目で「どこだ」と尋ねると、山神は小鹿のように足を震わせながらもなんとか立ちあがった。

そのままなんとかリビングまで進んで行き、俺たちを手招いた。

岡崎と高木がちらりと俺の方を見つめて来る。それに俺が顎で「行け」と合図すると、二人は頷いてリビングの方に入って行った。

俺もその後が続く。

相変わらずリビングもひどい有様だった。

外したのであろう馬券が散らばり、灰皿からは溢れんばかりの煙草の吸殻が溜っていた。それ以外にもカップラーメンのゴミやエロ雑誌などが散らばっている。

しかしそのゴミに交じってテーブルの上に置かれていたのは、正真正銘札束だった。

それを見た岡崎と高木は一瞬目を疑ったのか、固まった。

だがすぐさま本物かどうか確認を始める。

「兄貴、間違いありません。本物ですぜ」

「五百万はありませ」

岡崎の骨ばった細い指と高木のぷくりとした太い指が札束を数え始める。

俺はその様を横眼で眺めながら煙草をポケットから取り出し、火をつけた。

ずっと肺に煙が入り込んでくるのをゆっくりと吐き出し、そのまま言葉も吐き出す。

「それにしてもよく用意したな」

俺の言葉に山神の肩がびくりと震えた。

お金から視線を外し、こちらを見ようとしめない。

そんな山神に歩み寄り、煙草の煙を鼻もとで吐き出す。すると奴は豪快にむせた。

「まさか別な闇金にでも手を出しのたのか？」

「だとしたらあんたは借金地獄だな！」

岡崎が持ってきた黒いポストンバッグにお金を詰め始める。

ところが俺はそこであることに気がついた。

「……甥はどうした？」

俺の質問に元々泳いでいた目が一層泳ぎ出す。

今までいたはずの九歳の甥。いつもなら取り立てに行くとなんなん泣いてこの小汚い男にしがみついていたはずだ。

確かこの男のお姉さんの子で国際結婚したからアメリカにいたらしいが、そのアメリカで両親が射殺され、他に身よりがいないからとここに来た、そう聞いている。

けれどその甥が今日はいない。

「……なるほど」

よくある話だ。

俺はそのまま床の上に灰を落とした。山神は一切こちらを向かない。つまりそれが答えであり、俺の読みは正しいことになる。

「売ったか」

我ながら淡々とした感情のこもらない声だと思ふ。

その言葉にお金を詰める作業をしていた舎弟二人が手を止め、顔を上げた。

俺たち三人の視線に耐えかねたかの如く、山神は拳を握りしめ叫んだ。

「し、仕方ねえだろ！ そうでもしねえと俺はあんたたちから逃れられねえ！ こうするしかなかったんだ！」

「お前、よくそんなことがっ！ そこまでして幸せになりたかったのかよ！」

高木が札束を机に叩きつけて叫ぶ。

すると、ようやく山神が俺たちの方に視線を向けた。

その瞳には怒りと憎悪と絶望が宿っていた。光を放たない、生きることに必死の瞳。涙すら流れなくなってしまった、枯れた眼球。

そこに映る俺たちは最大の悪であり、甥がそういう運命を辿ったのも俺たちのせいだと告げている。

「あんたらが悪いんだろう！ 容赦なく取り立てに来てとんでもねえ利子つけて返済を要求してくる！ 全部あんたらのせいだ！」

「ああん！？」

岡崎も眉根を寄せて参戦してくる。

「てめえが定期的にちゃんと返さねえのが悪いんだろがっ！ 責任転嫁してんじゃねえよ」

「うるせえうるせえ！ 全部あんたらのせいだ！ 俺は悪く……っぐほ！」

山神の言葉が途切れる。そのまま奴は胃の辺りを抑えて膝から崩れていった。

ちよつと強く殴りすぎたかもしれない。

だが仕方がない。さっきから言っているとおり。

「お前もうるせえんだよ」

騒ぎを起こしたくないんだよ、こっちは。

いちいち大声出してんじゃねえよ。

「お前らもお前らだ」

キッと睨みつけると、二人が竦み上がったように背筋を伸ばした。

「俺たちの仕事は貸した金を回収することだ。別に相手がどんな方法で金を用意したかなんて関係ない。さっさとその金を詰めろ」

「け、けど兄貴……」

「何だ岡崎？ お前も死にてえのか？」

俺に口答えしようものならぶっ殺す。その殺意が伝わったのだろうか、岡崎は生唾を飲み込み、お金を詰めることを再開した。

それを見た高木もこちらをちらちら伺いながら詰める作業を手伝う。

俺はそれを黙って見つめていた。

煙草の灰がぽとりと山神の目の前に落ちる。あと数センチずれていたら見事に横向きに倒れる山神の頬にあたっていただろう。

そこからは詰め終わるまで沈黙が続いた。

おそらく俺の殺気を感じ取っているのだろう。

詰め終わってようやく岡崎が口を開いた。

「詰め終わりました」

高木が隣でポストンバッグを抱え、頷いた。

俺はそれを見つめ、頷き顎で外に出るよう促した。二人はそれを素早く理解し、廊下に向かって歩いて行く。

山神はどこか疲れ、諦めたように横になったままだった。

ゴミに埋もれ、グレーのカーペットに倒れるそのざまは屍となんら変わらない。ここから俺たちが立ち去った瞬間、静けさが訪れるだろう。

少し前まで響いていた子どもの声はもうない。しかし脳に刻まれた笑顔と耳にこびりついた声は消えやしない。

それにもがき苦しむ事になるだろう。売った事の後悔、自分の過ち、全てに気付いて全てに狂えばいい。痛感すればいい。世界の残酷さを。

終わったことは、全て取り返しは付かない。戻れやしない。  
俺がしゃがむと、山神はゆっくりと視線をこちらに向けてきた。  
その視線に向かってただ一言。

「楽になれて良かったな？」

淡々とした、冷たい、感情を持たない声。  
その言葉に山神の目が見開かれた。じわりじわりと潤む瞳。  
そしてゆっくりと体を起こし、すぎるような視線を向けて来る。

「と、トーマは……トーマはどうなるんだ？」

「さあな。あんたがしたことだろう」

「そ、そうだけど……でもそういった世界にあんたは詳しいでしょう？ 取り戻すことは、  
できないのか？」

土壇場であがいてどうにかしたって所詮その場しのぎでしかない。  
だがその、その場しのぎの代償は大きい。  
それに今更気がついても遅い。

「海外にでも売り飛ばされて奴隷にでもされるんじゃないか？ 俺は知らないしどうに  
もできない」

やっぱり取り戻そうなど甘い。

「そこをどうか……まだ九歳なんだ！」

すがりついてくる姿は鬱陶しい。どこまで人に甘えれば気が済む。  
俺は肩を掴んでくる山神の手をはがし、右手の手首を握った。

「あのな？」

「……」

「もう、終わった事なんだよ」

「っ！」

容赦ない現実を突きつけ、その握った手の平に煙草を押しつけた。

「うがっ！」

山神は熱さに手を引っ込めようとした。だが俺は力を弱めたりせず、握り続けた。そ  
のまま煙草を握りつぶさせる。

山神の顔が歪んだ。

しかし声を上げればもっと何かがあるということを学んだのか、必死に声は押し殺し  
ていた。

俺はその様子を黙って見つめ、やがてゆっくりと手を離した。

その瞬間山神はすっと手を引っ込め、煙草を落とした。

痕のついた掌は赤く痛々しい。だが同情などない。

俺は立ちあがり、踵を返した。そしてリビングを出る直前、俺は肩越しに振り返り言  
った。

「二度と会わないことを、願っている」

その言葉に返って来る返事はない。あったとしても待つ気はなかった。

そのまま廊下を突き進み、家を出る。

家の外では舎弟二人が待っていた。

空は明らみ始めていた。

「兄貴……」

「岡崎、帰ったらすぐ山神トーマの居場所について調べておけ」

「……兄貴！」

どこか決まり悪そうにうつむいていた岡崎の顔がぱっと上を向く。

だが俺の視線は岡崎ではなく、家の前に倒れる持ち主を失った小さめの自転車に向けられていた。

持ち主を失くした自転車はじきに捨てられることだろう。

また一人、大人の都合で子どもが闇夜に引き込まれた。

「お兄ちゃん！」

どこかで幼子が俺を呼んだ気がした。思わず辺りを見回す。

もちろんこんな明け方に幼子どころか大人さえいない。いるのは人相の悪いスーツを着た俺たち三人だけだった。

「ひなたの兄貴……？」

高木が心配そうに顔を覗きこんでくる。

俺は頭を軽く振り、歩き始めた。

「行くぞ」

「おっす！」

二人の声が重なり、足音が続いた。

初夏の風が煙草の匂いを染み込ませた髪を揺らした。

背後では倒れた自転車の車輪が、カラカラと乾いた音を立てて回転したのだった。

「兄貴！」

事務所で煙草を吸っていると、岡崎と高木が勢いよく部屋に飛び込んできた。

一番奥の椅子で座って新聞を読んでいた組長も何事だと言わんばかりに顔を上げる。

「随分騒がしいじゃねえか」

組長の野太い声が響く。その声にもびくりと肩を震わせた。

それでも興奮は隠せないのか、勢いよく俺の前までやって来る。

そして汗を拭うこともせず、向かい合う椅子に腰かけた。振動で目の前のテーブルに置かれた灰皿が揺れる。

「山神トーマの居場所がわかりやした」

そう切り出したのは岡崎の方だった。高木はさすがに汗が酷いのか、スキンヘッドをハンカチで拭いながら隣で頷いている。

やはり高木の方は本気でダイエットさせた方がいいかもしれない。

そんな思いを胸にちらりと高木の方を見つめ、すぐに岡崎の方に視線を戻した。

「で、どこで何してる？」

「簡単に言うとどっかの企業で金持ちの見世物として使われているようですね」

「詳しく聞かせろ」

俺が身を乗り出し、灰皿で煙草の火を消すと、二人は顔を見合わせて申し訳なさそうに項垂れた。

「それが……詳しいことは聞けなくて」

「はあ？」

「で、でも兄貴！ こ、これを……！」

俺が眉間に皺を寄せた瞬間高木がポケットにハンカチをしまう代わりに、何か一枚の紙を取り出した。

「なんだ？」

受け取って目を通す。

「金持ちに紹介として配ってるチラシらしいです」

高木がおずおずと答える。

俺は二人にちらりと視線を向け、チラシに戻してからタイトルを読み上げた。

「兎狩りゲーム……？」

背景は赤い目を輝かせる白い兎の写真で、文字は黒い明朝体でタイプされた何の工夫もされていないものだった。

ただどことなく悪趣味な感じはする。

あとはただ次回開催日というのと注意事項として「お一人様百万円から」とだけ書かれていた。

「見世物……つまり、賭け金が百万から、ということか」

「まあだろうな」

「組長は何かご存知ですか？」

俺が振り返ると、組長は広い肩幅を椅子一杯に預け、葉巻を灰皿に置いた。

組長の左目は、昔組同士が争った時に付けられたという傷が生々しく残っている。

だからこそ吊りあがった目、骨ばった頬骨、口元に伸びた髭、全てが一層怖く見える。舎弟たちも俺のこと以上に怖がっているし気を遣っていた。

「噂に少しだけ聞いたことがある。最近金持ちの間で話題の遊びだそうだ」

「一体どんな……？」

「名前の通りだ。どこからともなく狩人を集めて来て、兎を殺させるそうだ」

にやりと笑う組長の歯は黄ばんでいた。

俺は舎弟の方に向き直り、もう一度チラシを見る。

「これはその金持ちに紛れこむことは可能なのか？」

「いや、会員制になってるそうでなかなか新規は入れないって話です」

「ちっ……」

俺の舌うちに岡崎が、高木へ助け船を求めるような視線を送った。

それに高木が軽く首を振った。

「なんだ？ まだ情報があるのか？」

目を細めると、二人はすっと視線を逸らした。

はっきりしない態度である。

「さっさと言ったらどうだ？」

「……」

「ちっ」

「狩人ならっ！」

「馬鹿高木お前！」

「だって……」

自分を小突いてきた岡崎に見ろよと言わんばかりに俺の方をちらちらと見つめて来る。

それに答えて岡崎もちらちらと俺の方を見ては、項垂れた。

そして観念したとでも言うかの如く岡崎がゆっくりと口を開いた。

「狩人の方なら、参加者募集しました」

「今日の夜、一九時に第三倉庫集合だとか」

高木が続く。

「じゃあ山神トーマはその狩人として参加させられているということなのか？ それで兎殺しを？ 一体何のために……？」

俺は顎に手を当て、考えた。だが、あまりにも情報が少ない。ゲームの趣旨も、何が賭けとしての楽しさなのかも分からなかった。

「考えるより行った方が早い。組長」

「待ってください兄貴！」

「そうですひなたの兄貴！」

二人して必死に止めて来るのみならず、高木においては名前と呼んできたことに苛立ちを覚える。

こいつは一体何度言えばわかるのだろう。

しかし怒るより先に話を聞く方が今回は優先だった。

「これは平気で死者が出るって話です。兄貴に行って欲しくない」

「なんだ岡崎？ 俺が死ぬとでも言いたいのか？」

「そ、そうじゃないんです！」

「高木まで熱くなって珍しい。さっさとお前たちの持ってきた情報全て吐き出しちまえよ」  
組長が鬱陶しいと言わんばかりに口を開く。

その言葉に岡崎は目を伏せ、覚悟を決めたように話し始めた。

「どうやらそのゲーム、山神トーマだけでなくもう一人……」

一瞬の間が開く。

「大空雪菜、つまり姐さんも参加しているらしいです」

「っ……！」

その言葉に俺は頭を強く殴られたような気がした。激しい目眩を覚える。

「……それはどこで聞いた話だ？」

うまく言葉を処理できず、吐き出すことのできない俺の代わりに組長が尋ねる。

「このチラシを配っていた男です。なんて言っても今回の大目玉だとか……」

「それなら、なおさら俺が行かねえと」

なんとか言葉を絞り出す。

その言葉に二人が首を振った。

「だからこそ行って欲しくないんです」

「だって兄貴は、姐さんのためなら自分の命を投げ出しかねない」

高木のあとに岡崎も俯いて続けた。

「俺たちは兄貴が死ぬとかじゃなくて、命を投げ出すような事をしてほしくねえんです。兄貴はいずれ組長になれるお方だ。そんな方にここで投げて欲しくねえんです。だからそれなら俺たちが行きます。兄貴なんかよりずっと命の価値のねえ俺たちが！」  
意を決したかのように岡崎が一気に吐き出した。

その目はまっすぐ俺の方を見ていて、必死に訴えていた。だがそれを見据えたうえで俺は同じようにまっすぐ岡崎を見つめて口を開いた。

「拳銃と弾、サバイバルナイフを持ってこい」

「兄貴っ！」

岡崎がテーブルを叩いて立ちあがった。

テーブルの上の灰皿が揺れる。その振動で灰皿の中の吸殻が机の上を転がった。

「兄貴！ なんで分かってくれないんですか！」

「岡崎……やめ」

「お前は黙ってろ！」

隣で服の袖を引く高木を振り払い、岡崎が唾を飛ばして叫ぶ。

「俺は兄貴の命が危険に晒されるより俺たちが晒された方がマシだって言ってるんすよ！ 確かに貴方は強いお方だ！ 初めて会ったときから俺たちを負かした」

そう、俺がこの組に入ったのは中学校卒業してからだった。

育児所から通い、卒業したら育児所を出て高校など行かず働く予定だった俺は、希望を失い、光を失い、絶望に満ちた夜道を歩いていた。

その時この二人に出会い、というかぶつかり絡まれたのだ。

だが、幼いころから家にヤクザが取り立てに来ていたし、ほぼ怖いものなど存在しない域に達していた。

だから怖くなかったし、万が一死んだところで悔いもなかったし、死ぬことにすら恐怖を感じなかった。だからこそいつらが脅してきたところで怖くなどなかったし、刃物にも動じず、それどころか奪い取って岡崎の首に突きつけてやったのだ。

すると偶然的にもその二人の組長が俺の家に取り立てに来ていた、大平組だったのだ。

そして気に入られると同時に父親が残した借金返済のため、俺も組に入り、今に至る。

そう、俺に恐れるものなどない。だからこそ。

「今までも関わってきた奴が黙らなかつたこともなかつた。だけど今回は特殊事例だ。だから」

ガンっ！

「っ……！」

ごちゃごちゃうるさい岡崎の言葉が遮り、テーブルを飛ばした。

もし岡崎が尻もち付いていなかったら顔面にぶつかっていたと思うし、高木も震えて立ちあがり下がっていなければなんらかの被害が出ていたかもしれない。

だが俺には関係なかった。そんなこと微塵も考えることなく、座ったまま蹴りあげていた。

逆さになったテーブルと散らばった吸殻が空気を切り裂いた。

恐る恐る岡崎が顔を上げてこちらに視線を向けてきた。

俺は立ちあがることもせず、ただじっと座って足を組む。そして虫でも見るかのような視線を送り、口を開く。

「お前は誰に向かって口を利いてんだ？」

その低くて淡々とした声に岡崎の顔がさーっと青ざめていく。

「別に俺はお前らに守ってほしいなんて思ってないし、何よりも俺の妹だからって理由だけで姐さんと呼んでるだけの関係だろう。そんなお前らに雪菜の何がわかる？」

「……」

「二度も同じことを言わせるのか？」

とどめの一言を付け足すが、もう二人とも腰を抜かしているようだった。一步も、ほんの少しも動けないという感じだった。

「何ボケっとしてる。これ以上ひなたを怒らすな。事務所がめちゃくちやにされる」

そこで組長が新しい風を吹かせるように口をはさむ。

その声はどこか愉快そうである。

おかげで二人もふっと我に返ったのか岡崎は立ちあがり、高木も震えを止めて銃とナイフがしまわれている棚まで走った。

そして岡崎がリボルバー式銃とオートマチック式銃を一丁ずつ、あとは弾を持って戻って来る。それに対し高木がサバイバルナイフを一本持ってくる。

俺の前に膝をつくようにして差し出してくる。

「どちらを持って行かれますか？ リボルバーとオートマチック」

岡崎の震えた声が尋ねて来る。

俺はどっちも掴み、リボルバー式をベルトに装着しオートマチック式を内の胸ポケットにしまう。

「たかが兎と言えど油断はできない。両方もらって」

そのまま弾をポケットに詰める。

次にサバイバルナイフを受け取ると、ズボンをまくって靴下の中に入れる。

そのままちらりと腕時計に視線を向けると、針は一四時を指していた。

「一九時に第三倉庫だったな」

俺が静かに言うと、二人は戸惑った目をしながらも頷いた。

第三倉庫までここからなら歩いて三〇分もかからないだろう。だが雪菜の事を聞いた今、ただじっとしていることなどできなかった。

もしかしたら、生き別れた妹に、もうこの世に存在していないかもしれないと思っていた妹に再会できるかもしれない。

俺は足を解き、立ち上がる。

「も、もう行かれるのですか？」

岡崎の問いを無視して玄関まで歩いて行く。

「く、組長！」

しびれを切らした高木が組長に助け船を求める。

すると組長が俺の名前を呼んだ。

「ひなた」

さすがにそれを無視することはできなかった。

俺はしぶしぶ足を止め振り返る。

振り返った先にはいつもと変わらず、社長椅子のような大きな回転する椅子に深く腰をかけ、葉巻を吸っていた。

短い髪は動きが無く、冷めきった目は何を考えているのか全く読めない。何を言われるかなどまるで想像がつかない。

「勘違いすんなよ」

まず組長は短くそう言った。

俺が眉根を寄せると、組長は葉巻を灰皿に押し付けた。

ねじり潰されるような葉巻は、まるで自分に見える。

「お前の親父が残した借金はまだ残ってる。その借金返済が終わるまでお前は俺の元で働き続ける義務がある」

「だから？」

「逃げようとか、死のうとか馬鹿なこと考えるんじゃねえぞ」

「組長、俺を誰だと思ってるんですか？」

「もし死のうものなら、生き残った妹を俺たちが買い取って稼がせることになるからな？」

俺は一瞬間を開けた。

「雪菜が活着ているとは限らない。あくまで噂だ。それに仮に生きていたところで、生きて帰ってくるとも言えない。もしかしたら殺される可能性だってある」

「そうやって諦めてる時点で何も手には入らねえぞ」

鮮明に残る傷がある瞳が俺を見据えて来る。

沈黙が続いた。

冷たい空気が背中を這う。

「話は終わりですか？」

沈黙を破ったのは俺の感情を灯さない声だった。組長は一瞬間を開け、短く答えた。

「ああ」

俺はそれを聞いて踵を返し、事務所を後にする。

外に出た瞬間初夏の眩しい光が俺を照らしてきた。

幻の妹に思いを寄せ、わずかな希望が胸を焦がす。そんな俺を嘲笑うかのように今年初めて、蟬が煩く啼いた。

第三倉庫につくと、そこには怪しい白いマイクロバスが数十台並んで構えていた。

倉庫前の砂利道に並ぶマイクロバスは不吉な予感を乗せている。

近づいて行くと、係りの人だと思われるスーツ男が立ちはだかつて来た。

「狩人希望者の方ですか？」

「大空雪菜はいるのか？」

「狩人希望者の方ですか？」

「ちっ」

俺は男の胸倉を掴んだ。

「答えろ。大空雪菜はいるのか？」

あくまで冷静に、低い声で尋ねる。

だがスーツを着た、まるでロボットのような表情を失った男はびくりともしなかった。

ただ光を灯さない、濁った瞳が俺を見つめる。

「今の段階で情報を教える事はできません」

男は淡々と答える。

「最後の質問だ。大空雪菜は、いるのか？」

これがラストチャンスだ。もし答えないようなら武力行使もやぶさかではない。

そう思って掴んでいない方の手で胸ポケットの銃に触れようとした、その時だった。

「しつこいお方ですね」

カチャリ……。

何か固いものが胸の辺りにあたっているのを感じる。

顔は男に向けたまま、視線だけソレに向けた。

黒い銃口がぴたりと胸に押し当てられていた。ハンマーが起こされた状態の今、本当にトリガーを引けば発砲するだろう。

「こちら最後の質問です。狩人希望者の方ですか？」

男の声に感情は一切なかった。

俺は視線を男の目に戻す。

威嚇するでもなく怒るでもない、ただただ無感情に冷めた目が俺の答えを待っている。

俺はゆっくりと掴んでいた手を離し、一步後退した。そして両手を軽く上げ、敵意がないことを示す。

「……ああ」

歯切れの悪い言葉で返すと、男は銃をしまった。

「ではこちらへどうぞ」

男は淡々と俺を案内した。

予想以上に黒い世界に来てしまったかも知れないと直感が告げていた。もちろん元々ヤクザで白い世界にいるわけじゃあないから怯えるわけではないが。

だが賢く生きなければいけない、そんな気がした。

黙って男から五歩分くらいの距離を開けながら後ろをついて行くと、一台のバスの前で止まった。

閉められた扉を前にして男がこちらを振り返る。

「それでは始めにこちらのバスにて移動していただきます。おそらく長旅になるかと思いますので寝て頂いても構いません」

「長旅？」

「はい。詳しくはまだお話しできませんがここから大きく離れます」

確かにここらへんで兎を離せる場所はないかもしれない。

俺はそれ以上何も聞かず、先を待った。それを察した奴が続きを話す。

「それでその際ですね、必ずこちらのご着用をお願いいたします」

そう言って男が差しだしてきたのは黒いアイマスクだった。

すごく妙だった。バスの窓は全てカーテンが引かれていて、外から中を覗くことも、中から外を眺めることもできる様子ではない。

確かに寝る上ではありがたいのかもしれないが、カーテンが閉まっている以上明るさは閉ざされている。

一体何の意味があるのか。

「またこちらのアイマスクは到着し、下りるまで決して外さないようお願いいたします。外しますとこれからのゲームにてペナルティーが科せられるのでご了承ください」

なおさら妙だった。一体それにどんな意味があるのか全く見当がつかない。

だが今は妹のためにも不祥事を起こすべきではなかった。

俺は黙ってマスクを受け取る。

「それではご着用ください」

その言葉にも黙って従い、目を覆った。

視界が一切閉ざされ、闇が広がる。音だけが状況を教えてくれていた。ガラガラと大きな音はきっとバスの扉を開ける音だろう。

「それでは、中へどうぞ」

何故男に男がエスコートされなければならないのか。手を引かれ、マイクロバスの中へと誘導されて行く。

「足元にお気を付けください」

ご丁寧にも。

席まで案内され、更にはリクライニングすらしてくれる。

「後ろの方にご迷惑になりますので、このくらいで申し訳ありませんが失礼します」

三十度くらいは倒れたらろうか。少なくとも寝るのにちょうどいいとは言い難かった。

夜行バスにでも乗っている気分だ。……乗ったことないが。

まあ最悪寝られなくても問題はない。一晚寝ないことくらいざらにある。体は痛みそうだが仕方がない。

「それでは、皆さまの幸運とご活躍を祈りまして、素敵な狩りを」

わずかにバスが揺れた。

おそらく男が下りたのだろう。そしてそのまま扉が閉められる音が響き、車内は静けさに包まれた。

よく耳を澄ませば人の呼吸音がした。俺の他にも数人乗っているのだろう。正確な人数は把握できない。

確かアイマスクは外してはいけないとは言っていたが、話してはいけないとは言われていないはずだ。

何か話しかけようとした時、エンジン音が大きく鳴り響いた。

そのまま車は動き出し、どこかに向かって走り出した。

その瞬間なんだか妙に眠気が襲ってきた。アイマスクの下の瞼は重く、自然と目を閉じてしまう。

体もなんだかだるく、リラックスできる体勢ではないのにどんどん力が抜けていく。そして気がつけば意識も朦朧とし、そのうち完全に失ったのだった。

目を覚ました時には、まだ車は走っているようだった。

一瞬アイマスクを外そうと手を伸ばしかけたが、ふっと頭の中で警報がなった。外せばペナルティがあると。

時間も場所も分からないまま、ただ黙って車が止まるのを待った。

正直ペナルティが何なのか分からなくても、そんなに大きな障害になるとは思っていなかった。だが、あるよりはないう方がマシだと冷静に考えられる。

それだけ頭が冷静にクリアに働いていた。眠気が嘘みたいに飛んで行き、寝起きがこんなにはっきりと覚醒している、というのが不思議だった。

そんなことを考えていると急に車が止まった。エンジン音が消える。

それから数十秒後、ガラガラという音を立ててドアが開いた。

「どうぞアイマスクをお外してください」

男の声がした。

俺はゆっくりとアイマスクを外す。

開いた扉から漏れる明るい日差しに思わず目を細める。どうやら一晩走っていたらしく、外は朝を迎えていた。

「それでは降りて来てください」

スーツを着た男が降りるよう誘導する。

その誘導に沿ってぞろぞろとマイクロバスからは人が降りていった。

俺が乗っていたバスから降りて来たのは、俺を含めて八人の男女だった。男が五人で女が三人。

俺と同じようにスーツを着た男もいれば、ワンピースに身を包んだ女、いかにも狩りをしに来ましたというミリタリー姿の男など共通点は何もなかった。

しいて言うなら女はみんな怯えた顔をしている。

まあ無理もないだろう。いきなり一晩走って知らない土地に連れて来られたのだ。怯えるのも仕方がない。

実際俺自身もさっと辺りを見渡したところ知らない土地だった。

倉庫に並んでいたあの数十台のワゴマイクロバスはどこかに消え、辺りにはちょこちょここと並ぶビルが広がっていた。

そこそこに発展しているようだが、東京ほど都会と言う感じはしない。ただそれはあくまで建物の話だ。

街並み自体はどこの田舎よりも人がいない。というかむしろ車一台も通っていない。おかげでワゴンが道路のど真ん中に止まっても一切人さまの迷惑になることはなかった。

だけど不思議と信号は青から赤に変わり、近くのコンビニも、点々と建つビルも、電気がついていてまるで営業しているようだ。

人は一人も見当たらない、だが街は生きている、という奇妙な世界でただ一人、スーツの男の声だけが響いた。

「これよりゲームのルール説明を行います」

その声にきょろきょろと辺りを見回していた八人の視線が集まる。

「一度しか言いませんのでお聴き逃しくださいませぬようお気を付けください」

そう注意し、男は淡々と続けた。

ゲームルール

一つ、ゲームは三日間このゴーストタウンにて行われる

一つ、三日以内に狩人となって兎を狩ってください

一つ、狩った成功報酬として一羽につき百万円貰うことができます

一つ、その百万はあらかじめ配ったクレジットカードに入り、生活費となります

一つ、しかし兎は仲間意識、親子の繋がりが強い生き物です。時に蛇にさえも牙を剥くので気をつけましょう

一つ、また兎は雇われています。時に酷いことをする人には牙を剥きます

一つ、怪我や死んだ場合の責任は一切負いません

一つ、三日後生還した者のみクレジットの残高を賞金として差上げます

一つ、最後にこの世の中は甘くないので強く生きましょう

「以上です。それではルールにあったクレジットをお渡しいたします」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！」

男があまりにも冷静に淡々と先を進めようとするのをミリタリーの男が止める。

男はわずかに眉を寄せた。しかしあまり表情を変えず「なんですか？」と言いたげに相手の方を見つめる。

「兎って襲ってくるのかよ？」

「あなたは兎の習性やカチカチ山の話を知らないのですか？」

それはどこか小馬鹿にするような口調だった。

ミリタリー男の目元がピクリと痙攣する。

「習性はともかくカチカチ山はただの童話だろう！ 本当に兎がタヌキの柴に火をつける事できるわけない」

「だから兎は雇われているのです。いわば媼をタヌキに殺された翁が雇い主だと思っただけで構いません」

「意味わかんねえ！ ちゃんと説明しろよ！」

どこまでも馬鹿にするような口調に苛立ったミリタリー男がスーツ男に掴みかかる。  
ネクタイを掴み、威嚇する。

すると、スーツに身を包んだ男はすっと足を上げ、そのまま相手の鳩尾辺りに蹴りを入れた。

「ぐはっ！」

ミリタリー男はあっけなく手を離し、尻もちをつく。

そんな男を虫けらでも見るような目で見下ろし、スーツの皺を伸ばす男はあまりに冷酷だった。

だが次の瞬間、もっと残酷で冷たいものを目の当たりにする。

「そもそもあなたは最初のルールを破りました。道中マスクは外さないように、と言いました。けれどあなたは途中で外しましたね？」

氷よりもずっと冷たい声に倒れる男は身を震わせた。

お腹をさすりながら座ったまま答える。

「そ、そりゃ目が覚めたからつい……」

目が覚めた、つまりこの男も寝ていたことになる。この奇妙な状況下で寝ていたのは俺だけではない、ということは……。

「ルールはルールです」

思考を遮るようにスーツを身にまとった男が内ポケットからリボルバー式の銃を取り出す。

「ちょ、ま、は？」

男は状況を読み込めず間抜けな声を漏らす。

「ペナルティがあると言ったでしょう？」

「そ、そんなペナルティだなんて聞いてねえぞ！」

「ご安心を。この銃には六弾中三弾しか入っておりません。運が良ければノーペナルティでゲームに参加できますよ」

その瞬間初めて銃を持つ男の表情が変わった。

「ねえ、優しいと思いませんか？」

にやりと笑う姿は不気味な道化師のそれだ。三日月形に歪んだ口元が人の不安を煽り、不快感を植え付ける。

「まあ運が悪ければ兎の説明する意味もない、ということで」

「ちょ、ちょっと待てよ！ なあ助けてくれ！」

誰に求める救援なのか分からないが、どちらにせよ助けてくれる人は現れはしない。無駄な救援に答えるのはリボルバーのシリンダーがカラカラと勢いよく回る音。そしてカチャリとシリンダーがフレームに装備され、撃鉄が音を立てる。

不吉な笑みを浮かべる男の指がトリガーに触れる。

「待ってくれ頼むほんとに俺はちょっと遊ぶ金が欲しかったただだから助けて

——」

パンツ！

無様に叫び請う男の言葉は躊躇いなく遮られた。

銃声音に恐怖する三人の女性の悲鳴が響く。中には顔で手を覆い、中には耳を塞いでしゃがむ者もいた。

男でさえ首を捻り、視線を背けていた。

俺と、もう一人同じスーツ姿の男だけがその、ペナルティーを科せられた男の死体を見つめていた。

鳩尾の痛みなど比にならないであろう、眉間の痛みにミリタリー男の目は見開かれている。

どろりと溢れる紅い液体が鼻筋を通して流れ、耳の中にたまり始める。

焼けたアスファルトにもじわりじわりと赤黒い模様が広がって行く。

それは濃密すぎる生臭さを放ち、風に乗って鼻腔を襲ってきた。

「どうやら、当たりだったようですね」

銃をしまいながらそう口を開く男の声はどこか、楽しげだ。

そこで一人の女が耐えかね、その場に膝から崩れるようにして腰を抜かした。そしてそのまま吐瀉物を道路にぶちまける。

辺りに胃液の酸っぱい臭いも交じり、最悪な状態になった。

火薬と血と、胃液の臭いが鼻を刺激する。誰もが息を止め、表情を歪めた。ただ一人、銃を撃った男だけは淡々と先を進める。

「では話を戻しましょう。今からルールにあったクレジットカードをお配りいたします」

男は何事も無かったかのように無表情に戻り、ズボンのポケットから八枚のカードを取り出した。

一枚を既に息絶え、眉間から血を流して仰向けに倒れる男の顔に投げつけた。

ビタツという音をたてて紅の上を滑り、紅に沈む。

銀色の変哲もないカードは紅い血に濡れていく。

しかしそれにもあまり目をくれることなく、カードを持つ男は順番に手渡してきた。

俺の前に嘔吐した女にカードを差し出したが、女は受け取る余裕などまるでなかった。すると、それに対しても何の慈悲も無く問答無用でカードを吐瀉物の上に落とした。

「受け取らぬなら構わない」

冷たく突き放す声と吐瀉物に沈んでいく銀色のカードが彼女を絶望に突き落とし、さらに追い詰める。

彼女は二度目の嘔吐をする。

それを横目で見てみると目の前にカードを差し出された。

ちらりとカードに視線を移し、ゆっくりと相手の目を見つめる。

死んだ魚のように冷たく、冷酷なそれは見ていて気味が悪かった。

もちろんそれは俺が言えた性質ではない。俺や俺の周りだって似たようなものだ。どこか死んでいて希望を持たない、暗い闇のような瞳。

だがそんな慣れている瞳であるにも関わらず、目を離せないままカードを受け取る。

その瞬間男はにやりと笑った、気がした。いや、気のせいかもしれない。

男は俺から離れ、全員と平等な距離を保てる位置に立つと再び説明に戻った。

「このカードには既に十万入っています。カードに対する規則は特にありません。一人何枚持っても構いません。その時手にしている人の持ち物です」

それは意味ありげな言葉だった。

何枚持っても構わない、その時手にしている人の持ち物。

何故男は死んでいるはずの狩人にもカードを渡したのか？ つまりそう言うことだ。カードには既に十万入っていると言っていた。

「いいですか。このカードは生活費です。三日間生き残るための生活費になります。宿も食料も自分で確保してください。そしてその際に忘れないでいただきたいのが、兎はいつでも襲ってくる可能性があるということ。宿は値段に見合ったセキュリティーになっていますのをゆめゆめお忘れなきようお願いいたします」

こいつの話を全部理解できた人は一人もいなかったと思う。ただただ目の前の非日常的な情景を見つめ、呆然とするしかなかった。

けれど男に容赦という言葉や慈悲という言葉は通じることが無く。

「それでは皆様の活躍を祈っておりますよ」

ゲームの始まりとも言える言葉を残し、マイクロバスに乗って走り去って行ってしまった。

その際にUターンのため、ぐしゃりと踏まれた死んでいる男の腹は潰れ、背骨がボキッという音をあげて折れた。上半身と下半身がタイヤによって千切れるように離れ、内臓が破裂したことにより一層血が溢れてカードを濡らしたのだった。

残された俺を含む七人はその場に立ち尽くす。

じりじりと昇り始めた太陽が眩しい光を降り注いでいた。肌が焼けるのがわかる。

俺は空を見上げ、俯いて歩き出した。

「ちょ、あんた、どこ行くのさ！」

低すぎず、高すぎない、聞き取りやすい声が背中にぶつかった。しかしそれに振り返ることもせず、俺は眉間を打ち抜かれ、内臓を潰され、色々原型を失った男の横で足を止めた。

そして血に濡れるカードを拾い上げる。

生温かい液体に指先が触れ、爪が紅く染まった。つんと鉄錆の匂いが鼻を突き刺す。正直気持ちがいいものではない。けれど知らない感覚でもなかった。

所詮俺の人生はこのクレジットカードのように血に汚れ、穢れた金で成り立っているようなものだ。

俺はカードを持ったまま歩き始めると、再び少し高めの爽やかボイスが飛んできた。  
「待って！ 俺、あんたと話したいんだけど！」

声のみならず足音も迫ってくる。

俺はそれを全て無視して歩き続ける。すると追いついた男が俺の目の前に立ちはだかり、道を阻んだ。

「どこ行くつもりだよ？」

俺を見つめる二重瞼に覆われた目は光が強く、真っ直ぐだった。俺よりも身長が小さく、下から見られているのにどこか威圧的で、挑戦的だ。

「お前には関係ないだろう」

けれどそれほど事で臆するほど俺も柔な世界で育ったわけではなかった。

俺はそいつを無視し、脇を通り過ぎようとする。だが奴は俺の手を掴んできた。

「あんたは、あれを見て何も思わなかったのか？ ここは狂ってる。まじめにこんなところにいる必要はない。抜け出す方法を探す方が賢明だ」

「お前の覚悟ってのは、その程度のものなのか？」

腕を振り、手を振りほどく。

「バスの中には睡眠剤がばら撒かれていた。その時点で異常で狂っていることくらい気が付いている」

俺の言葉に男は目を見開いた。

「気が付いていたのか？」

「当たり前だろう。じゃなきゃこんな奇妙な状況下で何人も爆睡できるわけがない」

「そこまでの観察力と思考回路を持っているならなおさらだ。俺と協力してくれ。あんたには借りがある。ここから抜け出そう」

そう言って男は握手でもするように俺の手を握って来た。

気持ち悪い奴だ。それに借りとは何の話か。俺とこいつが会うのはおそらく初めてのはずだ。

俺はうんざりして再び手を振り払った。

「俺は狂っていると知っていて尚残る理由がある。逃げ出す気はない」

はっきりと告げると、男はまた目を見開いて肩を落とした。そしてわざとらしい溜息を洩らす。

「はあ……。わかった。じゃあせめてその残る理由を教えてくれ。協力したい」

少し呆れているような、疲れているような声ではあるが、口調は強かった。しかしこちらからすれば迷惑な話だった。

「協力などいらぬ。一人で十分だ」

「俺があんたに協力したいんだ。お礼をしたい」

ぐっと寄せて来る顔は俺と違って垂れ目の二重で、可愛らしい整った顔立ちをしていた。中性的な作りは美男子と言えた。



そう吐き捨てると、男の手から滑り落ちたチェーンソーが地面に叩きつけられ、そのまま前のめりに男は倒れる。それを即座に下をぐるようにして女は、ビルと男の間から抜け出す。

男は見事に顔面をガラスに強打し、そのまま息絶えた。

弾がクリーンヒットした後頭部からは血が溢れだし、辺りを一層生臭くした。

「ちょ、あんた……」

協力したいと言う割にこの程度で驚くなど笑わせてくれる。

俺は垂れ目男を無視し、肩を震わせる女の元に向かった。女は俺を見てさらに震えた。

そりゃ目の前で人殺されて、こんな鋭い目つきをした強面野郎が近づいてくりゃあ怯えもするだろう。

分かっていることだ。

女の目の前まで来ると、足元に落ちている彼女のクレジットカードを拾った。そのままそれをズボンのポケットにしまう。

「っ……」

女は涙にぬれた顔でこちらを見上げて来る。

「ちょ、あんたさすがに……」

奴が近づいて怒鳴りかけると同時に俺は、胸ポケットから二枚のクレジットカードを取り出した。

それを彼女に差し出す。

「血は拭い取ったつもりだ」

「……え？」

「ここはお前みたいなやつが来るような場所じゃない。この二枚を合わせれば百二十万入っているはずだ。この先にホテルが見えるだろう」

俺の言葉に女は首を傾げるばかりだった。理解能力のない女だ。

「早く行け」

「あの、でも」

「また兎に襲われたいのか？」

「っ！」

睨みつけると、女は短く悲鳴を上げ、震える手でカードを受け取り走り出した。

あとはあのビジネスホテルに兎が入り込まないことを祈るばかりだ。

俺は女の背中を見送ると、そのまま反対方向に歩き出した。

すると面倒な奴が隣を追ってきた。

「やっぱあんたは俺が見込んだだけある！ 根はいい奴だろ、あんた」

キラキラと輝いた目がこちらを見つめているが、無視である。一体何を言っているのか。

俺はそのまま無視して歩き続けると、奴が急にひょいと目の前に出てきた。即座に足を止める。じゃなきゃ体当たりするところだ。

実に迷惑極まりない。

しかし俺が不機嫌に目を細め、睨む一方で、相手は嬉しそうに目を細め、にっこりと笑うのだった。

「俺、伊座波誠！ よろしくな」

唐突に名乗られ、手を差し出される。

俺はその手と顔を交互に見つめた。相手はご丁寧にも握り返されるのを待っている。だがそれに対し、くだらないと口には出さないまでも表情で分かるような態度で横を通り過ぎようとした。

ところがいきなり通り過ぎる瞬間腕を掴まれた。

「ちっ」

自然と舌うちが零れる。

「俺と組もう。絶対損はさせない」

強く握られた手を振りほどき、しぶしぶ振り返って誠と名乗る男と向き合う。

俺は肩を竦め、口を開いた。

「お前が俺に執着する意味は何だ？」

「命の恩人だからだ」

「……はあ？」

俺の怪訝そうな顔を見つめ、誠は笑ってポケットから何かを取り出した。握りしめていたものを俺の目の前でゆっくりと開く。

掌の上に乗っていたのは、赤いバッジだった。

「これに見覚えがあるんじゃないか？」

探るような声にゆっくりと視線を相手の顔に向ける。

その時初めてこの男に警戒した。

人当たりの良さそうな、情熱と熱意に燃えた希望の輝く瞳の奥に覗く、獣じみた香りがしたのだ。

獲物を狙うヒョウのような、鋭い観察眼と的確な記憶力。

俺は息を呑むのをこらえ、静かに口を開いた。

「もしかしてあの時の公園で……？」

山神の家に行く前、公園で襲われそうになっていた男の姿を思い返しながらか口を開く。

すると誠は中性的な顔をほころばせながら頷いた。

「ああ。あの時はお酒も少し入っていたし、あんたらが助けてくれなかったら今頃病室か、下手すりゃ土の中だったよ」

笑いながらバッジを再びポケットにしまう。

「着けないのか？」

「そりゃあね。着けたら身元がバレる。それはこういう場じゃ面倒だからね」

予想以上に賢いようだ。

それでいて何故俺がバッジを見ていたことに気がついた？ あの薄暗さで人の視線を追っていたというのか？ それに顔までしっかり覚えている。

俺は探るような視線を向けた。

すると彼はまるで敵意はないと言いたげに両手を顔の辺りまで上げ、無抵抗のポーズを取った。

「安心してよ。あんたのことを刑務所にぶち込む気はないよ」

それはまるで身元を知っているかのような口ぶりだった。

「ぶち込まれる気もないし、助けた覚えもない」

「そんな事言って～。俺はあれを助けられたと認識している」

「それはお前の自意識過剰な考えだ」

この男とあまり深く関わるべきではない気がした。何もかも見透かされそうで、危険な匂いがしてならない。

だが相手は諦めてはくれなかった。

「だとしたらあんたは根が優しい真人間だ」

「はあ？」

拳銃観察眼と記憶力にはそぐわない、頭のネジが抜けている部分もある。

全く読めない男だ。

「あんたは助けたという意識を持たないまま人の危険を察知し、事態を回避した。それは優しいからだ。敵だと見なさない限り、あんたは基本的に人を傷つけられないタイプだ。

だからこそさっきの女性も救った。ちょっとばかり表現は苦手のようなのだが」

分かったような口調をきかれることに腹が立つ。見透かされそう、なのではなく、見透かそうとしているのだ。

俺はそういう人間が大嫌いだ。他人が大して関わりもしない癖に、あたかも分かったような口調をきき、自分だけは分かってやれる、だから心を開け、許せ、そう傲慢に語りかけて来る。そういった様が非常に不愉快で、非常に腹立たしい。

俺はずっと内ポケットから銃を取り出した。

「つまり、俺がお前を敵と見なせば殺すわけだ」

「あんたにその引き金が引けない」

「随分自信ありげじゃないか」

カチリとハンマーがセットされる音が響く。

だが彼の顔に焦りはない。

「理由は二つ」

眉間に銃口をあて、俺自身の眉間は皺が寄る。

「一つ、まずあんたは俺をまだ敵と見なしていない」

何を根拠にそんなことを言うのか。

俺がトリガーに指をかけるのと、奴が口を開くの、そして気配を察知したのは全て同時だった。

「二つ目は、俺がメインディッシュだからだ」

その言葉を聞き終わる瞬間、俺は銃を下ろし、身を屈めて後ろに下がった。

それと同時に元々俺の手があったであろう場所を銃弾が通り過ぎていく。

俺と誠の視線がぶつかり、一瞬の静けさが辺りを包みこんだ。

そして次の瞬間パリアインという派手な音が辺りに響く。

弾は的を外し、素通りして先のビルのガラスを割った。

俺はすぐさま向きを変え、弾が飛んできた方を見る。しかし裏路地に繋がる小道や、隠れるのに最適な建物が並ぶここら一帯に人影はなく、気配も既に感じられなかった。

兎の仕業だろうか。

舌打ちをし、銃をしまうと誠は穏やかに微笑んだ。その顔には「そうすると思った」という言葉が刻まれていた。

俺は奴を睨み、尋ねる。

「お前がメインディッシュてのはどういう意味だ」

その問いに誠が口を開きかけた、その時だった。

キュルキュルキュル――。

この状況には一切似合わない情けない音が響いた。

俺と誠自身の視線が一点に集中する。スーツに隠れた誠の腹へ。

「どっかで食事でもしようか！ ちょうどお昼みたいだし」

「……」

呆れてぐうの字もでなかった。よくこんな状況で呑気に飯の事など考えられるものだ。そして腹時計で時間を把握していることにわずかなる関心を覚えた。

近くのファミレスに入ると、どこにでもあるようなごく一般的な内装が広がっていた。

落ち着いた茶色を基調とした壁やソファは、黄色っぽい食欲をそそる明かりに照らされている。

ソファ椅子とテーブル、向かい合うように二脚の椅子で四人用セットが三十組くらいは置かれている。規模として百は裕に入るだろう、というところか。

だけど当然ながら人は誰一人として存在していなくて、客はもちろん店員すらいない状況だった。

「これ、ちゃんとお飯出て来るのかなー？」

そう言いながら誠はずかずかと店の奥に進んで行き、窓際の席に腰をかけた。それ

も何の迷いもなく上座側に。

別にあまり気にしない方ではあるけれど、高木や岡崎などの舎弟たちは自然と上座を俺に譲ってくれた。

そんなことをぼんやり考えながら無言で向かえの席に着く。

その頃にはもう誠は一人でメニューを眺めていた。本当に自由で自分中心な男だ。「俺決まったけど、えっと、あんたはどうする？」

メニューを差し出され、俺はちらりと奴を一瞥し、メニューを受け取った。さっと目を通した所価格設定自体は日常のファミレスとそう変わらないようだった。

ハンバーグセット九百円とかなら妥当だろう。

「俺も決まった」

メニューから顔を上げると、誠は頷いて一応テーブルに設置されているボタンを押した。

ピンポンというおなじみの音が静かな店内に響き渡る。

しかしその音に反応する人の気配は感じられない。やはりさすがはゴーストタウン。まるでドールハウスの中にいるような錯覚に囚われる。

何もかもがリアルに再現されているはずなのに生命を感じられない、静寂に包まれた世界。

俺が肩をすくめて諦めかけたその時だった。

シャーっとタイヤが擦れるような音がしたと思えば、急に白い人型のロボットが近づいてきたのだった。

「イラッシャイマセ」

機械的な声が発せられる。

「ゴ注文ヲオ伺イイタシマス」

そう言ってカシャッとわずかな音を立て、ハンディーを構えた。

俺たちは目を丸くし、顔を見合わせる。それでも戸惑いながらオーダーをした。

「ステーキセットと」

「俺はハンバーグセット」

「ステーキセットトハンバーグセットデスネ。スーパー、オ冷ハ向コウニアリマスノデ、ゴ自由ニゴ利用クダサイ」

口調は機械的で感情が一切込められていないが、行動は実際のファミレスのウェイトレスと何も変わらなかった。

そのままハンディーを閉じて再び厨房へと消えていく。

そこから数秒俺たちはフリーズしていた。

あまりに画期的であまりに進化したゴーストタウンに驚きを隠せなかった。

このゲームはどれだけお金がかけられているのだろう。

でもそこでふっとこのゲームは大富豪たちの賭け遊びとして使われている、という話

を思い出した。つまりそれだけ金の回りがいいということか。

反吐が出そうな思いだった。

「俺スープと水持ってくるけど、あんたはいる？」

急に思考が遮られた。正面を見ると、垂れ目の穏やかな瞳をこちらに向けた誠が腰を浮かせていた。

「ああ」

俺が短く答えると、誠は「了解」とだけ残してそれらを取りに席を外した。

静けさが辺りを包む。

一八〇センチ近い俺より五センチくらい小さい誠は、背中を見つめると予想よりもしつかりした体格をしていた。

それは穏やかな瞳や中性的な整った顔立ちにはあまりそぐわない気がした。

そんな事をぼんやりと考えながらも俺の興味は薄れ、窓の外に視線が移る。そこにはごくごく普通で日常的な世界が広がっていた。

確かに異常なほど人は少ないし、車通りも一切ないけれど、空は晴れ夏の日差しがアスファルトを焼いていた。

それはあまりに平和的すぎる光景で、自分が今どういう状況下に置かれているのかを忘れそうになる。

そして何よりもここに本当に雪菜が、妹がいるのかどうか、それだけが気がかりであり、夢なのか現実なのか、気を狂わせる材料源だった。

「はい、どうぞ」

現実と夢の狭間を彷徨う俺を、現実を引き寄せるかの如く誠の声がタイミングよく耳をうった。

誠は置いてあったトレイを使って二つのスープとお冷を運んで来てくれた。

それを一つずつ俺の前に置くと、自分も席について自分の前に置いた。そのままトレイは端の方に避けておく。

「いただきます」

誠はかなりお腹が空いていたのか、設置されていたおしぼりでささっと手を拭いてすぐさまスープを口に運んだ。

玉ねぎが引き立つコンソメスープの香りがふわりと鼻をかすめる。

「うん、普通に美味しい」

そこでようやくスプーンを掴み、にんじんやら玉ねぎやらの具材も食べ始める。

そのあほっぽい行動に目を細めつつ、自分におしぼりで手を拭き、食べる準備に入った。

だが自分がスプーンを掴み、手をつけようとした頃には、相手は一杯目を飲み終えていた。

そこでようやく話す余裕も出てきたのか、唐突に口を開く。

「改めまして俺、伊座波誠。あんた、名前は？」

もっとタイミングと状況を考えて発言してほしい。

こちらはたった今、玉ねぎとスープを口に運んだところだ。

もう少し玉ねぎの甘みが広がる美味しいコンソメスープを楽しませてくれてもいいと思う。

しかしそれは表情に出すことなく淡々と答える。

「警察のお前なら知ってるんじゃないのか？」

「まああんたのことは警察じゃなくても知ってるんじゃないか？ 大空ひなた、可愛そうな皮肉に育った男の子」

誠は躊躇いなくしれっとそう口にした。

その言葉に俺の眉がぴくりと動く。どういう意味だと言わんばかりに睨みつけると、奴はどこか憐れむような視線を向け、微笑を浮かべた。

「俺たちの近所じゃ有名だったよ、あんたの話はさ」

誠が伏し目がちにこちらを見つめて来る。

「俺が初めてひなたを見たのは八歳の時だった。おそらくあんたが五、六歳、妹が二、三歳くらいってところか」

平然と名前を呼ばれることに苛立ちを覚えたが、それよりもそんなに前から俺たちの事を知っていたことに驚いた。

今年で俺が二十三になるからおおよそ十七、八年前から知られていたことになる。

俺はスープをスプーンですくい、黙って誠の話に耳を傾けた。

「公園でクラスメイトと遊んでいた時だ。見るからに貧しそうな兄妹が公園のベンチに座っていた姿は小学生の目にはどこか暗く、なかなか刺激的だったよ」

懐かしむ口調に思い出されるのは、痛々しい過去。

俺のスープを飲む手が止まった。

「それでも妹を必死に守ろうとするひなたは俺にとってカッコよく見えていた。だからこそ一緒に遊ぼうと声をかけようと思ったこともあった。だけどそれを周りの友達や、親が良しとはしなかった」

その声にわずかな苦痛が含まれていた。

数年前の俺ならばグサリと心を刺され、抉られていただろう。だが今は何も感じない。

そもそもそれは気が付いていたし、知っていたことだった。

他人が故意に俺たち兄妹、いや、俺たち家族を避けていたのは紛れもない事実だった。まれに心配した近所のおじいちゃんやおばあちゃんは、俺たちに飴やチョコレートに分けてくれた時もあったけれど、それはほとんど妹にあげていて自分が口にしたことはなかった。

「親はどうしてと聞いても教えてはくれなかったけど、同級生は教えてくれた。ひなたの家は貧しくて、借金のある父親が暴力的な人なんだって。だから関わらない方がいい

いって」

やはりバレていたか。

まあそれもそうだろう。母親も俺も、そして雪菜も大抵痣だらけだったし、服とかも数着しか持ってなかったが、どれもよれていた。

あの当時はインターネットなんて繋ぐお金も無かったし、知識も無かったから知らなかったけれど、今思えばどこか相談所みたいなところがあった気がする。

もしそこに母親がいち早く相談して助けを求めていれば、今俺たちはこうはならなかったかもしれない。

俺は黙ってスープを飲むのを再開した。

「俺は何とも言えない歯がゆさを感じていたけれど、あの時はまだ弱かったし何もできなかった。申し訳ないと思ってる」

「勝手に同情するな」

俺は冷たい声で返す。だが誠はやはり何もできなかった自分が情けないと後悔するように肩を落とし、お冷を口に含んだ。

それがゆっくりと喉を流れ、喉仏が脈を打つ。

「実際誰も手を差し伸べなかった結果、父親は妹を連れて出ていったそうじゃないか」

怒りと後悔と気まずさと、複数の感情を含んだ声が響く。

「拳句母親は父親の借金を肩代わりし、ヤクザに追われて自殺し、ただ一人、あんたが残された」

近所の噂とは恐ろしいものでどこまでも流れていきやがる。

俺はスープを飲み終え、スプーンをカップの中に投げた。

「それもあんた、母親が死んだの見たらしいじゃないか」

確信ではなかったのか、探るような口調だった。

俺がチラリと睨むと、誠は少し前のめりになった体を元に戻した。

無意識的にスーツジャケットの胸ポケットに触れる。そこには一本のカッターが入っている。

母親を殺したカッターだ。

今でも忘れはしない、最期の「ごめんね」というセリフと閉まった扉、紅く染まる水。

全てが鮮明に残っていて、そこから数日間吐き続けたのは懐かしい姿だ。

今や誰が死のうが苦しもうが流血しようが、笑える自信すらある。

「リスクだった。風呂場で一人。正確には死ぬ瞬間は見えていない。風呂場の鍵が閉まっていたからな」

俺が淡々と答えると、誠がごくりと生唾を飲み込んだ。

「あのばばあはドア越しに最期俺に謝った。しばらくドアを叩き続けたけど開かなかったから、俺は外に回って窓から侵入。その頃には冷たい水の中に服を着たまま体を浸して、手首から血を流して死んでいた。ただそれだけだ」

正直なところ謝るくらいなら最期まで責任を取れとは思う。

俺も一緒に連れていってくれればよかった。自分だけ楽になって俺を一人残して何がしたかったのか。そこまで俺を救いたくなかったのか、苦しめたかったのか。

それは亡き母に問いたいことであり、今でも消えない感情だった。

別に今更痛みや苦しみなどはない。ただ、ただなにが「ごめんね」だったのか、聞きたい。

「その後児童相談所に保護されるも抜け出した……」

俺の不機嫌そうな、冷めた声で語られる続きを聞くと、バツが悪そうな顔をして誠は俯いた。しかしその俯いた状態のまま、さらに俺の先の過去について口を開く。

「そこで噂は途絶えている。探したけれど見つからなかったと。でもそれはヤクザの人たちの元にいたから」

俺がチラリと視線を外し、窓の外を眺めるとちょうどロボットが料理を運んできた。

「オ待タセイタシマシタ」

カートに乗せられた、鉄板の上で肉汁を滴らせるハンバーグセットと、同じく鉄板の上で赤みを残す高級そうなステーキ肉が香ばしい香りを漂わせた。

それをカクカクした動きでロボットがテーブルの上に並べた。

最後に白いご飯を二つ残してカートを持って後にする。

俺が無言で食べ始めようとするのに対し、誠の勢いはどうしたのか、ナイフとフォークを握り締めて固まっていた。

何か言おうかどうか悩んでいるようだ。

俺は構ってられないと先にハンバーグを口に含んだ。

じゅわっと広がる肉汁が口内に広がり、濃厚なソースと絡み合う肉は柔らかく、しかし肉厚で噛みごたえが十分にある、絶品の一品だった。

「あのね、あのね、昨日公園で女の子が話してたの」

「何を？」

「またはんぱ一ぐを食べたいって。はんぱ一ぐって、何？ 雪菜も、食べてみたい」

「そうだね。今度パパとママにお願い、してみようか」

「うん！」

綺麗な黒髪が、風に靡いた。

幻覚と幻聴を振り払うように首を横に振る。

すると、誠は決心がついたようで、ついに言葉を口にした。

「そのあまりに哀れな運命は、名前を小馬鹿にしているような……だから皮肉に育った子って、母さんたちが話しているのを、聞いた」

俺はだからなんだと言わんばかりに黙々と肉を口に運んだ。時々ふっくらとしたライ

スで口の中を整える。

実際言われていたのは知っていたし、今更聞いたところで何も思わなかった。

だが、誠は苦しそうに先を続けた。

「俺はさ、誰かの役に立ちたいって思っているし、ずっと誰かを救えるようになりたいと思ってきた。だから警察になった。俺とそんなに年も変わらない奴が、全く違う世界でもがき苦しんでいるのは見てて堪えるよ」

そこでようやく誠は自分のステーキにナイフを入れた。

ジューシーであつあつな断面から香り豊かな匂いが溢れだす。

「つまり俺としては今回あんたに協力したいのはただ公園で助けてくれた命の恩人だからってだけじゃないんだ。あんたを救いたい、あんたの役に立ちたいんだよ、一人の人間として、警察として」

真っ直ぐな視線を向けられる。

俺は黙ってハンバーグを食べ続けていたが、返事を待つかの如く誠はステーキを食べようとせず、じっとこちらを見ていた。

その視線の鬱陶しさときたらハンバーグの味を楽しむ感覚をかき消すような威力を持っていた。

俺はうんざりとした表情を浮かべ、ナイフとフォークを投げるようにして鉄板に置いた。

そのまま水を煽り、軽く紙ナプキンで口元を拭く。

口を拭いて油を吸った紙ナプキンを丸め、テーブルに放ると伏し目がちに誠を見つめた。

誠が生唾を飲み込む。

「所詮それは自己満足と偽善でしかない。安い正義と勝手な同情はいらない」

俺のあまりに冷たい淡々とした言葉と態度に誠が一瞬ひるむ。

だがすぐに眉根を寄せ、反論してきた。

「自己満足？ 誰かを助けたいっていうのは自己犠牲の元にある感情だ。それは決して安い正義なんかじゃないし、同情でもない。どうにかしたいという向上心だ」

「誰がそんなことをお願いした？」

間髪いれずに尋ねると、誠は言葉を詰まらせた。

俺は再びナイフとフォークを手に取り、ハンバーグを食べ始めた。

一口サイズにハンバーグを切りながら口を開く。

「そもそも誰かを助けたい、救いたいと思っている時点でそれは相手を自分より下と見ているからだ」

冷めつつあるハンバーグは運ばれてきた時よりうまみが落ちている。

「自分より大変で可愛そうな奴と心のどこか思っているからそういう言葉が出る。それは即ち自分より下層世界に生きていると認識しているからだ」

俺の言葉に誠はきまり悪そうにステーキを口に含んだ。

返す言葉も見つからなければ真っ直ぐ視線をこちらに向けることもできないのだろう。無意識ではあるが、凶星、ということだ。

「下層世界に生きる人間はそもそも誰かを助ける余裕などなく、自分を守ることで精一杯だ。それでいて誰かに助けて欲しいなど望んでいない」

一端言葉を切り、最後の一切れを口に含み、咀嚼する。それをごくりと飲み込み、胃に収め、ゆっくりと口を動かした。

「だって本当に救ってくれる奴なんか、いないだろうが」

俺の言葉に誠の食べる手が止まった。

「本当に救ってくれる奴がいるなら俺も雪菜も、今ここにいやしない」

「……」

完全に言葉を失う奴を一層突き放すように、冷たく感情の籠らない瞳を向けた。

すると誠はまるで胸をナイフで刺されたかのような、辛そうで今にも血を吐きだしそうな表情を浮かべた。

その顔は青白く情けない。

俺は一瞬の間を置き、続けた。

「だが情報は武器だ。お前の話を聞こう」

その言葉に誠の肩がびくと震えた。

奴の顔に少しずつ色が戻って来る。それから気を取り直すように咳払いをする。

そしてステーキを一口サイズに切ると、フォークで刺した。その肉の刺さったフォークをこちらに向け、誠がわざとらしい口調で話し始めた。

「別に俺は本当にあんたを見下しているつもりなんてないし、安い正義を振りかざしているつもりもない。だが、確かにあんたたちと俺は違うと思っている」

妙に演技がかった口調は本心を隠そうとしているのがバレバレである。

内心じゃ盲点を突かれたことに頭がついて行かず、言葉を咀嚼しているのだろう。

ところが次の言葉を聞いてこいつの本心などどうでもよくなった。

「だがそれは生い立ち云々じゃない。このゲームに参加するまでの経緯の話だ」

「……」

「俺は自らこのゲームに参加したんじゃない。招待されたんだ」

そう言ってようやくフォークに刺さった肉を口の中に入れる。ソースが口の端から零れた。

それを舐めとり、うっすらと笑みを浮かべる奴は、どこか悪戯を考える子どものようであり、人を食らう獣のようでもあった。

俺がじっと睨みつけると、誠はクスクスと笑った。

フォークもナイフも投げだし、両手を降参とでも言うが如く上げて見せる。

「ごめん、ちょっと演技が入り過ぎた。やっぱ性に合わないことはするもんじゃないね」

「招かれたってのも嘘か？」

即座に尋ねると、誠は首を横に振りながら再びごく普通に食事を再開した。「招かれたってのは本当。ある時ポストに手紙が入っててさ、必ず来るようにって記されてた」

ステーキを黙々と食べ始めた目の前の男をじっと見つめ、俺は冷静に問うた。「つまりこのゲームの主催者を知っているということか？」

あくまで冷静に尋ねたつもりだったが、少し期待を含んだ声になっていただろうか。誠が申し訳なさそうな表情を浮かべて首を横に振った。

口に含んでいた肉をごくりと飲み込み、口を開く。「何らかの関係者である可能性は高い。けどそもそも警察って仕事は感謝してくれる人もいるけれど恨んでいる奴もいる。むしろ恨まれてもおかしくない立ち位置にいる。つまり誰に恨まれても納得がいく。となると候補が多すぎて絞りきれないんだよ」

その言葉に同じ匂いを感じた。

ヤクザと言うのも誰から恨まれてもおかしくないし、いつそ急に後ろから刺されても正直文句は言えない。

一瞬ヤクザと警察は似ているのではないかと錯覚してしまうが、そんなことはない。似て全く非なるものだ。

俺は主催者が特定できていない時点で無意味な情報として脳内処理を始めていた。これ以上ここにも無駄だと思い、立ち上がりかけた時、再び誠が口を開いた。「特定はできていないけれど、相手はこのゲームに俺を呼んだ。それはつまりどんな手を遣ってでも俺を殺したいからだ。もし俺が生き残っていれば奴が直々に殺しに来るかもしれない。そうなればあんたも主催者に会える。あんたがこのゲームに参加した理由は知らないが、少なからず金ではないんだろう？」

金目的の男が女性を助ける際に自分のカードと交換したりしないよな、と笑う姿は眩しくて真っ直ぐだった。人を疑うことを知らなそうな笑みは、遠い。

「なあ、悪い話じゃないと思うんだ。俺はあんたに助けられた借りと、自分のポリシーとしてあんたを助けたい。あんたは俺と行動することで主催者に会えるかもしれない。どうだ？」

確かに雪菜を助けるにあたって主催者と交流を持つておく必要はあるかもしれない。おそらく俺の予想は外れていないはずだ。雪菜は今――――。

だがそれは俺一人でも無理ではない気がした。わざわざこいつの手を借りる必要性を感じない。

むしろ雪菜がここに参加しているということは、あのくそ親父が関与している可能性が高い。

そうなれば俺が参加していることを知った瞬間自ら現れてきそうだ。

ならわざわざこのめんどくさい男と行動する必要はないのではないか。

しかし俺の中で実は主催者は自分の父親なのではと、ひそかに予想していた。もち

ろん安直、安易すぎる考えではあると思っていた。

あくまで雪菜が参加しているというのも噂にすぎない。それだけで父親が主催者というのは信憑性に欠ける。

そして今それに拍車がかかった。

おそらく父親とこの誠という男の間に何らかの因果関係はないと考えられる。

そもそも警察と関わりがあったとは思えない。

ヤクザから逃げていた時も相談すれば良かったのに、自分が妻子に暴力を振っていたことがバレて捕まるのも嫌だったらしい。

つまり恨みを買うことはまずないどころか、接点すらない。となれば父親が誠を呼ぶ理由はない。

では考えられることは何か。他にいる、ということだ。

それは一体誰———。

「っ！」

考えをぐるぐると廻らせていた、その時だった。

ふっと視線をやった窓の外に見覚えのある姿を目撃した。

俺は思わず勢いよく立ちあがり、店の外に飛び出した。

「あ、ちょ、待って！ 答えも聞いてないし肉も食べ終わってないよ！」

そう言いながら奴も後をついてくる。

俺はそれを全て無視し、店の外の大きな通りに出た。

「山神、トーマ」

大きな道路の真ん中でその名を低く呟く。

すると、ウサ耳を着けた九歳の幼い少年が振り返った。

「おや、これはこれは、大空様ではありませんか」

そう笑う山神は、俺の知っている山神トーマではなかった。むしろ気付けたのが不思議なくらい変わっていた。

子どもには高すぎる、卒業式なんかで着るような黒いジャケット、ズボン、それに白いシャツで身を包み、首を彩るのは赤い蝶ネクタイ。

あのボロボロでよれたTシャツと短パンを着ていた少年は、どこに消えたのか。

「伯父さんは、元気でしたか？」

愛らしい笑みで問うてくる彼は、泣き継っていた頃とはまるで別人だ。

「何故、お前が兎に……？」

「おやおや、会話が成り立っていませんね。散々常識を弁えろと喚き散らしていた貴方が、まさかまともな会話さえできないのですか？」

小馬鹿にするような問いに俺は、怒りより先に動揺が体中を駆け巡った。

こいつをここまで変えたのは何か。一体何がこうしたのか。

黙り込む俺に誠が横から声をかけて来る。

「知り合い、なのか？」

口を開かない俺の代わりに、トーマがにやりと笑って口を開く。

「そうですね。知り合いというか……タヌキ、のような存在と言いましょか」

「タヌキ……？」

復唱する誠の声に俺も我に返り、首を傾げる。

この俺がタヌキとは一体どういうことか。

「知りませんか？ 日本昔話、『カチカチ山』を」

『カチカチ山』？ 確か意地悪いタヌキが最初おじいさんとおばあさんの畑を荒らして、それを怒った二人がタヌキに罾を仕掛けて捕まえる」

「そしてタヌキ汁にしようとするおじいさんが目を離れたすきにおばあさんを騙し、おばあさんを撲殺。おばあさんに化けたタヌキはおじいさんにばばあ汁を吞ませるんです」

誠に続いてトーマが話を進める。

その声は年下の子に聞かせるような、楽しそうなわくわくした声だった。

「それに腹を立てたおじいさんは兎に相談し、兎がタヌキの背負う柴にカチカチ石で火をつけて殺すっていうお話ですよ」

ふふっと楽しそうにほほ笑むその顔は、幼い天使の笑みであり、しかし幼子とは思えない悪魔の笑みでもあった。

「確かに伯父はとてもだらしが無く、暴力的で酷いお方でした」

急に語り始まる家庭の話。けれどそこには苦しかったというニュアンスを含む物や、嘆くような叫びは一切なく、むしろ穏やかとさえ言えた。

「でもそれでも僕にとっては唯一の家族だったんです。アメリカで目の前で両親を銃殺され、幸いにもベッドの下に隠れこんだ僕のみが助かる不幸に見舞われ、引き取り手も誰もいない中であの人が辛うじて僕を引き取ってくれた」

懐かしむように語る彼はすっと取り出したオートマチック式の銃を愛おしそうに撫で始めた。

「ギャンブルやパチンコが好きな人でね、僕の食事よりもずっとそちらにばかりお金を使って、さすがに空腹は人の心を醜くする。死にそうで苦しくて、いっそ伯父を殺してしまおうかと思ったこともありました。そして伯父の肉を食れば、きっと僕は長らえる、そう思っていました」

それは自分も似たような経験をしていたからこそ分かる辛さであり、苦しみだった。

何故自分はこの親の元に生まれてしまったのか、何故自分がこんな苦しい思いをしなければいけなかったのか。考えても出て来ない答えを永遠と問いかけた時期もあった。

何よりも妹が、雪菜が「お腹すいた」と泣くのを見ることほど、辛いものはなかった。「だけどそんな時、貴方は怖い顔をして伯父のパチンコやらで作った借金を取りに来

たかと思えば、連れの方たちにも内緒で飴やチョコレート、時にはおにぎりなんかもくれましたね」

ようやく見せる子どもらしい笑みに一瞬ほっとした。

彼には、まだ人間としての心がある。子どもである故に大人の手によって歪められたレール。しかしそれはまだ手遅れではない。まだ間に合う。まだ救える。救う価値がある。

それが子どもの特権だ。

子どもには幸せになる権利があって誰かに助けられる義務がある。子どもはそれが許される。

歪みきった大人は救えやしない。大人はもう誰も助けしてくれないし、一人で立ち上がらなければいけない義務がある。

それは既に何が必要で何が不必要なのか自分で選択する能力が身についているから。その取捨選択能力が身についていることを前提としているから。

だけど子どもは違う。だからお前はまだ——。

「泣くなガキ」

頭を押さえ、目線を合わせるようにしゃがみこむと、トーマは一層体を震わせた。

日本人の母親の血を受け継いだ真っ黒なさらさらの髪と、アメリカ人の父親から譲り受けた青い瞳と筋の通った鼻。それは人形のように端正な創りが施され、将来の有望性を感じさせた。

「お前はこうなるんじゃねえぞ」

相変わらず声色は単調で冷たいと自分でも思う。

でも俺の中では救うタイミングを見計らっていた。

そっとボロボロになった短パンのポケットに入れた食べ物は、それまでの時間稼ぎであり、ほんの少しの救いだった。

「だけど僕は思うんですよね」

ずっと消えた笑みに全身寒気が走った。背中を何かがつうつと通り過ぎていく。

「確かにあれで生きながらえた所はありますよ。でももし貴方が少しでも、少しでも僕の育て親である伯父に情けをかけてくれたなら、伯父はもう少しまともだったんじゃないかなって」

まだ、間に合う。

「貴方は僕の家庭を荒らした」

まだ、間に合うはずだ。

「だから、僕にとってはタヌキだと思うんですよね」

まだ、間に合ってくれ。

「こうして僕も最終的に兎になったわけですし」

まだ、間に合って、くれ……。

「これは、運命だと思うんですよ」

まだ……。

「貴方が僕に殺される、運命」

ああ……。

トーマはポケットから小瓶を取り出し、その中に入っている粉末をうっとりとした青い瞳で見つめる。

そしてそれをほんの少し、指にとると、ぺろりと舐め取った。

その姿はどこか艶めかしく、どこか獣じみていた。

「うん、今日も最高の味だ。さあ、最高の火薬を召し上がれ！」

そう言って瓶をしまい、銃を構えた瞬間全てを察した。

「チッ」

もう、全てが手遅れだった。間に合ってなどいない。救いの余地など、ないのだと。

舌打ちをすると同時にこちらオートマチック式銃を構え、発砲する。

パン！

響く銃声。

それは俺のものか、はたまたトーマが発したもののか。

カランっ……。

銃を取り落とし、地面を滑らせたのはトーマの方だった。

俺の方がコンマの差で速かった。

トーマが撃った弾は大きくそれ、アスファルトを叩いただけだった。

それに対し、俺が放った弾は見事にトーマの手に命中し、銃を弾き飛ばした。

トーマの手からは紅い液体が流れている。

「ちょ、あんた……」

スピード勝負だった動きについて来られなかった誠が戸惑いの声をあげる。

俺は何も答えないまま銃を構え続けた。

殺すか否か。

迷いは命取りだ。

「殺(やる)なら殺ればいいじゃないですか。貴方はそうやってタヌキのように卑しく、汚らしく、誰かを踏み台にして生きていくのでしょうか」

嘲るような言葉の羅列が突き刺さってくる。

そんなつもりはない。

殺すつもりなど……。

「お兄ちゃん」

じっとこちらを見つめるトーマの陰に雪菜の寂しそうな、苦しそうな顔が重なった。  
手が震える。

今ここで彼を殺したら、まるで妹を手にかけてしまったような気になってしまうのでは  
ないか、そんな迷いがあつた。

だが迷いは命取り。決断は瞬時にしなければ、自分が殺られるだけだ。

ペチィィィン——！

強烈な痛みが手の甲を走った。

「くっ」

構えるのをやめ、銃を握る手を見つめると、右手の甲がぱっくりと裂けて血が溢れ  
出ている。

肉まで見える勢いで傷を負わせてきたのは。

「無銭飲食のみならず」

「お兄様を傷つけるとは」

「とんだ阿婆擦れ豚野郎ですね」

二人の幼き少女だった。

トーマとそう変わらない、六、七歳の双子。

一卵性の同じ顔立ちをした二人は、お揃いのピンクと黒を基調とするフリルワンピースに身を包み、お人形のような大きな目をした愛らしい顔をしていた。

一人は髪を腰まで伸ばしたロングヘアーで、一人が肩にもつかないショートカットを  
している。

そんな二人は致命的に何かがおかしかった。

そう、それぞれに鞭を持っているのもさることながら、何よりも違和感を放っていたの  
は、首と、手首だった。

それぞれには首輪と手枷が嵌められているのだが。それは、重そうな鎖で繋がって  
いるのだった。

手も首も拘束され、一定の距離しか離れる事の出来ない、自由を許されない双子が  
怒りを露わにこちらを見つめている。

「悪い子には、お仕置きが必要ですわ」

ロングヘアーの少女がチョコレートのように、甘くとろりとした声で言う。

「ええ、ミミ、私(わたくし)もそう思いますの」

それに対しショートヘアーの少女は、氷のように冷たく、とげとげしい声を漏らした。

「そう、ネネお姉さまと私(わたくし)はそう教わってきました」

「だから私たちは今、殿方にお仕置きをしなくてはなりませんの」

チョコレートと氷の甘く冷たいハーモニーが脳内をかき回す。

しかし引っかき回され、乱している暇もなかった。

二人がこちらに向かって鞭を振り下ろしてきたのだ。

「私たちはいつもいけないことをすると、強く手や鞭などでぶたれていました」

「ネネお姉さまは私を庇って何度もぶたれていました」

「私はミミを守りたかったのです」

「しかしそれはお母様にとってはいけないことでした」

「そう、だから私はぶたれてお仕置きされたのです」

「私もネネお姉さまを守ろうとして、ぶたれました」

「そうやって私たちはいけないことがあれば、お仕置きされてきました」

交互に口を開き、鞭を振り下ろしてくる二人。

それをかわしながらも聞えて来る話はあまりに酷く、残酷だ。彼女らもまた、一種の被害者であり、大人によって創られた「兎(きょうじん)」だった。

「だからね、ある時私たちのご飯を忘れてしまったお母様にはお仕置きが必要でした」

「その時もこうしてミミと協力したものです」

「私とネネお姉さまは一心同体」

「二人で一人」

「だからこそ二人でお仕置きをして、殺しました」

「それならとんだ阿婆擦れ豚野郎にもお仕置きをして」

「殺さないといけません」

ネネの冷たい氷のような声が的確な殺意を表す。

俺と誠はとにかく鞭をかわし、近くのコンビニエンスストアに逃げ込んだ。

入って真ん中あたりにあるお菓子のレーンにいったん二人で身をひそめる。

「よく聞け」

俺はネクタイを緩め、傷口をちらりと見やった。

骨が見えそうな勢いに剥がれた手の甲は血で紅く染まり、痛々しい。しかしその痛みも無視して銃を構える。

「あの三人は俺がどうにかする。お前はまずさっきのファミレスに戻って金を払ってこい」

俺が自分のクレジットカードを取り出し、差し出すと誠は目を丸くした。

「馬鹿言え！ こんな時に金なんか払ってる場合かよ！ ここは逃げるか、心苦しいが彼女らを始末する方が」

「気付かなかったのか？」

誠の言葉を遮り、尋ねるが誠はさっぱり理解していないようで首を傾げる。

「こんな狭い所に逃げてどうするつもりですか？」

しかしそこで甘い声が響く。チョコレートのように甘く、とろりととろける声は、姿さえ見なければ幼い子とおにごっこでもしているような錯覚を起こす。

「まるで袋の鼠ですね」

けれどももう一人の棘のように刺さる冷たい声が現実を突きつける。

俺は二人の足音に耳を済ませる。

レジ側から来るのか、ドリンクの棚の方から来るのか。少なくとも繋がった二人だ。挟み撃ちにされることはまずない。

コツ……コツ……。

ブーツがワックスがけされた床を叩く。

レジ側だ。

俺がすぐさま走り出すと誠も後に続いた。

当然二人も走って追ってくる。

俺はわざと棚と棚の間を通過して行く。コンビニの棚の間は二人が並列して歩くには少し狭いため、二人の速度が落ちた。

「いいか、さっきあの二人は俺たちを無銭飲食と言った」

俺は二人から逃げながら説明する。本来ならここで察してほしいが、どうやら誠は警察のくせに頭が弱いというか、勘が働かないらしい。

「けど俺たちが食べた店にはロボット以外誰もいなかったし外にも人の気配はなかった」

「あれ？　なんで俺たちが食事してお金払ってないの知ってるんだ？」

「……おそらくこのクレジット機能だ」

「ごめかしいですね」

「ほんとですね」

ミミとネネの苛立った声がある。

だが、もう既に冷凍ゾーンに来てしまって逃げ道はなかった。

「あくまで予想だが、このコンビニも含め店員はいない。だからこのクレジットが全てで一タとして把握している。そこで無銭飲食の他に万引きなんかをすればこいつら兎に居場所が知られる仕組みになっているんだと思う」

「……なるほど！」

誠がすごく尊敬したという瞳で見つめてきた、その時だった。

「話している余裕など、あるのですか？」

ネネのそう、冷たい声が響いたかと思うと――。

ガシャアアアアアン！

冷凍食品やアイスの前のパンなどが乗った棚がこちらに向かって倒れてきたのだった。

今まで棚で隔てられていたミミとネネとの距離が無くなり、互いの位置がはっきりとわかる。

冷凍庫は壊れ、ガラスやらパンやらが地面に散らばった。

「ひっ！」

情けない誠の声が響く。

どうやら鞭で叩き倒したらしい。

俺は銃口を二人に向ける。

「つまり金を払わないといつまでも俺たちの居場所はばれ続け、こいつらに追われる。

だからさっさと払ってこい。そしてどこかで合流するぞ。協力云々はその後だ」

ようやく理解できたのか、誠は俺が投げたカードを受け取り、一気に走り出す。

「逃がしはしませんわ」

そうネネが誠に向かって鞭を振り下ろそうとした刹那。

俺は銃を発砲した。

パン！ パン！

二発の弾は見事に狙い通り飛んでゆく。

飛んだ先ではカツンという音を立て、数十秒後にガチャンと鎖が地面を叩いた。

二人の首輪を繋いでいた鎖と、手枷の鎖が壊れ二人を切り離れたのだった。

「まだ遅くない。今なら、まだ引き返せるから」

そう静かに語る声は俺の願いだ。そうであってほしいという願望。

しかし、その数秒後。

「「いやあああああああああああああああああ！」」

二人の悲鳴、いや、絶叫が響き渡った。

「ミミミミミミミミミミミミ！」

「ネネお姉さまネネお姉さまネネお姉さまネネお姉さまネネお姉さま！」

互いを呼び合い、互いの存在を確かめるように触れ合い、抱きしめ合う。

狂気を帯びた二人を呆然と眺める。

「ミミ！ お願い離れないで！」

「ネネお姉さま私はここに！ ネネお姉さまこそ離れないで！」

混乱する二人の声はどっちがどっちか分からないほど似ていて、優雅さが、余裕が微塵も感じられなかった。

甘いチョコレートのような声も、氷のような冷たい声もそこには存在していない。

俺は何か間違ってしまったらうかとさえ思った。

救うつもりが狂わせたような気がしてならない。

ただ見つめることしか出来ない俺に

「可愛い妹たちに何をしてくれたんですか？」

少年の声が問いかけてきた。

入口の方に視線を向けると、傷を負った手を抱えるトーマの姿があった。

その目は怒りに満ちていて、どこか赤く光って見えた。

「貴方はそうやって何でも僕の周りのものを壊し、奪って行くんですね」

その声は九歳のものとは思えない、棘と毒で創られた産物だった。やたらと冷めた

口調が心に突き刺さる。

「いい加減にしてくださいよ。どれだけ僕から色んな物を奪えば気が済むんですか？もう、良いじゃないですか。お願いですからさっさと……死んでくれますか？」

抑揚のない、単調な声音でそう呟くと、彼はもう一つの銃をポケットから取り出し、二丁で乱射してくる。

うまくミミとネネを交わし、俺の方に飛ばしてくるのはなかなかの腕前である。

しかし俺もそれを交わし、弾はおにぎりやお総菜に突入していくばかりだった。

俺はそのまま走って飲み物ゾーンにある大きな冷蔵庫の前に行く。するとトーマも体の向きを変えてこちらに乱射してきた。

パリンパリンと冷蔵庫のガラス扉が割れ、中のペットボトルや缶を貫通する。

あちこちからお茶や炭酸水、コーヒー、お酒が溢れだした。俺の足元が水浸しになって行く。

滑らないよう神経を研ぎ澄ましつつ、弾も交わして雑誌コーナーまで走る。

そこでありがたいことに一つが弾切れを起こしたようだった。空砲の虚しい音が響く。

「死んでくださいよ。殺してあげますから」

殺意に満ちた声をもらしつつ弾補充をしようとする。

俺はその隙を狙って走り、一気に出口までかけていく。そのまま出ていこうとした時だった。

「逃がすものですかっ」

パン！

「っ！」

即座にセットを終わらせ、すぐに体勢を変えて飛ばしてきた弾は。

見事に俺の右肩を貫通し、痛みを走らせた。

だがコンビニの外に出ればこちらのものであった。

肩から血が溢れだすのを構うことなく走り続ける。

「待ちなさい！」

コンビニを飛び出し、トーマが追って来ようとする。けれど俺はすぐさま路地裏に入り、トーマを撒くことに成功する。

さすがに大の大人が本気で走って九歳に追いつかれるわけがない。

ただ血痕が垂れている可能性があった。

俺は肩を押さえ、とりあえず遠くまで、少しでも離れようと足を進めた。

脈打つ肩を無視し、出来るだけ血が出ないように強く押さえつけて辿りついたのは、屋下がりの公園だった。

少し都会じみた光景からは逸脱し、住宅街の一角に寂しく存在する公園。

ブランコや滑り台、ジャングルジムにシーソーと遊具はそれなりに整っていて、まだ新しそうに見えた。

しかしそれで遊ぶ子供はどこにもいない。  
無意味にそびえ立つ遊具たちは用途を忘れられた、哀愁を漂わせる鉄の塊でしかなかった。

俺はそこにゆっくりと入っていき、ブランコに腰かけた。  
わずかに揺れる椅子に身を預ける。  
夏の日差しが容赦なく照りつけて肌を焼いた。  
ぼんやりと見上げる空には雲がわずかにだけ浮いていて、風にそって流れていた。  
「雪菜は、ブランコが好きだったな」  
ふっと蘇る思い出に一人ごちる。

「お兄ちゃん、おしてえ」  
「しょうがないな。しっかり掴まってろよ」  
「わー！ すごーい！ 高いよ！」  
「あ、雪菜！」  
軽く押していたつもりだが、自分の足も揺らしていたためそこそこ勢いがあった。そのなかで手を滑らせ、まっ正面に落ちた。  
そのままうつ伏せで砂にダイヴする。  
俺はすぐさまブランコを止め、雪菜に駆け寄った。  
「うわああああああああん！」  
体を起こし、大きな声で泣く雪菜の膝からは血が滲んでいた。  
黒い綺麗なセミロングの髪の毛にも砂が付いてしまっている。  
俺はやれやれとポケットからハンカチを取り出し、まず涙を拭いてやった。  
「だからしっかり掴まってろって言ったのに」  
「うわああああああああん！」  
「よしよし。痛い痛い、飛んで行けー！」  
今度は軽く血を拭いて魔法をかけてやる。しかし一向に泣きやむ気配はない。  
俺は頭を抱えつつ、雪菜の髪の毛に付いた砂を払ってやる。  
「雪菜は本当に綺麗な髪をしているなあ。お兄ちゃん、すごく好きだぞー」  
最初は聞く耳を持たず、何も響かなかった。それでもめげずに。  
「雪菜はきっと将来べっぴんさんになるんだろうなあ。お兄ちゃんの自慢の可愛い妹だ。今から将来が楽しみだな」  
「ぐすっ……べっぴんさんって、なに？」  
話しかけ続けると、ふっと泣くのをやめ、尋ねてきた。  
そんな雪菜ににっこりとほほ笑んで答える。  
「綺麗な人って意味だよ」  
「きれい……？」

「そう。とっても綺麗な人だ。綺麗過ぎてお兄ちゃんを困らせる奴だ」

「お兄ちゃん、困っちゃうの？」

「うん。でも自慢でもあるよ」

そう言って頬を撫でてやると、雪菜は決心したように頷いた。

「雪菜、綺麗な人になる！ 髪の毛も伸ばしておしゃれさんする！ それでそれで、いつかお兄ちゃんと結婚する！」

「はは、こんな綺麗なお嫁さん、俺にはもったいないな」

笑い合う空の下、唯一の幸せな時間であり、唯一の家族であり、唯一の心の安らぎである時間。

それは実に短く、儂く、脆い—————。

「やっと見つけた」

ふっと現実に俺を引きもどし、感傷に浸っていたところを邪魔したのは。

「ってひなた、あんた怪我してんじゃん！」

誠だった。

大袈裟なりアクションで近づいてくると、傷口をまじまじと見つめた。

「銃でやられたか。あのトーマってやつか？」

傷口からこちらに視線を向けられ、俺はずっと視線を逸らした。

誠は自分のネクタイを解き、俺の傷口を縛って塞いだ。

ぐっと締め付けられ、痛みが走る。けれどそこはぐっとこらえ、黙って応急処置を受けた。

「ほら、これ」

きつく締めた後、クレジットカードを差し出してくる。

それを自由な左手で受け取る。

すると誠は隣のブランコに座り世間話でもするように、口を開いた。

「あんたの言うとおりの、精算し終ってからここに来るまでは兎に見つかりはしなかった」

「そうか」

実は先ほどコンビニに入って気がついたのだが、店には武器も売っていた。本来日常で見ている店ではないようなものまでも平気で売られていた。

銃や小刀、スタンガン。中にはチェーンソーなんかも置いてあった。

おそらく何も武器を持って来なかった人向けだ。

そう言った武器はそんなに高くは売られていなかった。コンビニの食糧も妥当で、馬鹿高いわけではない。

この三日間で一番出費するのはたぶん宿代。これは確認できていないから何とも言えないが、最初説明していたスーツの男は言っていた。値段に見合ったセキュリティだと。

つまり自分の身を守るのに良い所へ泊ろうとすると、それなりに高いのだ。

そうすると最初の十万じゃ、圧倒的に足りない。

だが意味を知らずにここへ来た多くの奴らが兎と言う名の人間を殺す勇気などない。もしくは自分が殺されるリスクを負ってまで兎を探して殺しに行きたくはないはずだ。

どこかに身をひそめて静かに終わりたい。

しかしそれではお金が足りない。

そうなった時に万引きや無銭飲食に手を染める。だがそれをすれば兎に情報が漏れ、狩られる。

結局このゲームに逃げ道はなく、このゲームに参加してしまったが最後。殺るか殺られるか、二つに一つなのだ。

「まあそれはさておきとしてさ？」

俺が改めてこのゲームの悪趣味さを噛締めながら情報として整理していると、誠がブランコを漕ぎながら話し始めた。

俺は声に出さないまでも「なんだ」と言うように視線を向けた。

「なんであのミミとネネって子どもにしても、トーマって奴にしても兎と分かっているが殺さなかった？」

ゆっくりと誠の視線もこちらに向けられ、俺たちの視線はぶつかった。

数秒の沈黙と、一步も譲らない互いの視線。

しかし先に折れたのは誠の方だった。

誠は溜息を漏らし、正面を向いて口を開いた。

「もちろん警察の身としてはあんな幼い子たちを容赦なく殺したり、傷つけたりしてほしくない。そもそもこんなゲームに参加させている事さえ、許しがたい。だけどあの子たちは既に精神を侵され、平気で人を殺す。あんたのことだって殺そうとしていた」

黙って誠の言葉に耳を傾ける。

「でもあんたのそのコントロール力、判断力、そして一切の躊躇いを持たない行動力さえあればものの三分で片付けられたはずだ。あんたは怪我をしないで済んだ。あんたはわざと彼女らにトドメをささなかった。外し続けた。外傷を負わせる程度にした。何故だ？ あれほどに容赦なく、一瞬でゲーム性を理解し、瞬殺したあんたが何故、彼女らを殺さなかった？」

熱を帯び、強い口調の末、視線が俺の方に戻ってきた。

俺は奴を横眼で見つめ、その後空を仰いだ。

「伊座波は殺してほしかったのか？」

俺が何気なく感情の籠らない声で尋ねると、誠はブランコから飛び降りるようにして立ち上がった。

「そうじゃない！ むしろ誰も傷つけて欲しくなんかない。俺が言いたいのは子どもに欠ける慈悲があるなら他の奴にもそうしろってことだ。最初の兎はいとも簡単に狩った。

ただどあいつらだって兎と言えど人間だ。救える命だった。俺とあんたで協力さえすれば必ず主催者、関係者に辿りつける。そうなれば一人でも多くの人間を救えるんだ」

熱弁する誠の言葉がとても遠くに感じられた。俺と誠ではきっと相容れない、そう思った。

俺はずっと内ポケットに手を伸ばした。

すると誠が銃を出されるんじゃないかと肩を震わせた。しかし俺が取り出したのは銃ではなく、煙草だった。

一本取り出し、啜る。そのままライターで火をつけ、吸い込んだ。

肺を満たしていく煙はどこか安堵感を与えてくれる。

それを楽しみつつ、ゆっくりと煙草から口を離して息を吐きだした。もわんと辺りに煙が広がる。

俺はその煙をぼんやりと眺め、口を開いた。

「いいか。成長しきった層は救えない。どんなに俺たちが関係者たちに会おうともうあいつらの精神は俺らがどうにかできることじゃない」

「子どもは違うっていうのか？」

「子どもには長い未来がある」

「大人にだって未来はある！」

誠が俺の前に立った。ちょうど日差しが遮られ、自分の顔に影が落ちた。

「警察ならわかるだろ。大人になって犯罪を起こした奴は懲役を超えて外に出てからも同じことを繰り返して捕まる。麻薬に手を出した奴だってやめられずに再度手を出す。そんな例を数多くと見てきたはずだ」

抑揚のない声で告げると、誠は拳を握りしめた。

「それと、これとは話が別だ」

「別じゃない」

間髪を入れることなく答えると、誠は自信なさそうに視線を逸らした。

「一端道を誤った大人はもう戻れねえんだよ。結局俺たちが救ったところで苦しむのはあいつら自身。それなら死を持って救う方が報われるだろ」

俺の冷たい言葉に誠は言い返す言葉を探していた。けれどそれは見つかриそうにない。

俺は溜息をつき、ブランコから立ち上がった。

一気に密接する俺たちの距離。俺はその距離を崩さぬまま静かに告げた。

「俺がこのゲームに参加したのはトーマもだが、生き別れた妹がいると聞いたからだ」

その言葉に弾かれるように誠が見上げてきた。

「だが妹とは三歳しか変わらない。もし見つけたとしてももう二十歳だ。十分な大人。

俺は雪菜さえも必要とあらばこの手で、殺すつもりだ」

見開かれる目と、震える体。誠は驚きを隠せない様子だった。

「一度狂えば世の中に順応することはできない」

俺がそう言って脇を通り過ぎる。そのままこれが別れた。

「きっとお前とは考えも合わないし、うまくやってけないさ」

振り返ることなく去って行こうとすると、

「待って！」

誠が叫んで止めてきた。

「俺は、俺は……信じたいんだ」

弱弱しい声に足を止め、振り返る。

きっと今の俺の顔は死んでいるだろう。何の表情も持たず、ただただ能面のような顔を貼りつけているはずだ。

誠も俺の方を見ようとはしなかった。

「俺はさ」

「お取り込み中、ちょっと悪いんだけどいいかな？」

誠の言葉を誰かが遮った。

声の方に視線を向けると、そこには息を呑むほどのイケメンが立っていた。

整った顔立ちはまるで俺とは正反対だった。綺麗な二重とぷっくりした涙袋が大きな目を創り上げ、しかしずっと通った鼻筋が男らしさを演出していた。

そして色っぽい唇が穏やかな笑みを描いている。

女子が黙ってはいなさそうな、とにかくモテそうな顔つきだった。

だが致命的な違和感がある。

「誰だ？」

顔は誰もが羨むイケメンなはずなのに、首から下はグレーのスウェットを着ている、致命的におかしい少年に尋ねる。

すると男は芝居がかった様子で答えた。

「まず人に名前を聞く時は自分から名乗る、と教わらなかったのですか？」

一瞬の殺意を何とか押し殺す。

ウサ耳を着けていない以上それは狩人の証拠だ。兎ではない。殺す必要も、意味もなかった。

「まあいいでしょう。ヤクザはてっきりそういうきまりに厳しいと思っていたのですが。状況が状況なので僕から名乗りましょう」

「ちょっと待て。何故俺がヤクザだと知っている？」

「まあそう急かさないうで下さいよ。本当に失礼だな人だなあ。君が質問してきたんだ。まずそれに僕が答えて、こちらが次に質問をし、君が答える。そしてまた君が質問があれば質問する。本来そうあるべきではないのか？」

「ごちゃごちゃ言っていないでさっさと答えろ。殺すぞ」

やけに癪に障る話し方をする奴だった。思わずイライラして唾えなおした煙草を噛み

潰す。

そのまま銃を取り出した。

しかし彼は動じることなく両手をあげ、敵意がないことを示してきた。

「僕を殺すつもり？」

だが、そこで浮かべた表情は、挑発にも見えた。

にやりと笑う表情は、整った顔立ちにはふさわしくない。

その瞬間、致命的におかしかったのは衣服のせいだけではないということに気がついた。

衣服以外にもまとっている雰囲気や、表情がどこか致命的におかしいのだ。

「殺すつもりなら殺してくれよ。君のその怒りに満ちた瞳で僕を捉えてさ。銃弾でここを貫いてくれ」

そう胸元を指差す少年の雰囲気は、今まで見てきた兎よりもどこか狂氣的で、どこかイカれている、危ない人間のソレだ。

「僕は死ぬことなんて怖くない。むしろ僕にとっての希望であり、望みであり、願望だ。もし君が僕のこの希望を、願望を叶えてくれるというならそうしてくれ。僕は喜んで受け止めよう」

そう言って奴は両腕を広げるのだった。

背筋を虫唾が走る。自ら死を懇願し、自ら死を望む者。

俺は銃をしまった。

すると、彼はひどく落ち込んだように肩を落とした。

「あれ、どうしたのさ？ まさかそんな度胸ないっていうのかい？」

嘲りの入った口調にイラッとするが、ここでそれに誘惑されてしまったら俺の負けだ。

俺はポケット灰皿を取り出し、煙草をもみ消した。

「んなわけあるか。俺は人の要望に応えるほどお人好しじゃない」

「ふーん？」

「それにお前は何か知っている」

「……ご明答。僕はきっと君らにとって有益な情報を与えることができる」

「それを俺たちに教えてくれる気はあるのか？」

そこで誠が割って入って来た。

イケメン野郎はちらりと誠の方を見つめ、すぐに俺の方に視線を戻してきた。

「条件次第かな。こちらの条件を呑みこんでくれれば、教えてあげるよ」

にやり。

八重歯が唇の間から顔をのぞかせる。

俺と誠が顔を見合わせた。

「俺は構わない。情報は武器だ」

俺が誠からスウェット男に視線を戻し、答えた。

「俺もだ」

誠も後に続く。

「よし、それじゃあ決まりだ。まずは場所を移動しようか」

そう言って奴は静かな笑みを浮かべ、公園を後にした。

その後を俺と誠が急いで追う。

日が傾き始めたころ、俺たちは再びビルやらコンビニが立ち並ぶ場所へと歩を進めていた。

「何が嬉しくてこんなオンボロビジネスホテルに男三人で泊らなきゃいけないんだよ」

「それはこっちのセリフだ。何故君ら二人のクレジットを合わせて二十万にも満たないんだい？ てっきり君においては容赦なく狩っているのかと思っていよ」

俺が不機嫌そうに部屋を見渡すと、スウェット野郎は呆れたようにベッドに座り込んだ。

きちきちにシングルベッドが三つ並んだ、薄いガラス窓のついたビジネスホテル。

トイレは当然お風呂と一緒に、いわゆるユニットバス。

どこかカビ臭く、小汚い。簡易的な小さい冷蔵庫もついているが、ちゃんと冷えるかどうかは怪しい。

さらにコンビニまで徒歩二十分という最悪の立地。食事はなし。

これで一泊三人で十二万。一人当たり四万の計算だが、もし一人一部屋借りていたら六万と言われた時は殴ってやろうかと思った。

「だいたいぼったくりすぎるだろ」

俺も毒づいてベッドに腰掛け、ネクタイを緩めた。

「この値段は妥当だよ。もっとセキュリティやルームサービスが充実したホテルなら倍以上は取られるし、この町は日常に見えて日常じゃないんだから」

「それは、どういう……？」

誠もシャツのボタンを開け、ジャケットを脱ぎ、必然と開いた真ん中のベッドに腰かけた。

「他の食や衣服は日常的な値段だ。だけどホテル、宿泊だけはやたらと高い。それは兎が襲ってくるからだ。野宿するよりは遥かに身の安全は確保できる。でも見ての通りぼったくり。これで三泊やりすぎなきゃいけない。つまり十万なんて額じゃ足りない」

「やはり兎を殺さないといけないような状況づくりになっているのか」

「そうだね。強制ではないけど。でも仮に兎に見つからなくても野宿は嫌でしょう？ それこそきつと生きた心地がしないんじゃないかなあ」

俺が続けると、奴はにっこり笑った。それは無邪気な笑みで、どこか楽しんでいるような口調で話す。

俺はそいつから視線を外し、煙草を取り出した。

「あ、それやめてくれる？」

ところがそのスウェット野郎が即座に横やりを飛ばしてきた。

俺が睨みつけると、奴はけろっと答えた。

「僕、煙草の臭い嫌いなんだ。それをこんな狭い部屋で吸われたら充満するじゃないか」

「知るか。ならお前が出ていけ」

「あれ、いいの？ 情報は、武器、なんでしょう？」

猫のように目を細め、三日月形に唇を歪める姿はやはりどこか狂氣的だ。

俺はしぶしぶと煙草をしまう。

「ありがとうございます。さすが、理解力のある方で僕は嬉しく思いますよ」

どこまでも癪に障る男だ。急に恭しく敬語を使ってくるあたり人の怒りのツボを押さえている。

「いいから早く教えろ。こちらはお前の要求どおり宿を用意した」

俺の苛立った声にもニコニコと笑みを崩さず、頷いた。その笑みを保ったまま

「その前にこちらから一つ質問が」

そう切り出してきた。

自然と眉間に皺が寄ってしまう。

「君は始まってすぐ、一羽の兎を狩っているはずだ。まさか一日で九十万使ったとはずはない。その百万は何故君のクレジットに入っていないんだい？」

俺は癪に障る男から視線を外し、口を開いた。

「使った」

「……何に？」

男が怪訝そうな顔を浮かべているのが視線を移さなくても分かった。案の定視線を戻すとやはり怪訝そうな顔でこちらを見つめている。

「別に」

「女性を助けたんだよ」

そこで誠が割って入る。

「余計な事を」

「俺は確かに容易に人を殺すことに躊躇いを持たないのはどうかと思うけれど、でもあれはいた仕方なかったし、それで一人の少女が救われたんだ。恥じることじゃないし、むしろ誇りに思うことなんだから別に話してもいいじゃないか」

そういう問題ではなかった。

「なんだ、君も所詮馬鹿なのか。今回のメインディッシュだというのに」

やはりそう言うと思った。だから言いたくなかったのだ。

だがそれよりも後半の言葉の方が気になった。「メインディッシュ」とは、何か。

俺が首を傾げると、男は「ああ」と笑った。

「じゃあそろそろ約束通り順を追って情報をあげよう。改めまして僕は轟ひびやだ。よろしくね？」

不意に身を乗り出し、誠の存在を完全に無視してベッド一つ挟みながら差し出された手を握る気にはなれなかった。けれどこのまま握らなければ、この状況は永遠と続き話が進まなそうだった。

誠は眉間に皺を寄せながらも枕の方に体を移動させ、俺たちの邪魔にならないよう避けた。

そうなれば仕方ない。俺も身を乗り出し、しぶしぶと手を差し出して相手の手を握った。

するとひびやは急にぐっと自分の方に俺の手を引きよせ、両手で包みこんできた。バランスを崩しそうになりながら、何とか誠のベッドに体を預ける。

その握られた手は撫でられ、まじまじと見つめられる。

それはどこか狂気じみでいて、愛撫する姿は悪寒が走るほどに気持ち悪い。

「ガサガサと手入れの行き届いてない手。ごつごつと骨ばった関節。ささくれが目立つ指たち。まさしく、育ちと環境の悪さを現している」

俺は手を引き抜こうと力を込めた。ところが予想以上に強く握られていて引き抜けなかった。

「もし先約がなければ取引したのになあ。僕はこの手で、殺されたいよ……」

そう愛しむ口調に吐き気を覚えた。

今度こそ手を跳ねあげた。すると次はちゃんとするりと抜けた。

俺は自分で自分の手を撫でた。まるで菌でも払うように。

その瞬間ひびやはクスクスと笑う。

「安心してよ。取って食ったりしないさ。それにホモでもない。そういう趣味はしていないよ。ただ、君のその恨み辛みが染み込んだ手で殺してほしいって思っただけさ」

「……えっと、ひびやは死にたいの？」

へらりと笑う奴に誠が問いかけた。

その瞬間ひびやの顔から光が消えた。すっと影が差し、死んだ魚のような、しかしカラスのように鋭く、だが何百年と生きて疲れた老人のような目をした。

そして愚問である、とでも言いたげに誠を見つめた。

「当然だよ。君は何を言っているんだい？」

「お前こそ何を言っている？」

俺が間髪を入れることなく尋ねると、ひびやはやれやれと首を振って、ベッドから立ち上がった。

「考えても見たまえよ。生きていることなんて苦痛の他なんでもないじゃないか。死こそが救いであり、死こそが安らぎだ」

芝居がかった様子で身振りを入れて熱弁した。

それなら俺は思う。

「なら自殺すればいい」

思ったことをストレートに伝えると、ひびやは呆れたと言わんばかりに見下した視線をこちらに向けてきた。

「ほんと、君のその一歩間違えれば最高の兎になれそうな、狂気に近いオーラはとても好きなのにどこかポンコツだよなあ」

しれっと馬鹿にされた。けれどそれを咎める前に奴が再び熱弁を始めた。

「自殺の何が楽しいっていうのさ？」

いや何も楽しくないし自殺に楽しさを求めている奴など、この世には存在しないと思う。

「死は他殺であるからこそ楽しくて、意味があるんじゃないか」

にやりと笑うその表情は、獲物を狙うヒョウのように見えた。

狩人も兎も、どちらも噛み殺し、肉を引きずり出しそうな、獰猛さを持っている。

「自殺なんてつまらない。孤独に誰にも何にも思われず、一人死んでいくことは生きることに匹敵するくらい辛く悲しいことである。しかし他殺であれば僕の死をもって誰かが何らかの感情を抱く。それはなんだって構わない。罪悪感か、歓喜か、それとも悲しみか、もしくは快樂か。もちろん今君が僕に怒りや恨みをもって殺してくれると言うなら、歓迎するよ」

両手を俺に向かって広げて来るこの男は決してふざけてなどいない。どこまでも真面目に、真剣に話していた。

「君から恨みを買うことなんて簡単だ。例えば、僕がここに来る前の話をしてあげよう」

ひびやは窓際に移動し、外を眺めながら自分の生い立ちを語り始めた。

「僕の出身は君とは全く正反対の一人っ子お坊ちゃんだったんだ。お金に困ることはなく、何不自由ない暮らしてきた。友達なんて金で買えたし欲しいものなんて何でも手に入ったよ。だってお金が全て解決してくれるんだもの。君の父親がどのくらい借金していたかは知らないけど、おそらくはした金だよ。わざわざ自分の娘を売ってまで手に入れるような額じゃない」

本人が言うとおりの俺の中で沸々と怒りや恨みが湧きあがった。

何故世の中はここまで理不尽なのか。俺たちのように毎日の生活に追われ、食事に取りつけない日だってある人間もいれば、こいつのように金には一切困らない人間もいる。

そんな奴が今死にたいとほざいている。

こんな馬鹿げた話があるか。

それにしれっと妹が、雪菜が売られたという爆弾発言を投下した上に、その雪菜についた値ははした金であると宣言した。

こいつの思惑通りになると分かっているにもかかわらず自然と手が銃に伸びていた。

だが全ての情報を聞き出すまでは生かしておかねばならない。

俺は歯を噛締める。

「ひなたは理性が効く、冷静でいい子だ。君が発狂するのをぜひ、見てみたいね」

「いいから続けろ」

怒りに満ちた低い声で促すと、ひびやは笑った。

「ふふふ。そうだね。じゃあここで一つの現実を教えてあげよう。きっと君の怒りもおさまるよ」

穏やかな笑みが向けられる。

けれどそれはすっと消え、冷めた表情が浮かび上がった。

「君は一度や二度、お金があればこうはならなかった、何故金持ちの家に生まれなかったのか、と疑問に抱いたことはないか？」

当然あった。人は生まれた瞬間から理不尽と不条理と混沌の中にぶち込まれる。

子どもは親を選べない。たまたまその家に生まれてしまったが故にある程度の人生設計が出来上がってしまう。

それは、あまりに理不尽で、残酷で、不条理で、抗えない現実である。

「ただだね、お金があるから人生うまくいくわけじゃないんだよ。お金は人を孤独にする」

悲しげな声が部屋に響いた。

とても悲しく、寂しそうな、傷ついた表情がこちらを見つめていた。

俺が首を傾げると、奴は自嘲気味に続けた。

「確かに僕の生活に不自由はなかった。だけど、その代わり父親はほとんど家にいないし、母親は僕を道具としか思っていなかった。自分の家の、自分自身の株を上げるための、道具として僕を使ったんだ。愛なんて存在しない。あれらは僕を生かし、活かすための機械でしかないのさ」

「それは、親の心子知らず、だったんじゃない……」

誠が口をはさむと、心底邪魔だとでも言うように蔑んだ視線を送った。

「僕は貴様が嫌いだ。何も知らないのうのと生きてきたような奴に何がわかる？ 何も狂気を感じない貴様には何の興味もない。綺麗事ばかり抜かすような奴にとやかく言われる筋合いはないよ」

やたらと誠には棘のある口調で返す。

それに対し誠がブチキレそうに肩をわなわなとふるわせ始めた。

ここで言い合いになられるのは厄介だ。俺は誠がキレル前に口を開いた。

「ひびや、続けろ。そして誠、お前は少し黙ってろ」

「でもこいつ」

「お前は俺を助けたいし、借りを返したいんだろ？」

「うっ……」

「なら黙っている」

鋭い視線を送ると、誠は項垂れた。

それを見て鼻を鳴らす。

「助けたいとはずいぶんなものじゃないか？」

「いいから続けろ」

おそらくこのあたりの話はこいつと共感できるだろう。しかし今はそこじゃない。

俺は鋭い視線をひびやにも向けると、ひびやは目を伏せた。

「まあ僕のお気に入りであるひなたがそう言うのなら、話を戻して続けようか」

ひびやは窓際に寄りかかって先を話し始めた。

「母親が僕にピアノやお習字や水泳、あげく茶道までやらせたのは全て自分の株のためなのさ。周りのママさんにお宅のひびやちゃんはすごいわねって言われたいだけなんだ。ただ自慢したいだけ。それだけだ」

肩を竦めるひびやは俺の知らない世界を見てきた。

だけど確かにその目は、生きることに疲れ、世界に絶望し、うんざりする人間のそれだった。どこか開かれた瞳は空っぽで、何も映していない。

だがそこでふっと奴の表情が明るくなった。

「僕はうんざりしていて、その親と言う鎖から解き放たれたかったんだ。そう心から懇願していた時、僕はネットである面白い書き込みを見つけたのさ」

一瞬にして色を、光を宿した瞳がちらりと誠を映した。

だが、それはすぐ俺の方に向けられ、無邪気な子どものような、キラキラとした瞳で見つめてきた。

「ある人がね、同僚を殺したいくらい恨んでいるって、誰か殺してほしい、自分を苦しめ、自分を縛りつける同僚が憎くてしょうがない、なんならこの手で鬪って壊して殺したいって、毎日のようにつらつらとネットの掲示板に書き込んでいたんだ」

相当な恨みだよ、何したんだろうね、そう同僚は。

そうくすくすと笑うひびや。

どこまでも狂気と殺気と違和感に満ちている。

俺はどこか居心地の悪さを感じてネクタイを緩めた。

「だから僕は言ってあげたのさ。じゃあ玩具にしたらいじゃんって」

「……………は？」

俺の口から無意識的にそんな声が漏れた。

「つまり、僕はその人に協力してあげることにしたんだ。あなたにお金を貸してあげる。それでその人を鬪るビジネスを考えたらいいって言ってあげたんだ。そしたら喜んでくれてね、あっさり取り込めたよ。お金なんて腐るほどあるし、母親は馬鹿だから僕が起業したいとか、新しいこと始めたいと言えば才能の开花ね、って父親にお金を出させ

たからね。僕としても親から少し離れられるし、運が良ければ死ぬるかもしれない。少なからずちょっとした退屈しの際にはなる。互いの利害が一致して出来上がった、それがこの『兎狩りゲーム』だよ」

俺の中でいくつもの疑問と怒りが湧きあがった。

だが俺よりも誠の方がその怒りは強かった。誠は拳を握りしめてベッドから立ち上がった。

「まさかその一人と同僚のせいでここまでたくさんの人を巻き込んでこんなことやっているっていうのか!？」

確かにその通りだ。その恨んでいる奴と恨まれている奴のためにどれだけの人間が巻き込まれ、犠牲になっていることか。

それにこんなゴースタウンまで用意して。

けれど俺はそれよりも今、気が付くべきこと、気がつかなければいけないことに気がついた。しかしそれを指摘する前にひびやが誠に対して言葉を投げた。

「巻き込んだわけじゃないよ。これはビジネスだ。僕はそれに投資しただけ。経営者が選んだ従業員を雇うお金をつくり、次に兎を飼育するお金を用意し、最後にゲーム参加者への賞金を準備した。あとは勝手に経営者がこのゲームを僕の家のような富裕層に見せて賭けを行わせて、利益を得ている。ただそれだけだ」

「あんた、自分で何を言っているのか分かっているのか？ 兎っていうけどあれは立派な人間だ。一人も狂わせられていい人間も、あっさり殺されていい命もない。参加者だって勝手に狩人なんて呼ばれているが、本来こんなもの望んでいなかったはずだ」

「そんなこと知らないよ、他人の人権なんて」

ずっと温度が下がった。

冷めた視線、何もかもを凍らせてしまいそうな、鋭く、冷酷な眼差しに誠がひるむ。

「兎はもう必要とされなくなった命か、経営者が僕のお金で買った命。どうしようと雇っている人の勝手だ。狩人だって所詮お金に目の眩んだ屑。そしてそれを実際に自分はお金があり、こんな醜い争いをしなくていいと嘲笑うおっさんたちがいる。それが現実であり、このゲームの趣旨であり、一つのエンターテイメントであり、僕の娯楽だ。そうひなたみみたいな人間に会って殺されるのを僕は待ち望んでいたんだよ」

そう言って俺の方に近づいてくる。

目の前まで来るとにっこりと笑った。それに対して俺は目を伏せ、口を開いた。

「つまり今回こそがこのゲームの本番であり、今まではリハーサルを行ってきたわけだ」

「ふふ、さすがに頭の回転が速いね」

ひびやがベッドに座り直す。

「今回はその経営者がついに恨んでいる奴を招待した。長年の月日を経て創り上げ

たこの舞台、準備は整っている。兎もここまで最高に成長した。これほど楽しく見どころのあるものはかつて存在しないよ」

わくわくと楽しそうに語るひびやに俺は真っ直ぐな視線を向けた。

ある程度話しは読めてきた。だがそこらへんは正直どうでもよかった。

それよりも俺には確認しておきたい事実がある。

「だいたい話しは分かった。要するにお前は兎でもなく、狩人でもない、一種の関係者であり、死ぬ瞬間を待ち望んでいるが、狩人ではないため兎には殺されない。だが兎でもないため俺らと同じようにクレジットで生活を強いられている。ところが兎は殺せない。だから金はない。でも殺されたいからと言えど野宿は嫌だ。そこで俺たちにそれらの情報を流す代わりに宿代を払えと要求した」

「ご明答」

「なら、もう一つ確認させてほしいことがある」

自分でも分かる、ワントーン低くなった声にひびやが微笑んだ。

「僕に答えられることならお答えするよ。僕は君には最善の状態であってほしいからね」

なんだか変な奴に好意を持たれてしまった。

「……雪菜がここにいると聞いている。それはたぶんあのくそ爺に売られて兎になったからだ。ならそのくそ爺自身はどうした？ 自分の身も売ったのか？ それとも雪菜を売って自分は逃げたのか？」

室内に響く暗い、重い低い声。

空気が濁り、淀み、圧迫してくる。

数秒の沈黙が落ちた。

ひびやはもったえぶるように口を開かない。次第に俺の中で苛立ちがこみ上げて来る。

それが爆発する前にひびやが口を割った。

「さあ？」

しかしその答えがこれだった。

俺の額に青筋が入る。

「それはメインディッシュの具材を教える愚行だ。メインディッシュはオープンして初めて楽しめるものでしょう？ 僕には答えられないよ」

「お前……」

「なあ」

俺がひびやを責め立てようとした時、誠が不意に口を開いた。

「その恨まれてる奴を探し出して、経営者、即ち恨み主に会わせられないか？ そこで二人の話し合いがうまくいって解決すれば、ゲームも終わって犠牲は最小限に済むと思うんだが」

その言葉に俺とひびやは目を合わせ、そして二人でまじまじと奴を見つめた。

こいつがこれほどまでに馬鹿で頭の回転が悪い奴だとは思わなかった。

よく警察やってるな……。

ひびやが鼻を鳴らし、ベッドに身を投げた。

「ほんと、馬鹿は嫌いだよ。そして自覚ないところもね。僕は貴様みたいな人間が一番嫌いだ。もし今回貴様もメインディッシュに含まれてなかったら僕のこの手で殺してあげたかもしれないよ」

光栄だろ。

皮肉気味につけられた言葉に、誠は意味が分からないとばかりに首を傾げた。

「いいか、誠。お前は何がきっかけでここに来た？」

「……主催者から招待状が来たからだけ」

何故気がつかない。というか自分でも言っていただろう。警察はいつ誰に恨まれてもおかしくないって。

俺は溜息をつき、肩を竦めた。

「そういうことだよ」

「ん？」

「……恨まれてるのはお前だ」

「……は？」

誠は訳が分からないと言わんばかりに首を傾げた。

どうやらこいつの中にかつて実際に恨まれるような事をした記憶は、一切ないらしい。

オンボロホテルに快適環境など用意されているはずもなく、冷房をつけたところで埃と弱い冷風が充満するくらいだった。

それでもつけないよりははまりました。いつ兎が襲ってくるか分からない状況で、窓を開けて寝るには不用心すぎる。

だからと言って何もしないのは暑過ぎて寝苦しかった。

その結果多少埃臭く、若干効果を持つ冷房をつけるのが最善だと判断された。

けれど決してそれは現状の最善であって、快眠を了承されたわけではない。

俺は寝苦しさに掛け布団を蹴飛ばし、備え付けのごわごわした浴衣を着崩す。

体にはべったりと汗が滲み、暑さが包みこんだ。

時間の感覚がないまま、暑さと兎に対する警戒心が安眠を邪魔する。それでも寝なければ明日の体力がもたないということは分かっていた。

少しでも眠れるなら眠ったほうがいい。

必死に目を瞑り、眠ろうとした。

だがそこでふっと重さを感じる。まるで体が金縛りにでもあっているかのように重く、

動かすことができない。

俺は目を開こうとした。

しかしそれすらもできやしない。

嫌な予感と、嫌な感覚が渦巻く。

重い何かはずっしりと俺の上へのしかかり、身を寄せて来る。俺の胸板に柔らかい何かが触れる。

「っ……」

鼻先を甘いシャンプーの香りがかすった。

首筋にその誰かの髪が零れ落ちてくすぐる。その誰かは吐息がかかるほど顔を寄せてきたかと思うと、そのまま首筋に舌を這わせてきた。

つう————。

鼓動が乱れる。

今すぐにでも反撃しなければ、殺されるかもしれない。だが体は思うように動かない。

そのまま誰かは唇を俺の耳元まで運び、甘い息を吐いた。

くすぐったさと嫌悪に鳥肌が立つ。

さらにはその誰かは俺の耳たぶにも舌を這わせ、最終的にはむっと甘噛みをしてきた。

俺は何とか引き抜いた手を伸ばし、枕の隣に置いてある銃を掴もうとした。

ところがそれは上に乗っている誰かに阻止される。

「嫌ですわ。そんな物騒なモノ、取り出しにならないで」

甘いとろけるような声が囁かれる。

それはどこか馴染みがあり、どこか懐かしい。けれども色っぽく、誘惑的で魅力的な声を俺は知らない。

「やっと会えたんだもの、時間を惜しんで大切にしましょう？」

「……だれ、なんだ」

俺はそいつを払いのけようともがいた。

だがそれは無駄な足掻きである。

「あら、お忘れになって？ 寂しいわ」

俺の無駄な動きを完全に阻止しながらそう寂しそうな声を漏らす。

その時だった。

「ん……ひな、た……？」

誠がわずかに起きているような、起きていないような曖昧な声を出し、寝返りをうった。

すると俺の上に乗る誰かが小さく溜息をついた。

「残念。また会いましょう、お兄ちゃん」

「っ！」

俺は勢いよく起き上がった。  
あっさり起き上がったものの、体の汗はひどく、やけに喉が乾燥していた。  
夢だったのか、現実だったのか、いまいち区別がつかなかった。  
確かに首を舐められた感触や耳たぶに触れられた感触は生々しく残っている。  
だが、辺りにはそれらしい人影は一切なく、誰かいた形跡もない。  
そもそも今の一瞬の俺が起き上がる間に姿を消せるはずがなかった。  
ただの悪い夢だったのかもしれない。実に悪趣味で生々しいリアルな夢。きっと暑さ  
で頭がやられているに違いない。  
そう思いこもうとした時。  
スッ—————。  
ひんやりとした夜風が俺の頬を撫でた。  
ゆっくりと窓の方へと視線を移す。  
すると、昨晚閉めたはずの窓が開いていて、風を室内に送り込んでいるのだった。  
俺はベッドから抜け出し、窓際に立った。  
窓の外おおよそ五メートル下を覗いてみるが、動いている人間はどこにもいない。  
いるのは、いや、あるのは既に息絶えた死体だった。当たり前のように転がる数体  
の遺体は、午前三時の薄い光に照らされ沈黙していた。  
俺は嫌な予感も拭いとるように、乱暴に汗を拭った。  
そして窓を閉め、鍵をかけた事を確認すると再びベッドについた。  
この時、奴がにやりと笑っていたことに、俺は気がつかなかった。

翌朝、ホテルを出ると、明け方上から見た遺体を間近で目撃した。  
誠は顔を歪めた。  
「なんてひどい……。兎って言われてる側も狩人側も、どっちもいる……」  
心を痛める奴にひびやは鼻で笑い、応えた。  
「そりゃそうだよ。だって、これはそういうゲームなんだから。兎も狩人も自分の命をか  
けてお金を稼ぎに来ているんだ。勝つか負けるか、生きるか死ぬかの世界なんだよ」  
「……ちょっとあんた淡々としすぎじゃない？ なんかもっと、こう、言い方ないのかよ。  
人が死んでるんだぞ？ こんな異常で狂った世界、おかしいと思わないのか？」  
誠がやけに不機嫌に口を開く。  
どうやらいざ恨まれているということに気がついてみると、納得がいかないらしい。  
あのあと寝付くまでこいつは、「確かに警察は恨まれる職業ではあるが、それは犯  
人からである。だが犯人は大抵刑務所にいるのだからここにいるわけがない」と豪語  
した。  
どれだけ自分が善人だと思っているのか知らないが、さすがにここまで無自覚に相

手を苛立たせられるのが上手いといっそ才能だと崇めたくなる。

だがひびやにとってはとにかく全てが気に入らないのか、眉を跳ねあげ、嘲笑った。

「異常で狂った世界？ このゲームが？」

「そうだよ。どう考えてもおかしいだろうが」

「貴様はほんととんだ馬鹿だ。一体このゲームのどこがおかしい。現実と何も変わらないじゃないか」

「……はあ？ あんたこそ頭おかしいんじゃないのか？ これのどこが現実と変わらないっていうんだよ」

そこでずっとひびやの目が冷めた。一気に温度が氷点下まで落ちた気がした。

「一寸先は闇。でも金がなければ生きていけない。だから生きる。だけどいつ死ぬか、いつ失敗するかなんて誰にも分からない。常に生きるか死ぬか、二つに一つ。死と隣り合わせに生きている。現実だってそうだろう？ 日常だっていつ事故で死ぬか、通り魔にあって死ぬかなんて分からない。でも金を稼ぐために家に引きこもっているわけにもいかない。なら外に出る。だけれど外に出ればそこは、闇だ」

「……」

誠は一瞬ひるんだ。

確かにそうかもしれない。現実、日常はつい平和すぎて忘れがちになっているけれど、本来は常に死と隣り合わせに生きていて、人なんていつどうなるかわからない。

だからこそ今、その時一瞬を後悔なく生きなければいけない。だが日本は比較的安安全で治安のいい国である。それ故に人は平和ボケをし、「明日でいいや」と先延ばし、後悔し、苦痛にもがく。

このゲームはその死の危険性を浮き彫りにしているだけで、確かにそれ以外はなんら日常とは変わらないのかもしれない。

しかし誠は必死に反論する。

「いいや、違う。日常ではお金のために誰かを殺したり、傷つけることは良しとされていない。法を犯す行為だ。このゲームはまさしく法を犯している。日常では許されない。オーナーも、投資したあんたもロクなめを見ないぞ。俺が必ずこのゲームを破滅に追い込んでやる」

キッと強く睨む誠だが、ひびやは微塵も怯みはしない。

ただ冷たい視線を送り。

「まあせいぜい楽しませてくれればいいんじゃないかな。僕としては貴様には大した興味は抱いていないんだ。貴様がどう考えてどう行動しようともどうでもいい。僕はアブナイ雰囲気がある君の方が、どう化けるか楽しみで仕方がないよ」

にっこりと視線を向けられる。

ぞわりと背筋が泡立った。

俺は何も答えず、視線を空に向けた。

午前中だと言うのにじりじりと暑い日差しが照りつけて来る。息を深く吸い込めば鉄錆の臭いと生臭い臭いがむわんとした生ぬるい空気に乗って、肺に入り込む。

決して居心地のいい環境下とは言えなかった。

「俺こそお前らの事などどうでもいい。俺は雪菜を探しに行く」

そう言って歩き出すと、誠が後ろを走って追ってきた。

「あ、ちょ、待てよ！」

「僕はまた夜になったらホテルに戻るよ。約束通り今日のホテル代も払ってもらおう。しっかり狩って稼いできてくれよ？」

背後でそう言ってひびやが笑っているのは、振り返らなくても分かる。

俺は振り向くことも、返事をすることもせず、進み続けた。隣で誠は振り返り、睨みつけていたようだが、俺が進むのを見て何も言わず、ついてきた。

やがてだいたいホテルを離れ、ひびやの姿も見えなくなった頃、俺たちはビル街を歩いていた。

「ほんと、あいつ何なんだろうな？ どんな神経してるんだよって感じ」

ふっと誠の愚痴タイムが始まった。

「俺絶対あいつとは分かりあえない。そもそも俺が恨まれてるなんてそんなこと……あんたは、あんたはどう思う？ あんたも俺のこと嫌ったり、嫌だなんて思う部分あるか？ あるなら言ってくれ」

俺はお前の恋人か？ そう聞きたくなるような問いだった。実にうんざりする。

「知らない。興味ない」

「おいおいクールだな。なんかもつとこう、あるだろ？」

「ああ、そういうしつこいところウザい」

すぱっと言っただけで、誠はおチャラけた様子で肩を叩いてきた。

「そこは粘り強いって言ってくれよ」

めんどくさい男だ。そりゃ恨みの一つや二つ買うだろと思わなくもないが、本人は無自覚だし言ったところで無駄な気がするので無視。

「けどさ、本当にこんな大きなことをするなんてよっぱど恨まれてんだろうな」

感慨深そうに、そして少し傷ついた様子で呟く。

ちらりと誠の方に視線を向けると、誠は少し俯きがちだった。だがそんな事はどうでもいい。ビルのガラスに誰かが映っているのが見えた。

そいつは反対側の低めのビルの屋上に立ち、こちらを見下ろしている。

ビルのガラス越しに男の様子をうかがっていると、男は何か大きなものを懸命に押していた。

それは大きく傾き――。

「危ない！」

俺は誠の腕を強く引き、数歩後ろに下がった。

「うおっ！」

誠がバランスを崩し、倒れそうになる。それをしょうがなく後ろから支えてやる。

「悪い……ってなんだこれ！」

傾いた何かから大量の液体が零れ、ビシャンという大きな音を立てて地面を叩きつけた。

地面が濡れ、独特の臭いが辺りに充満した。

嫌な予感がした。

そのまま続いてソレが入っていた大きな何かは落下してくる。

カコーンと大きな音を立てて落下したのは、ドラム缶だった。

「一体……？」

誠が俺の手から離れ、その液体に近づく。

「……ガソリン？」

そう呟いた刹那。

男がさらなる何かを落としてきた。

茶色い何かの先に赤く、めらっとした、明かり。

それを認知した瞬間

「伊座波！ 離れろ！」

俺は叫んでいた。

「へ？」

間抜けな声を出し、こちらを振り返る誠を再び引き寄せ、液体から距離をとる。

そのコンマ数秒後。

ポワッ！

落ちてきた松明の火がガソリンに引火し、辺り一面が火の海に包まれた。

熱風が押し寄せ、一気に火が燃え広がる。

「な、なんだ……」

驚く誠を離し、ビルの屋上を見ると男が逃げるのが見えた。

「チッ。逃がすかつ」

俺は走り出す。

「あ、ちょ、ひなた！？」

誠も急いで俺の後を追ってくる。

「ちょ、どこ行くんだよ」

「おそらく兎の仕業だ。狩って来る」

走りながら問いに答えると、誠は溜息をついた。

「待って。確かに危なかったけど兎と言えど人間だって昨日分かったじゃねえか。売られた人間なんだって。そんな奴を容赦なく殺しに行くのもどうかと思うぞ」

「ならお前はそこにいろ」

俺は銃を取り出し、男がいたビルの階段を上った。

手の甲も肩も昨日の傷は浅くはなかったが、動けないほどではなかった。徒歩二十分のコンビニで買った包帯で巻いとけば狩るのに支障はない。

おそらく男はまだこのビルからは出ていないはずだ。

七階建のビルでも下りて抜け出すには時間がなかったはずだ。

エレベータも壊れている。下りて来るなら階段。そこまで大きな規模ではないビルの階段はおそらく一カ所。あってももう一つは非常階段。しかしそこは非常用の特殊な扉がついているはずだ。それを開けるにはおそらく面倒ではないかと推測される。となればすれ違いかどこかの部屋に潜んでいるか。

どうやら何かのオフィスビルのようなようだった。

一階が受付で二階からはいくつかの部屋が並んでいた。どこも扉が閉まっていた中は見えない。

しかし人気は感じられない。

さらにもう一つ上がって行くと、今度は会議室のような広い部屋だと思われる扉が一つだけあった。

そこも外から様子を見ることはできない。

ここでもないのかと一瞬上りかけた、その時。

ガタっ……。

会議室の中から物音がした。

俺は銃を握り直し、会議室の前に立つ。

何だかんだでついてきた誠も肩を竦めつつ、俺の後ろに控えた。

俺は思い切りドアを蹴り開ける。

ガタンッ！

乱暴な音が社内に響いた。

すると、机の陰に隠れていた男がびくりと肩を震わせ、立ち上がった。

長方形を創る長テーブルとイスの並ぶ、如何にも会議を行いそうな空間で男は最奥にあるスクリーンの前に立ち、こちらを見つめてゆっくりと笑った。

「見つかったか。焼ければ良かったのによ……」

粘つく声が室内に響く。とても耳触りに思えた。

特に目立つ顔立ちはしておらず、典型的な日本人のような平らな顔に黒髪が洒落っ気なく伸びている。

そこにつくウサ耳はどこか異様だ。

俺は奴に銃口を向けた。

だがだいぶ精神に異常がきたしているのか、驚くでもなく逃げるでもなく、怯えるでもなく、挑発するでもなく、ただガッカリした表情と、苛立ちを見せた。

「せっかくよう、大量のガソリンと松明まで用意してやったのによ、人が燃えなきゃ萌

えられねえだろ。意味ねえんだよ。人が悲鳴を上げて初めて燃やす意味がある」  
そう嘆く男はスツとライター、マッチ、着火マン、火打石、バーナーを取り出した。  
よく器用に全てを持つものだ。

「なあ？ もう一度燃やしてやるからよう、どれで燃やされたい？」  
焦点の合わない視線がこちらを見つめている。  
今すぐ撃ち殺してやることこそがこいつにとっての救いな気がした。  
ハンマーを引き、弾をセットする。カチリという音が鳴った。  
トリガーに指をかけた、その時だった。

「もしかして……」  
何かを思い出したように誠が口を開く。

「お前、清隆じゃないか？」  
その問いに男がゆっくりと焦点を誠に合わせた。  
そして目を細め、誠の事を凝視し、数秒後「ああ」と懐かしそうな声を漏らした。

「もしかしてお前、同じサークルだった伊座波誠か？」  
清隆と呼ばれた男の表情が苦いものになる。

「そうだ。やっぱ清隆だったんだ！」  
それに対し誠は嬉しそうに返す。

「知り合いか？」  
俺は一端銃を下ろし、尋ねる。  
すると誠は穏やかな笑みを浮かべて頷いた。

「ああ。清隆は大学の時に同じサークルでな、恋敵だったんだよ」  
照れくさそうに笑う誠は、すっかり奴が兎であることを忘れていた。

「でもよ、清隆あの事件の後少しして急にいなくなったからみんな心配してたんだぞ？」  
安心するような、少し怒っているような声はどこまでも同級生に再会した時のそれだ。  
奴が兎でいつ襲ってくるかも分からないということがすっかり頭から抜けている。  
俺は再び銃を構え、間の抜けた空気に緊張感を走らせた。  
案の定誠が焦った表情を見せる。

「ちよ、ひなた！ こいつは俺の友達だぞ？ 人の友人を目の前で殺そうっていうのか？」

俺はその清隆という男から目を離すことなく、口を開いた。

「昔はそうだったかもしれないが、今は兎だ。何をするか分からない」

「いいや、こいつは人を殺すような奴じゃない。人の痛みが分かる、心優しい奴だ。なあ、そうだろう？」

誠の問いに相手、清隆はうんざりしたように肩を竦めた。

「相変わらずてめえは人の事を分かったような口調で話すよなあ」

「え……？」

まさかの返事に戸惑いを隠せない誠。

「俺はお前のそういうところが昔から嫌いだったんだよなあ。変に正義ぶってよう、人の事分かったような口利いて、実際なんも分かつちやいねえ。そういうのって」

一瞬の間が開く。

「むかつくんだよな！」

そう言って清隆は机を飛び越え、ガスバーナーに火を灯しながら突進してきた。

すぐさま反応する俺と呆然とする誠。

俺は誠を突き飛ばし、その反動で自分も反対側に避ける。

左右に避ける形になった俺と誠のどちらに焦点を絞るのか。

しかしその考えが甘かった。

清隆はむしろ突破することを目的としていた。俺たちが避けることで開いた逃げ道。

ドアを抜け、下の階へ走って行く音が響く。

「ちっ」

俺はすぐさま体勢を立て直し、後を追った。誠も起き上がり、すぐ後に続く。

清隆自身それほど足は早くなかった。

二階の廊下ですぐに追いつく。

二階の廊下のガラス張りになった壁面から先ほどの燃えた路地が見える。火は弱まることを知らず、辺りを炎の海へと誘っていた。

このビルに火が移るのも時間の問題だ。

だがそこで清隆は、ガラスの外を見てにやりと笑い足を止めた。

それから何を思ったのか、分厚いガラスに拳を入れる。

パリンという派手な音と共に、そこまで新しくないガラスはあっさりと割れた。けれど当然清隆の手元は紅く染まり、血だらけである。

ポタ……ポタ……。

紅い液体が滴り、奴の足元に斑点模様を創り出す。

しかし当の本人は気にも留めない。

何度も何度も少しずつ場所を変えてガラスを壊していく。

次第に壊れた幅は広くなり、人一人が通れるほどの幅まで膨張する。

「お前のその偽善、どこまで本物か、見せてみろよ」

そう笑ったかと思うと、清隆はその穴の開いたガラスをくぐり、燃え盛る炎の元に自ら身を投げた。

「っ！」

叫ぶより先に体が動いた、そんな感じに見えた。

誠は走り寄り、器用に自分の腹をガラスの切り口で切らないようバランスを取りながら下に向かって手を伸ばしていた。

俺も続いて向かい、誠の手を見た。

それは、しっかりと紅く濡れた相手の手を掴んでいた。血で滑りそうになる手を必死に掴み、引き上げようとしていた。

熱風が入り込み、二酸化炭素が充満する。

引き上げるにも時間の問題だ。このまま時間をかければ一酸化炭素中毒で気を失う。そしてビルに火が移り、燃えて死ぬ。

だが誠はそんなこと、きっと微塵も考えていないのだろう。

「きよ、たか……。俺は、お前と静香の間に、何があったか、聞いた……。辛かったよな。まさか、不慮の事故で、ガソリン缶が爆発するなんて、誰も、思わない。静香が死んだのは、お前のせいじゃない。お前は、そのあと……」

ずるっ……。

血と汗で滑る手がずれ、清隆の体が数センチ下がった。

それでも誠は耐える。

「静香のために、たくさんの涙を流して、苦しみに、もがいた。それは、誰にでもできることじゃ、ない。優しい、お前だからこそ、できることだ……！」

そう言って誠が精一杯力を入れ、引き上げようとした、その時だった。

「だから、そういうのがうぜえんだよ」

清隆はもう一方の手でライターを取り出し、火をつけた。

それを自分を支える誠の手に近付ける。

「っ！？」

誠の額に大粒の汗が浮かんだ。

「まあでもその偽善でせいぜい楽しませてくれよ」

「あっ！ うっ！」

短い声を漏らす先にあるのは、ライターで炙られる、友情の右手。

「苦しかったらいつでも離せばいい」

悪魔のような囁きが耳を叩く。だが誠はその囁きに耳を傾けようとはしなかった。

「絶対、離さない。今、引き上げる、からな」

そう力を込める誠の額には大粒の汗が光っていた。

それに対し清隆は苛立ちの表情を見せる。

「だから、そういうのがいらなんだって」

一層ライターを高く掲げ、火が誠の手首を炙る。

「あっ……うっ！」

痛みと恐怖に顔を歪める。けれど決して手は離さない。

そこにさらにライターを持つ手も、誠の伸ばす手に縋って来る。

誠の体が傾いだ。

しかし足を踏ん張らせ、どうにか留まる。だが、清隆はわざと足をぶらつかせ、離すように、もしくは一緒に落ちようとしていた。



ただぶら下がるソレは、目を開き、こちらをじっと見つめ、額から溢れる血に顔を濡らしていた。

「きよ、たか……？」

呆然とした声が響く。

俺は我を失っている誠の襟首を掴み、後ろに引いた。

すると急にかかった力に抵抗できず、清隆の手を離し、そのまま自分は後ろによろめいて尻もちをついた。

俺は清隆が火に吞まれ、燃えていくさまを見つめた後、ゆっくりと誠に視線を移した。尻もちをつく誠を見下ろすと、誠は唇をわなわたとふるわせながらこちらを見上げていた。

誠がゆっくりと立ち上がり、窓の下を眺めた。

「きよ、たか……」

再びその名を呼ぶ。

そしてふっと我に返ると、俺に飛びついて来た。人のシャツを掴み、唾を飛ばしながら叫ぶ。

「ためえは何をしてくれたんだ！　なんで、なんで余計な事をした！　清隆は、清隆は救えたかもしれねえのに」

それに対し俺は払いのけることも、抵抗することもなく、ただ低く冷たい声で言葉を吐きだした。

「正義を振りかざすだけが救いじゃねえんだよ」

「正義とか、そう言う話じゃねえだろ！　俺は、清隆を友達として」

「友達？」

俺はそこで初めて誠の手を振り払った。

誠がバランスを崩して再び尻もちをつく。

「少なからず友達と見てたのはお前の方だけなんじゃねえの？」

自分でも本当に同情もくそもないと思う。どこまでも冷たく、相手を気遣うなんてものは微塵もない。

思った言葉をストレートに、冷たく言い放つ。

それに誠は強く唇を噛締めた。悔しそうに、それでいてどこか傷ついているように。

だがそれを知っていながら、気が付いていながら俺は、容赦なく言葉を吐きだした。

「このゲームに呼ばれたのだからお前は身に覚えがないかもしれないが、捕まった犯罪者以外の誰かに恨まれた結果だ。誰もが自分が思う自分像と、他人が思う自分が一致しているとは限らない」

一端言葉を切り、続けた。

「お前は俺と仲良くなった気であるかもしれないが、俺はお前みたいな偽善者は嫌いだ」

そう言ってゆっくりと歩き出す。

誠の隣を通り過ぎる時、誠は、俺の脚に縋りついては来なかった。今までの行動を考えると、縋って来るかと少し予想していた。

だけど、誠は縋って来なかった。

ただ虚無感に浸り、ただ呆然と一点を見つめていた。

それが現実だ。

人は人を平気で裏切るし、こっちがどれだけ好いても相手はそれを鬱陶しいと思っている場合がある。

誠は、あまりに真っ直ぐすぎる。

そのまま振り返ることなく俺は、その場を後にした。

もう後を追ってくる足音は、しない。

こうして一人で歩くのは久しぶりだった。

最近はどこに行くにしても舎弟が後を付きまとい、時には自分が組長について歩く時もあった。

いつしか俺は一人で行動することに、不慣れになっていた。

人との付き合いはめんどくさい。だが、結局人は一人では生きられない。

常に誰かの手を借り、誰かに助けられている。どれだけ面倒でうざいからと突き放した所で、本当の縁は切れず、こうして孤独が身にしみる。

俺は、誠の事をどこか、救いたかったのかもしれない。いや、気がついて欲しかったのかもしれない。

真っ直ぐすぎる誠に、世界はもっと汚れていると。誠の綺麗な世界をブチ壊そうとしたのかもしれない。

そうしなければあいつは、これから苦しむ。もっと大きな壁にぶち当たった時、潰れてしまう。勝手にそう思った。

俺と誠はあまりに正反対の道を歩み、正反対の考え方を持っている。

それで俺たちは、本来互いに学び合えるものがあれば良かった。

だけどそれには時間も、口数も少なすぎた。

それは、俺が不器用で人と深く関わるのが苦手で、そして大切なものが出来た時、失うのが怖いからだ。

俺は、雪菜を失った日からずっと、弱虫だ。

「そんな悲しい顔しないでよ、お兄ちゃん？」

ふっと甘い声が耳を打った。

それに弾かれるようにして顔を上げると、そこには一人の少女が立っていた。

電信柱に誰かを待つように寄りかかって立つ、高校生くらいの美少女。

黒髪ストレートロングに半袖セーラー服はどこか大人っぽく、色っぽい。

だけど、その体にぶら下がっているのは、小学生が持つようなピンク色の水筒。  
そして両足の太ももにはホルスターのようなものがほんのわずかに覗いている。  
紺色のソックスに茶色いローファー。

最後のトドメは、ウサ耳。

バランスがどこまでもおかしいその姿は、人形のように美しく、創りもののようになっている。

だが致命的に、おかしい。何かが、おかしい。

「やっと、会えたね、お兄ちゃん」

にっこりとほほ笑む姿に、背中が泡立った。

悲しみと絶望と、懐かしさと嬉しさと、色んな感情が込み上げてきた。

「ゆき、な……」

「お兄ちゃん、ずっと会いたかったよ」

落ち着いた声ではあるけれど、舌ったらずで甘いとろけるような響きは幼いころと変わらない。

俺は呆然と雪菜を見つめてしまった。

ずっと俺の中で幼かったイメージが、大きく成長した。

美しく、なった。

だがその体は傷だらけで、どこか狂気的な雰囲気醸し出している。

「ねえお兄ちゃん、お兄ちゃんに会わせたい人がいるのよ。付いて来て」

そう手を伸ばされた。

俺はその手を見つめる。

手の先に見えた腕は切り傷や、根性焼きのようなものが無数に残っていた。

ズキンっ————。

心が痛んだ。

しかし雪菜はそれを隠そうともせず、何も自分には見えていないと言うように無視し、俺の手を引っ張った。

「ほら、早く」

強引にどこかに連れていこうとする姿は、幼き日に公園に遊びに連れて行って欲しいとせがむ姿によく似ていた。

そう思うと野暮な質問で、この懐かしい雰囲気を壊す気にはなれなかった。

このまま引かれて、あの頃に、過去に戻りたい。

そう、願った。

「お兄ちゃん、カッコよくなったね」

「え……？」

「スーツ、すごく似合ってる」

「そう、か……？」

急に褒められ、どぎまぎしてしまう。

「うん、自慢のお兄ちゃんだよ」

そう振り返って笑う姿は、実に愛らしい。

「きっと、最高におい————ろう、な。お兄ちゃんの、××××は」

ずっと正面を向く雪菜の言葉を、俺は聞き取ることが出来なかった。

でも確かにその顔に影が落ちた。

雪菜は一体、なんて言ったのか、兎になった今、何を考えているのか。

知りたい。

「雪菜」

俺が足を止めて呼びかけた、その時だった。

「着いたよ！」

雪菜も足を止め、体ごと振り返った。

ビル街を抜け、屋下がりに立たずむ校舎。そこに学生の活気ある声は響いていない。

本来なら昼休み辺りだろうか。

だが実際は生徒は存在せず、朽ち果てた高校がそこに立っていた。

「ここでね、お兄ちゃんを待っている人がいるんだよ」

「俺を、待っている人……？」

「うん。体育館にいるって、言ってた！」

雪菜は学校の入るのが楽しみで仕方がないとでも言うように浮足立っていたる。

その調子で俺を引っ張り、そのまま体育館まで向かった。

学校に入ったのは久しぶりだった。

中学校さえまともに通わず、高校すら卒業していない俺としては、あまり馴染みのない場所だった。

蒸し暑い校舎で手を繋いで歩くと、互いの汗がじんわりとしみぬめりとした感触が伝わって来る。

その時俺はわずかに嫌な予感がした。

それは汗ではなく、実は血なのではないかと変な錯覚がしたのだ。

だがそれでも離さなかったのは、なんだかここで雪菜を離したら、今度こそ二度と会えない気がしたから。

だから俺は、雪菜の手を振り払いしなかった。

土足のまま進んでいくと、体育館の大きな観音扉が見えてきた。

鉄の重い扉の先には誰が待っていると言うのか。

雪菜はパッと俺の手を離し、扉に手をかけた。

「ふふっ」

楽しそうに扉を押しあける。

熱気が顔を覆った。

暑苦しく、威圧的な空間が出迎える。けれどそこにはまだ誰もいなかった。  
誰もいない、何も無い、ただ広い空間だけがそこに広がっている。

「入って」

雪菜の声に促されて一歩、体育館に足を踏み入れる。  
辺りに誰もいないことを確認しながら慎重に入っていくと、雪菜が扉を閉めた。  
二人きりの空間が存在する。

「お兄ちゃん、やっと、やっとこの時が、来たのね」

俯いて声を震わせる妹は、泣いているようにも、怯えているようにも、怒っているようにも見えた。

「ゆき、な……？」

何かが、おかしい。  
俯いた雪菜が自分のスカートを巻くしあげる。  
艶めかしい白い太ももが完全に露わになる。  
スカートで半分隠れていたホルスターが完全に視界に入る。  
そしてその艶めかしい太ももにも傷が、無数に存在した。  
その痛々しい傷を全て無視し、雪菜はにっこりとほほ笑んでホルスターに手を伸ばした。

ホルスターから何かを取り出したかと思うと、目にもとまらぬ速さで走り寄って来る。  
気がついた瞬間には。

「っ！」

腕に鋭い痛みが走っていた。  
横を通り過ぎる風は、ふわりと血の香りを乗せていた。  
何が起きたのか分からないまま、ゆっくりと右の二の腕を見ると、スーツが裂け、その裂け目が紅く染まっていた。  
俺は動揺を隠せないまま振り返ると、短刀を持った雪菜が微笑んで立っていた。  
その短刀は紅く、色付いている。  
雪菜はその血のついた短刀をうっとり眺め、ほほ笑んだ。

「ああ、これがお兄様の、お兄ちゃんのブラッド。最高に美味しいはず。うふふふっ」  
つう—————。

紅い液体に、赤い舌を重ね、鈍色に光る刃を舐める姿は今日まで見てきた誰よりも、  
どんな兎よりも、狂氣的だ。

「ああ、お兄ちゃんのブラッド、お兄様の血イイイイ！ 最高に甘くて、苦くて、鉄錆臭くて、  
どんなブラッドよりも、美味しいですわ」

俺の中で全てが碎ける音がした。

碎けて崩れて、あることを悟った。

もう、あの頃の雪菜は、いないのだ、と。もっともっと早く、父親が連れ去ったあの時

から、本気で救いに行かなければいけなかったのだ。

あまりに俺は来るのが遅かった。

「ああ、もっとお兄ちゃんを傷つけたい、もっと血が欲しい、ポロポロに傷つけて血まみれにしてそれを全て舐めつくしたい誰にも渡したくない誰にもこの血は私だけのものお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！」

「落ち着きなさい、ナンバースリー」

どこからともなく男の声が響いた。

その声の方に視線を向けると、壇上に一人の男が立っていた。

遠くからでも分かる、やけに仕立てのいいスーツが、品のない顔に不釣り合いだった。

俺と同じような鋭い目つきをし、無愛想な表情を持つ男。

俺は、奴を知っている。

「親父……」

「久しぶりだな、ひなた？」

認めたくないが、認めざるを得ない、正真正銘の血の繋がった父親である。

「元気にしていたか？」

親父、いや、大空賢治はにこやかな笑みを浮かべた。

「母さんは元気か？」

「母さんは死んだ」

賢治の問いに間髪を入れることなく応える。

「お母さん、死んだの？」

その応えに雪菜が動揺した声を上げる。

だが、その一方で雪菜の足は賢治の元に向かっていた。

俺はそれを止めようと口を開きかけたが、俺が話す前に賢治が不快感を与える笑い声をあげた。

「はははは！ あいつは死んだかっ。俺の借金を背負ってか？」

その瞬間怒りが爆発した。

雪菜を止めるより先に怒りの声を上げる。

「母さんはお前のせいで自殺した。自らの手首を切ってな。お前が俺たち一家を崩壊させた。借金は今俺が背負ってる」

怒りで胃が煮え繰り返りそうだった。

それでも何とか思考は冷静さを保つ。しかし賢治はただ、そうかそうかと笑っただけだった。

「どうやって借金を返している？ あそこの組長はしつこかったよなあ？」

まるで他人事のような。借金を作ったのは自分ではない、自分は無関係であるとも言いたげだ。

俺は拳を握りしめた。

「その組の元で働いてる」

「ほう。つまりヤクザになったわけだ」

「ああ。お前のせいで俺の人生台無しだよ」

「まあそう言うなって。俺だって大変な人生だったんだぞ？」

壇上に上がり、隣に立つ雪菜の頭を撫でながら語り始める。

「結婚して、子ども生まれて、会社の子に言い寄られて、ちょっと体の関係もったからって結婚しろってうるさくて、断れば会社にバラされ、異動。だけど既に俺の事は噂になっていて異動先ではみんなドン引き。馴染めずクビ。その後転職先を探すも見つからず、アルバイトしながら家族を支えてた」

機械的に頭を撫で続ける賢治に、雪菜は何も言わずただ黙って撫でられ続けている。

それが宿命であり、命であるというかのように。

それは、父親と娘というよりかは、ご主人とペットといったように見えた。

「だがある時店の金庫から金が消えた。その時盗んだのが俺じゃないかと疑いをかけられ、そのまま疑いを晴れさせずクビ。俺じゃないのに。どこからともなく流れた俺の噂から常識がないに決まっているという理由で疑われたんだ。冗談じゃない！俺はその日からもう真面目に生きているのが馬鹿らしくなった。だから酒と煙草と、パチンコに溺れた」

開き直ったクズが。所詮自業自得だ。

心の中で毒づく。

「そしたらお金が足りなくなった。だから借りた。そしたら馬鹿みたいに利子がついて返せなくなった。もう返せないし死んでやろうと思った。そしたらこのゲームのオーナーに出会って救われた。私を調教師として雇ってくださった。だからまずこのナンバーズリーをオーナーに売って調教して見せた」

「お前、雪菜の事……」

「雪菜……？ ああ、こいつの元の名前か。こいつは今やただの兎。うちは兎を数字で呼ぶシステムでね」

今すぐにでも殺してやりたい。

そう思うと体は既に動いていた。

ここに来て初めてリボルバー式の銃を取り出す。

それは、六発で必ず賢治をしとめるという信念からだった。それにオートマチック式は怒りにまかせて乱射した時、弾が詰まらないとは限らなかった。

だからこそ冷静に、六発で決めると誓ってリボルバーのハンマーを外す。

トリガーに指をかけた時、賢治が悠然と口を開く。

「まあ待て。まだ話しがある。一つ、提案をしよう」



った」

ひびやを払いのけることなく、淡々と言葉を紡ぐ。

それに賢治は眉を跳ねあげた。

「そりゃ、まるで俺が悪いみたいな言い草だな？」

「間違っていないと思うが」

間髪をいれずに応えると、賢治は一層青筋を浮かべ、こちらを虫けらでも見るような目で見つめてきた。

「お前はほんとと昔から癪に障る奴だよなあ？ いつも俺を冷めた目で見つめて、まるで人間に向ける目じゃねえ。なのに雪菜には良いお兄ちゃんぶって優しくしてよう？ 俺や家内にはひでえ視線を向けやがる。ほんと、気に食わねえよなあ」

そう言ってちらりと雪菜の方に視線を向ける。

するとそこでにやりと嫌な笑みを浮かべた。狐のような、何か良いことでも思いついたと言うような、無邪気で悪戯な笑み。

吐き気と嫌な予感が込み上げて来る。

「なあ、お前も一端俺の前で苦しんで見せろよ。足搔いて見せろよ。子供らしく喚け。啼け。俺の苦しみを倍以上でめえも味わえよ」

「っ！」

そう言った瞬間賢治は雪菜の手を掴み、ポケットから取り出したペンチで爪を引き剥がした。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああ！」

雪菜の絶叫が体育館に響き渡る。

熱気にわずかなる血臭が混じった。

白い雪菜の右手親指から紅い液体が溢れだし、足元に模様を作った。

「やめろ！」

俺がひびやを払いのけようとする、ひびやは強く俺を抑えつけた。

「悪いな。約束があるって言っただろ？ 今は僕をたくさん呪って？ そして後で殺してよ。虐めて？ ふふっ。楽しみだなあ」

ひびやの楽しそうな声が耳元に響く。

「どうだ？ 貴様のせいで肉親が傷つけられる様は」

「ご主人様、どうしてですか？ 雪菜は、いいえ、ナンバースリーはしっかり仕事をこなし、お約束をお守りしたではありませんか。お兄様をこちらにお連れすると。そして一切りだけ許し、その血を一滴のみ堪能していいと。そのお約束をお守り」

「黙れこの兎風情が！」

パンっ！

派手な音をたて、ビンタを喰らった雪菜が舞台上で倒れる。

それは、さながらシンデレラを演じる生徒で、継母に苛められる哀れな姿のようだった

た。しかしこの中に魔法使いなど存在することはなく、誰も助けてなどくれない。

「貴様は俺の玩具として、下っ端として言うとおりにしていればいい！」

そう怒鳴りつけ、倒れた雪菜の左手掴んで無理やり起こす。

そして次に左手の中指にペンチをかけた。

「おやめください！ お願いします！ 痛いのは嫌なのです！ 嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ助けてお兄ちゃん！」

叫びも虚しく、容赦ない力で爪が引き剥がされる。

「いやあああっ！ あっあっ……」

雪菜の嗚咽が蒸し暑い空気と一緒に耳を掠める。

「貴様……！」

怒りが沸々と湧きあがり、今すぐにでも殺してやりたかった。

その汚らしい手から雪菜を解放してやりたかった。

だが、今の俺は無力だ。

予想以上に強いひびやの力に俺は今だもがき、足掻くことしかできない。

情けない。妹一人守れないのか。

「がははははははっ！ さあ啼け。喚け。俺に乞うんだ。助けてくれ、兎にしてください。

そして調教してください、とな！」

俺はした唇を噛み、押し黙る。

「……足りないと言うのか？」

俺が言わなければ、この拷問はきっと続く。

次に賢治が取り出したのは、ホッチキスだった。

ああ、言わなければならない。それが、雪菜を助ける方法だ。

頭では理解していても口が動くことはなかった。

その結果。

バチンッ！

「っあっうえあっ」

言葉にならない雪菜の声が響いた。

雪菜の下唇からは大量の血が溢れていた。

そして少し離れたこの位置でもわかる、きらりと銀色に光るそれは、ホッチキスの針だった。

ホッチキスの針は雪菜の下唇に突き刺さり、肉に埋め込まれている。

痛々しい光景に俺は、声すらも出なかった。

「そうか。お前にとって妹とはその程度の存在だったか。所詮は自分が可愛いからこそ自分を犠牲にしてまで人を助ける気はないってわけだ？」

嘲るように嗤う声に反発しようとした。

だが声が出ない。

「ひどいお兄ちゃんだなあ」

「おに、い、ちゃん……」

痛む唇を震わせながら、痙攣する瞼を開きながら、俺を呼び、俺を見つめる雪菜。  
助けなければ……。

「やめ、ろ……」

俺は屈辱を嚙締めながら言葉を吐く。

「何？ 聞えないんだよ！」

そう叫んだ時には、雪菜の愛らしい長い睫毛が数本ぶち抜かれ、生理的な涙が頬を伝っていた。

「っ！」

「ほら、ちゃんと啼けよ！ どうせお前なんか社会に出ても誰にも必要とされねえしまとも生きていけねえんだからさっさと乞え！ 兎になれよ！」

「あああっ！」

怒りが増し、ヒートアップするたびに雪菜が傷ついた。

口の端からも血が溢れだす。

二つ目のホッチキスの針が埋め込まれた。

「もう、やめてくれ……」

「ああん？ やめてください、だろうが！」

雪菜の右手、小指の爪が近くまで飛んできた。

紅く濡れた、小さな欠片。

「どう、して……ゆき、な、いい子に、してた……」

体が震え、マヒする状態で感情的涙が雪菜の頬を伝う。

その瞬間、俺はある事を悟った。

雪菜の体にあった無数の傷。切り傷や、根性焼き。アレらは全て、調教の果てに付けられた痕なのではないかと。

雪菜は自分を守るために、人を狩り、賢治にとってのいい子でいた。

だが今、俺のせいで雪菜は再び苦痛に耐えている。

だからこそ疑問が浮かんで、賢治に問うているのではないか。

胸が激しく痛む。

「雪菜……」

俺の声に濡れた瞳がこちらを見つめた。

「自分の血は……美味しく、ないよ……」

口の端に垂れた血を舐め、涙する妹。

「たす、けて……」

「っ！」

頭をぶん殴られた気がした。

「お願い、します。これ以上、雪菜を……傷つけないでください」

苦虫を噛み潰したような感覚とはまさにこのことだろう。

俺は歯を食いしばった。

「がははははははははははははっ！ ついに屈服したか！ だがまだだ。もっと、全力で頭を擦りつけてお願いしろ兔風情がっ！」

その言葉にひびやの力が緩んだ。

そして耳元で囁く。

「もしこれで君が下手に動いたら即刻彼女は死ぬよ？」

どくんっ。

心臓が大きく飛び跳ねた。

雪菜が、死ぬ……？

そんなこと、させるわけには、いかない。

俺は後ろに回された手を頭のすぐ近くに持ってきた。足は正座の状態にし、額を地面にこすりつける。

「これ以上、雪菜を、傷つけないでください。どうか、どうか雪菜だけは、助けてください」

「ははははははっ！ 情けねえなあ！ どうだ？ 普段は人を虐げ暴力を奮うお前が、誰かに頭を下げる気分はよう！ てめえもしっかりその目で見やがれ！」

わずかに顔を上げると、雪菜の髪が掴まれ、無理やりこちらを向かせていた。

雪菜は痛そうに頭皮を抑える。

「よく見ろよ！ 自分の兄貴の無様な様をよ！」

「ぐあっ！」

目を開かせる素振りですぐ再びそのまま睫毛を引き抜かれる。

俺は再び頭を熱い体育館の床に擦りつけた。

「頼む。もう、やめてくれ……」

「やめて欲しいか？ なら俺の言う事を聞け」

その言葉にゆっくりと顔を上げた。

顔を上げた瞬間———。

コトンっ……。

目の間に何かの音が響いて来た。一体何が響いて来たのか、何が起きているのか理解できなかった。

壇上に視線を向ける。

するとそこには、右手の中指と人差し指を失い、溢れんばかりの血を流す雪菜がいた。

それを見た後、目の前のソレを見る。

理解した。

これは、雪菜の右手の人差指だ。いいや、中指か。分からない。でも少なからず雪菜の指である事に間違いはなかった。

ほっそりとした白い原型はとどめておらず、紅く濡れた肉がそこにあった。

「それをしゃぶれ」

賢治は冷酷な声でそう、告げた。

「……は？」

思わず無意識にそう口にしてしまった。

「こうだよ」

しかしそれに構わず賢治がもう一本の指を雪菜の口の中に突っ込んだ。

苦しそうな雪菜の顔。

歪み、痙攣し、ほぼ気を失いそうな、意識が飛びそうな虚ろな瞳はもう生気がない。

「早くやれよ」

怒鳴るよりも圧倒的に圧力があつた。

俺はゆっくりと転がるソレに手を伸ばした。

だが、手が届く前に

「おえええっ……」

雪菜が壇上で吐瀉物をぶちまけた。

ついに全てが壊れてしまったかのように青白い顔をし、胃の中の全てをぶちまけてしまった。

目は虚ろで何を見ているのか分からない。

それに対し、賢治は容赦なかった。

「うっわきたねえ。てめえよくも」

そう言って雪菜の髪を引っ張ると、最後の凶器、鋏を取り出した。

「っ！」

俺は息を呑む。

そして雪菜もまた、最後の正気と生気を取り戻す。

「髪だけはやめて！」

最後の最後に力を振り絞った叫びだった。

俺もそれだけは、耐えられない。



俺が静香と出会ったのは、大学生の時だった。

同じサークルのマドンナ的存在だった北城静香はとにかく美しかった。可愛らしかった。

上品なセミロングの黒髪をポニーテールでまとめ、引き締まったウエストと、それに反するグラマラスなバストが実に色っぽかった。

テニスサークルなだけに、ダブルスを組みたいと思っていた男も多かったはずだ。俺もできることなら一緒に組みたかった。もちろん男女でペアは分かれていたから無理だったけど。でもそんな色っぽい彼女は、顔だけは童顔で更に性格も少し幼かった。というより無邪気だった。

いつでもにこにこしていたし、とにかく笑いのツボが浅くてよく笑う女性だった。そこがまた男性からは対戦相手から守ってやりたいと思わせる一面でもあった。だけど、大学時代の俺はとにかく静かで地味で目立たない、影のような存在だった。基本的に人と話すのが苦手だったのだ。

何を話しているのか分からなかった。サークルに入ったのだからこんな自分が嫌で中学校の時から続けていた、という理由で何となく入ったにすぎない。だからそんなスポーツマン的な爽やかさは微塵もなかったし、フレンドリーさもなかった。

そんな俺が彼女と口を利ける日なんてまずないだろうと思っていた。こんな俺が話せるわけがないと。

俺なんかは遠目に見ているだけで満足だ、拝めるだけで幸せだと、そう思っていた。でもそんな俺に誠は、声をかけてきた。

「お疲れ様。佐上清隆くん。俺のこと、覚えてくれた？ 伊座波誠っていうんだけど」差し出された水を見つめていると、中性的で人当たりの良さそうな笑みがこちらを見つめてきた。

俺は俯きがちにその水を受け取る。

すると誠は嬉しそうにベンチで俯く俺の隣に座って来た。

そして、唐突にこう言った。

「清隆ってさ、北城さんのこと、好きなの？」

学校に入って一カ月くらいたった頃だったと思う。まだなかなかボールを打たせてもらえない俺たちは並んでベンチに座り、先輩たちの打ち合いを見ていた記憶が強い。

俺は驚きのあまり受け取った水を手放しそうになり、目を見開いた。今にも座っていた椅子から転げ落ちそうな勢いを持つ俺を見て誠がくすくすと笑う。

「そんなに驚かないでよ。別に取って食ったりしないよ？」

冗談だと笑う奴を俺は、苦手だと思った。

いまいち何を考えているのか分からず、容赦なく人の心に入りこんで来ようとする人間は自分の考えを読まれているような気がしてあまり得意ではない。

しかし俺のそんな気も知らずに誠は続けた。

「ここに通って一カ月。だいたい人間性とか関係性が読めてきたような気がするよ。特にあんたは分かりやすい。ずっと北城さんのこと、目で追ってるよね？」

「……」

「いいよな、北城静香。一見大人しそうで優しい大人な女性って感じがするのに、時に

子どものような無邪気な笑みを見せる。ありや反則だ」

俺は黙って誠の言葉に耳を傾けていた。

どうにも目を合わせる気にはなれなかった。

「でもこのサークル、もしくは学科でも北城さんを狙っている人は多いぞ。俺も含めて、な」

そう意地悪に笑うのを見ると、吐き気がするほどの嫌悪感を抱いた。

「北城さんにアプローチしなくていいのか？」

更にそう意地悪に問うてくる。俺はその場から逃げだしたくて仕方がなかった。

俺は俯きながらぶつぶつと答えた。

「だって……俺なんかが、北城さんと、話しができるわけ、ない……」

「私は何？」

思わず弾かれるようにして顔を上げた。

するとその噂の北城静香が俺の方を覗きこんでいた。

立った状態から腰を曲げて覗いてくるものだから、目の前にはそのグラマラスな胸があり、谷間が見えそうで視線のやり場に困った。

だからといって上を見上げれば整った本人の愛らしい顔がある。

俺は結局上げた顔を再び、下に向け、視線を自分の太ももに向けた。

すると誠が楽しそうに笑う。

「北城さんって綺麗だよねって話し」

「っ！？」

俺は俯いたまま誠を睨みつけた。

この瞬間俺は誠の事が苦手から嫌いに変わった。

何でも分かっている、俺なら分かってやれる、俺に任せろ、いかにもそう言いそうな雰囲気漂っている。

他人に心を覗かれるのは、悟られるのは苦手だ。

だがこいつは平気で踏み込んで来ようとする。

「もう、伊座波くんったら。冗談が上手ね？」

「いや、冗談じゃないよ？ ね、清隆」

「……」

心の中で舌うちが出る。

一体こいつは何を考えている？ ああ、俺にそれを言わせて彼女に気持ち悪い印象を抱かせて、ドン引きさせてライバルを減らそうっていう魂胆か。

別にわざわざそんなこざかしいことしなくても彼女の眼中に俺はいないって。

「……う、うん。北城さんは、綺麗、だと思う、よ」

溜息ながらに答える。

いっそ引かれるならもうそれでいい。どうせこのままいったって話すきっかけなんか

なかつただろうし、それ以上なんてまずありえない。

好意が減ることはあっても増えることはないのだから。嫌うなら、それでいい。話せただけでも、良い思い出だ。

そう覚悟を決めた時だった。

静香は曲げていた腰を真っ直ぐにし、手をパチンと合わせて笑った。

「嬉しい。佐上くんって私のことそういう風に想ってくれてたんだ」

「え？」

俺は思わず間抜けな声を漏らしながら顔を上げた。

「だって佐上くん、サークルに入ってから全然私と口利いてくれないし、嫌われてるのかと思っちゃったよ」

「お、俺が北城さんを嫌う！？ そ、そんなわけないよ！」

自分でも引くくらい熱のこもった声がコート全体に響いた。

辺りが一瞬の静けさに包まれる。

声に反応し、変な方向に飛ばしてしまったボールがコロコロと足元に転がって来た。

恥ずかしさに気が狂いそうだった。

俺はボールを拾い、先輩たちに返そうと投げようとした時だった。

「ねえ、良かったら私と勝負してもらえない？」

振りあげかけた手を止め、ゆっくりと静香の顔を見上げた。

「佐上くんって高校の時、県大会シングル出場の実績あるよね？」

「え、あ、うん……まあ」

「私一回佐上くんの試合、見たことあるの。すごく上手で、冷静で、確実なショット決める姿、ずっとカッコいいなって思った」

「っ！？」

「だからそんな佐上くんにお願い。私と勝負して私が勝ったら私のお願いを聞いて？」

その代わり佐上くんが勝ったら私も佐上くんのお願い聞くから」

なんだこの少女マンガ展開。

俺はなんて返事したらいいのか分からないまま、首を横に向けて誠に助けを求めていた。

すると誠はしてやったりと言わんばかりに笑っていた。

こいつは一体、本当に何を、考えているのか。

「で、でもコートが……せ、先輩たち、使ってるし……」

ヘタレの俺はそんなことをごによごによと言ってみる。

それに対し、静香はにこっと笑って背を向けたかと思うと、先輩の方に走って行き、何やら交渉を始めた。

交渉時間三十秒。

男子の先輩二人で使っていたコートをあっさりと開け渡してくれた。

これが美女の力か。

「受けてくれる？」

ベンチまで戻って来た彼女が遠慮がちに尋ねて来る。

当然断ることなどできるはずもなく、むしろここで断っては男じゃないという覚悟の元、俺は頷いた。

すると彼女は嬉しそうに笑い、コートに走って行った。

俺はラケットを持って立ち上がり、ちらりと誠の方を見つめる。

「頑張れよ。良いチャンスじゃん」

そう笑う誠は、悔しくないのか。嫌じゃないのか。それとも俺が恥をかくのを楽しみにしているのか、全く分からなかった。

「……水、ありがとう」

俺はそれだけ言って一口だけ水を飲み、それをベンチに置いて走り出した。

そして俺たちの試合は始まる。

何故か全サークルメンバーが俺と静香の試合を見守り、そして大半が静香の応援に回った。

数名もてはやされる静香に不満を抱いた女子が俺を応援してくれた。

正直お願いなんかなんも思いつかないし、考える余裕なんてなかった。

でも男女というだけで体力の差はだいぶあるし、正直負ける要因は何もなかった。

だけどそれは予想以上に苦戦し、彼女もまたなかなかの腕の持ち主だった。

よくコートの端から端まで走るし、スマッシュ打っても取るし、時に強烈なスマッシュを決めて来る。

セット数を重ねるたびに熱くなり、俺も女性と言う事を忘れて本気を出してしまった。

そして最終セット。フルセットまで持ち込み、互いに汗をだらだらと流しながら最後の最後、俺のスマッシュが決まり、勝負が決まった。

ゲームが終わった瞬間静香の周りには人が集まり、タオルを差し出していた。

俺の方には誠がゆっくりとタオル、水を持って歩みよって来た。

「お疲れ様」

「……ありがとう」

俺は水を受け取り、一気にボトルの五百ミリリットルのペットボトルの半分を飲み干した。

そのままタオルも受け取り、髪が張り付くくらいおでこにかいた汗を拭った。

「何を願うつもりなんだ？」

タオルに顔をうずくめる俺に誠が楽しそうに聞いてきた。

俺はタオルを顔から離し、じっと誠を見つめた。

「もしさ、俺が北城さんに付き合っとか言ったらどうするの？」

自分でも感情の籠らない冷たい声だった。

ちょっと露骨に態度に出しすぎたかもしれない。

だが、誠は傷ついた様子もなく、むしろ嬉しそうに笑った。

「俺は、それでいいと思う。たぶん北城さんもお前の事好きだと思うし」

「はあ！？ そそそ、そんなわけ、ないだろう。そもそもお前の気持ちはどうなんだよ。お前だって好きだったんだろ？」

俺の動揺をよそに肩をすくめて見せる。

「北城さんは俺には全く気がないよ。そんなの見てれば分かる。北城さんもずっとあんたのこと視線で追ってた」

「いやいやいや！ だってまだ俺たち大学に入学してサークルに入って一カ月だぞ？ そ、そんなんで人が恋するなんて。ましてや俺、みたいな、根クラ……」

再びタオルで口元を拭うふりして覆う。

それに対し誠は呆れたと言わんばかりに溜息をつき、口を開いた。

「さっき北城さんも言ってただろ。あんたの試合を前に一度見たことあるって。だから向こうの恋はとっくの前から始まってんの」

なんか、すごいかっこいいこと言ってる気がするけど。

「それにあんたさ、俺なんかとかいうなよ。北城さんにも失礼だろ。あんた、自分が思っている以上に悪い駄目な奴ではないと思うぞ」

ずっと誠から視線を外す。

どうもストレートに表現してくる奴や、真っ直ぐすぎる奴は苦手だ。

「テニスもうまいし、何気気を遣えるし、優しいし、ちょっと人と話すのが苦手なだけで人の事もちゃんと見ている」

やっぱりどうにも俺はこいつが嫌いだ。

真っ直ぐすぎて、分かったような口を利いて、全てを理解しているかのような、俺だけは分かってるっていう自己満足に浸っている。

俺がなんて言っているのか悩んでいると、静香がこちらに歩み寄って来た。

「さすがだね！ 結構頑張ったんだけどなあ。悔しい」

そう笑う静香の額には汗が浮かんでいた。いつも白い肌も、今は暑さで火照って赤くなっている。

すでに赤い肌を更に赤らめて、静香は俯きがちに口を開く。

「えっと…それで約束、についてなんだけど……」

「あ、えっと……」

俺はどうしたらいいのかわからず、頭をポリポリと搔いて視線を逸らした。

すると、誠がまるでしょうがないなと言うが如く、間を取り持とうと一肌脱ぎ始めた。

「清隆は考えてなかったみたいだし、北城さんが考えたお願い、言うだけ言ってみたら？ それでイエスかノーで答えてもらえばいい。イエスなら願ったり叶ったりだし、ノーだったら負けたんだから文句は言えないって事で」

どう、名案でしょみたいな顔をしているが、俺としてはその恩着せがましい態度が苛立ちの原因だった。

だが、静香は納得したのか、じゃあと口を開き始めた。

「あの、ね……？」

言いにくそうに俯きながら、しかし深呼吸をすると何か決心したかのように一気に吐き出す。

「あの、私と付き合っただけなの！」

その時正直嬉しさとか驚きとかより先に、誠の言っただろと言いたげなドヤ顔への怒りの方が早かった。

それにこれは何かのドッキリなんじゃないかという疑いもあった。

このマドンナ的存在である北城静香が俺に惚れるわけがない。

俺の事など何も知らないはずだ。そんな静香がいきなり告白。それもこんな少女漫画的展開で。

絶対何かの悪ふざけに決まっている。

「だめ、かな……？ やっぱ、ノー……なのかな？」

遠慮がちな問いに返す言葉を必死に脳内で構成する。

静香の戸惑った顔に対し、誠は何してんだと怒りそうなオーラを醸し出していた。

俺は肩を竦め、ゆっくりと静香を見つめて口を開いた。

「もちろん、いいよ」

「……え？」

静香が何かに弾かれるようにして顔を上げる。

そんな静香から俺は視線を外した。

こう答えた理由は二つ。

もしこれがドッキリで何かの遊びなら、北城静香という女はそれほどつまらなくくだらない女にすぎないと知ることができるから。

もう一つは、仮に本当だったとしたら。そうだとしたらこの誠と言う男の偽善がどこまで続くかを見ることができるから。

本当に静香の事が好きなら心から喜べるはずがない。

だが俺の予想とは裏腹に、誠は心から嬉しそうに笑った。

「良かったな、清隆。それに北城さんも」

本当に嬉しい、心から祝福する、そんな笑みに俺は、深く闇に突き落とされた気がした。

その後俺と静香は順調に交際を重ね、付き合っただけ半年という年月を経た。

静香の気持ちに嘘はなく、いつになってもドッキリだったと言われることはなかった。

次第に俺も静香を信用するようになり、素直に静香が好きだと思えるようになったし、

素直に静香が俺を好いてくれている事を受け止められるようになった。

ただ誠とだけは未だに反りが合わない。

それでも同じサークルだし、元恋敵だしと言うことで仲は続いている。

一度本人にも悔しくないのかと尋ねた事があった。

だが誠は、「好きな女が自分で決めた人と幸せそうな毎日を送っているのに辛いわけがない、嫌なわけがない」と笑った。

そんな誠が俺はやっぱ、苦手だ。

それでも何とかかんとか今まで大きな亀裂が入ることなく過ごしてきた。

ささやかな不満やささやかな鬱陶しさは感じるけれど、俺の毎日は、確かに充実していた。

今日もこうして半年を祝して温泉旅行にドライブがてら向かっているのだから、これを充実していると言わずしてなんというのか。

二人で初めての旅行に自然とテンションが上がってしまう。

俺のハンドルを握る手はびっしょりと汗ばんでいた。

それはテンションが上がっているせい、はたまた真夏の暑さのせい。

「晴れて良かったね」

助手席に座る静香が窓から入る風に帽子を飛ばされないよう押さえながら口を開く。

「そうだね。でもこんな暑い中温泉で良かったの？」

俺はちらりと静香の方を窺いながら尋ねた。

すると、静香は首ごとこちらに視線を向けて来る。

あまり気を取られないようにしながら、静香の方に意識を向けた。

「うん。私清くんとゆっくりお話ししたり、のんびりしたりするのが好きだもん。もちろん遊園地とかで遊ぶのも楽しいし、色んなところも行きたい。でもやっぱりお話しする時間って大事だと思うから、いい機会かなって」

それに私温泉って好きだよ、とつけたして笑うのが横目に見えた。

今にも全意識を持って行かれそうなくらい笑みである。

しかしここで俺が全意識を向けようものならきっと事故を起こすだろう。

俺は冷静に前を見据え、

「そっか……。俺も、温泉は、好き」

それだけ答えた。

「ふふっ」

その短い返事に静香の嬉しそうな笑い声が返ってきた。

なんだか急に照れくさくなって頬が温まるのを感じる。

急に火照る頬から意識を遠ざけたくて、何とか新しい話題に持って行く。

「それにしてもずいぶん田舎の方まで来たな」

「うん、そうだね。さっきから田んぼとか、木とか、たまーにお店があるくらいだもんね」

再び窓の外に視線を向けた静香が共感する。

「まあ歴史ある宿って書いてたしな」

インターネットで調べ、予約し、カーナビを頼りに車で走って来たわけだが、それらしい建物は今だ見えてこない。

「コンビニとかもないしな。喉とか、乾いてない？ その、ほら、エアコンもしてないし……」

情けないことに金欠気味だった俺は、宿代を用意したらガソリンを入れる余裕があまりなかったのだ。

おかげで今にもガソリン切れを起こしそうなギリギリのラインを彷徨い、節約のためエアコンは切っている。

暑さを紛らわしてくれるのは全開の窓から入って来る生ぬるい風だ。

「大丈夫だよ。それより、帰り道は大丈夫なの？」

心配そうに伺ってくる静香。

「ああ、実は今日が給料日だから、コンビニさえ見つければお金は下ろせるから問題ないんだけど……」

「あれ、宿代はあるんだよね？」

「うん、それは大丈夫だよ。前もって使わないようセーブしてたから」

「全く、清くんったら……一人暮らしなんだから無理しなくていいんだよ？ 私だってバイトしてるんだし」

女の子にこんなことを言わせてしまうのが情けない。

「まあ今こうなってるからあれだけど……でもやっぱりなんか、好きな女の子にあんまり財布を出させたくない、から……」

確かに親と離れて今一人暮らしをして、生活はカツカツでたまに食事を抜いたりもするけれど、そうしてでも静香を楽しませてあげたいって思ってるし、静香を色んなところに連れて行きたいと思ってる。

だからこそ無理して、見栄張って、つい静香の分も出すなんて言っちゃって、いざという時に足りてないわけだけ……。

「優しいな。すっごく嬉しいよ。でも、ほんとに無理しないでね？ 私それで清くんが倒れたりしたら、悲しいからね？」

「っ！」

思わず視線を進行方向から静香の方へ向けてしまう。

下手したら事故になりかねなかった。

だが、それ以前に。

「あっ……」

ついにガソリン切れでエンジンが止まってしまったのだった。

すぐさま進行方向へ視線を戻す。

そして何度か鍵を回したりアクセルを踏んでみる。もちろんエンジンはかからなかった。

「ごめん、ガソリン切れだ……」

ほんとに情けない。

「や、宿まではそう遠くないはずだし、その宿の近くにコンビニとガソリンスタンドあったはずだから俺歩いて行ってくるよ」

申し訳なさでいっぱいになった胸を少しでも解放するように、シートベルトを外す。「確か後ろの荷物積むところに災害用のガソリン缶あったと思うし、それに入れてもらってくる」

ドアに手をかけ、下りると助手席の扉もすぐに開いた。

「それなら私も行くよ」

「うん、暑い焼けちゃうから。大丈夫、すぐ戻る。車、見ててもらってもいいかな？」

「……分かった」

「電波は一応立ってるみたいだし、何かあったらスマホに連絡して。田舎で人通りもないし、変な奴に声かけられたら逃げるんだよ？」

「大丈夫だって。清くんこそ、気をつけてね」

「本当にごめん。くれぐれも熱中症にだけは気をつけて」

俺の必死な顔と、鬼気迫る声に静香はクスクスと笑った。

「もう、心配し過ぎ。私なら大丈夫だよ。それに、そういう清くんのちょっと抜けたところ、私好きだよ」

「っ！」

なんでそういうことをさらっと言えちゃうかな……。

恥ずかしさで顔から火が出そうだ。

俺はさっと視線を逸らし、口元を手で覆って答えた。

「じゃあ、行ってくる……」

「行ってらっしゃい」

満面の笑みで送り出され、俺は財布とスマートフォン、ガソリン缶だけ持って走り出した。

スマートフォンで調べてみると、徒歩三十分となっていた。

走って二十五分、いや、二十分でいける。

往復で考えると四十分。

それでもだいぶ長いし、それだけ静香を一人にさせることが忍びなかった。

けれどこうなってしまったものは仕方がない。

とにかく俺は夢中で走った。汗が顎から滴り落ちるているのさえ、気にならないほどに。

スマートフォンの情報は時に信用ならない。

何が二十分か。行くだけで四十分かかった。いや、厳密に言えば宿までは二十分で行けた。

そこからガソリンスタンドまで十分。さらにそこからコンビニまで十分かかったのだ。

宿のホームページに「お近くにはコンビニが」とか書いてあったがまったくもって近くない。

いや、でもこの建物のなさからすると徒歩二十分圏内にあるのは近い方なのか？

そんなわけではない。

ちょっとした裏切られた感覚を胸に抱きながら、重い缶を持って車まで戻ると、計一時間かかった。

結局静香の事を二時間近く一人で待たせてしまった。

静香は近くに見つけたベンチに日傘をさして腰かけ、スマートフォンをいじっていた。

「お待たせ！」

俺が駆け寄ると、静香はスマートフォンから顔を上げ、笑みを浮かべた。

炎天下の中の昼下がり。座っていた静香でさえ、じんわりと汗をかいているのがわかる。

だが静香はそんなことされ気にせず、俺の姿を見ると日傘をたたんで立ち上がり、鞆からハンカチを取り出した。

そのハンカチで優しく俺のおでこを拭ってくれる。

髪がべっどりと張り付いたおでこは滝のように汗を流していた。

「すごい汗。そんなに急がなくても良かったのに……」

「だって……退屈、だろ？」

「だから私の事は心配いらないの。とりあえずせっかくベンチあるし、少し座って休もう？」

静香は俺の手を引いてベンチに腰掛けた。

日が降り注ぐベンチは、座った瞬間太陽のぬくもりがズボンから皮膚に伝わって来る。

こんな暑い中一人で待ってたのか……。

俺は肩を竦め、ガソリン缶を隣に置き、コンビニ袋を漁った。

ペットボトル二本を取り出す。

「お茶とジュース、どっちがいい？」

「わざわざ買ってきてくれたの？」

「まあ……あと、これも」

そう言うっておにぎりサンドウィッチも出す。

「ごめん、お昼くらいには着く予定だったから何も持って来てなかったし、お腹すいてるかなって思って」

「嬉しい！ じゃあお茶とサンドウィッチ貰ってもいい？」

「うん」

俺はお茶と、野菜とハムが挟まれたサンドウィッチを静香に手渡した。

それを嬉しそうに受け取る静香に、ほんの少し、心が癒される。

「お腹すいた！ いただきます！」

俺の気持ちを知ってか知らずか、静香は丁寧にフィルムを外すと、美味しそうにサンドウィッチを頬張った。

綺麗な顔立ちをし、首から下は今日もぼっちリタンクトップに短パンと色っぽくキメてるのに、どこか無邪気さがずるい。

「それにしても大変だったでしょ？」

俺は一口含んだおにぎりを呑みこみ、曖昧な返事をした。

「んーまあ。でもその前に宿見つけたけど、口コミ通り風情あってよさげだったよ」

「ほんと？ 楽しみだなあ」

鼻歌交じりにわずかに体を揺らし、またサンドウィッチを頬張る。

ほんと、これがもし静香じゃなかったら俺はきっと振られていたと思う。

そんなことをぼんやりと考えながら、甘いオレンジジュースを喉に流し込んだ。

カラカラに乾いていた喉が一瞬にして潤う。

暑くて汗をかいた時というのは、妙に冷たいものが喉を通った瞬間リアルに感じ、ああ今喉を通ってるなっていうのが分かる気がする。

それは夏だからこそ味わえる感覚だ。

「ねえ、もし今日の宿が良いとこだったら冬も来よう？」

唐突に静香がそんなことを口にする。

「随分気が早いな」

「ふふっ。私ね、清くんとはもちろん新しい場所にも行きたいけど、同じ場所に行って違う景色を見たいんだ」

照れくさそうに笑うこんな彼女を持てる俺は、世界で一番幸せ者だ。

「それ言ったら今まで行ったとこ、全部行かないと」

「そうだね。時間が足りなさそう」

「近場だけどたくさん出かけたもんな」

「色々行ったもんね。地元の公園でお散歩デートもしたし」

「海には入らなかったけど、海も行った」

「そうそう、神社も行ったよね」

次から次へと出て来る思い出と減って行く飲み物。

「そうだ、今年夏まつりも一緒に行こうね」

「じゃあ、紅葉も見に行くか？」

「いいね！ それなら芋煮会もやらなくちゃ」

「作ってくれるの？」

「もちろん」

膨らむ夢は、太陽に照らされ、キラキラと輝いていた。

こんなに毎日が充実していて、見るもの全てがキラキラしていて、人と話すのがこんなにも楽しいと思ったことはあっただろうか。

俺は今、人生の全ての幸せを使いきってしまったような気がして、心配にすらなった。

でもそれと同時にこの幸せが続くように、静香を大切にしようという決意もあった。

俺はこの先も、静香を幸せにする。

そう心に決めて俺は、膝を叩いて立ちあがった。

「もう四時近いし、そろそろ行くか」

「え、もうそんな時間？ ここで三時間くらい話してたんだね」

驚く静香からゴミを受け取る。

人と話すのが苦手で、会話が續かないこの俺がこんなに誰かと話してられるのは、あくまで相手が静香だから、だ。

静香は話すのも聞くのも上手だ。

本当に素敵な女性だと思う。

何故こんな素敵な女性がこの俺と付き合っているのか、今だ不思議で仕方がない。

そんな事を思いながら、ベンチから立ち上がる静香を見つめていると、ポケットの中のスマートフォンが煩く振動した。

取りだして画面を見てみると、母からの電話だった。

正直出たくはない。

でもうちの母は出ないと出るまで不在着信を入れまくる、めんどくさいモンスターだ。

過去に不在着信が三十分に四十を超えていた時以来、出られる時は出るようになっている。

「ごめん、静香。ちょっと待ってて」

俺は車から少し離れ、スマートフォンを耳に当てた。

「もしもし？」

「あ、清隆？ ちょっとパソコンの様子がおかしいのよ」

「はあ？ 知らないよ」

「あんた、変なサイトとか見てないでしょうね？」

「見てねえよ」

うちの両親はどちらも機械音痴がとにかくひどい。

初めてスマートフォンを持たせた時も操作方法が分からず、駄々をこねていた。

慣れれば楽しくソーシャルゲームなんかもするのだが、慣れるまでがとにかくめんどくさい。



カランっ。  
スマートフォンが手から滑り落ちた。  
バキッ。  
画面に大きく罅が入った。  
それさえも、気にならなくて。  
ただ目の前で燃える、俺の車があった場所。  
そして、静香がいた場所。  
一面が炎に包まれて、風に揺れる火は嘲るように踊っている。  
その中で俺の耳に響いたのは。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ」

静香の悲鳴だった。  
もちろんそんなことはありえない。  
きっと静香は何が起きたのか理解する前に火に包まれ、燃え尽きただろう。  
俺はあまりの出来事に泣くことも驚くことも、そして叫ぶこともできなかった。  
ただ呆然と火に包まれる景色を眺め、ずっと静香の悲鳴を聞いていた。  
「清隆！ 清隆！ 返事して！ ねえ！」  
本当に響く母親の叫び声は、俺には聞えない。

気が付いたら俺は、白い壁に囲まれていた。  
白い天井が威圧的に見下ろしてくる。  
その感覚が嫌で、俺は体を起こした。  
誰もいない部屋は静まりかえり、殺風景で簡素なつくりが施されている。  
右手に見える窓の外では緑の葉が揺れ、蝉が煩いほどに鳴いている。  
その窓の近くに置いてある棚には、名前のよく知らない花が飾られていた。  
俺はそれを見つめ、ぼんやりと過去をさかのぼる。  
何故、俺はこんなところにいるのか。温泉旅行はどうなったのか。静香は、何故ここにいないのか。

それを考え始めた瞬間、俺の中で何かがぷつんと切れ、崩壊した。  
「うわあああああああああああああ！ ああああああ！ あっあっあああああ！」  
発狂し、嗚咽を漏らし、涙があふれ出し、頬が濡れて顔がぐしゃぐしゃになる。喉は潰れそうで、口は裂けそうで、腹筋が壊れそうだった。  
それでも俺は、叫ぶ。  
「うあああああああああああああゴホッゴホッ……あああああああああおうえっ！」



俺はどうしても死にたかった。どうにかして死のうと思った。

そうしなければ静香は報われない。だって静香は俺のせいで死んだのだから。

俺があの時母親の電話になんか、出なければ良かったのだ。

静香は俺が電話をしている間にガソリンを入れようとしてくれていた。少しでも俺の負担を軽減してくれようとしていた。

だけどその結果、直射日光で圧迫されらガソリン缶が、急に開いたことによる爆発を起こし、それに巻き込まれて静香は死んだ。

せめてそれが俺の手によって行われ、俺も同時に死ねたのなら、まだ救いはあった。でも俺は今こうして生きている。

それが、許せないし、残酷だし、憎き現実だ。

だからこそ俺は死ななければならぬ。

死にたいと願った。

だが誰も殺してはくれないし、死なせてくれない。

それでも俺は、諦めない。

あの手この手で死のうと試行錯誤する。

ところがその結果俺は、気がつけばベッドに括りつけられていた。

太い縄で手と足をベッドの端に結ばれ、腰も括られ、身動きの取れない状態になっていた。

「何故だ何故こんなことをする離せ離してくれ俺は死ななければいけない死なせてくれせめて殺せ！」

俺は叫んだ。喚いた。

けれど看護師はどいつもこいつも目を逸らすばかりだ。

そのうち精神科医に回す話しを親としているのを耳にした。

もう完全に俺は精神病患者扱いだった。

だがそれでも構わない。誰になんて思われようと俺は構わない。とにかく死ぬことさえできれば、それでいい。

とにかく救いが欲しかった。

それなのに誠は。

「なあ清隆。もうそんなに自分を責めるなよ。お前は何も悪くない」

そんなことを抜かした。

これだから偽善野郎は嫌いだ。

「お前に何が分かる。何も知らない癖に分かった口をきくな！」

「俺だって静香を失ったのは辛い。けど俺はお前まで失う方が辛いんだよ。頼む、分かってくれよ。友達二人も失うなんて俺は嫌なんだ」

「友達？」

俺は眉を跳ねあげさせた。



皮膚が切れて、シーツが血で汚れてもなお、俺は叫びもがき足掻き静香を求めた。

縛られて何日経っただろうか。

俺は毎日縛られ、毎日監視され、毎日精神安定剤を打たれた。

もう精神科への移動は決まった。

明日、ここを出て精神科医に移動させられるらしい。

けれど俺はそんなことどうでも良かった。どこ行っても俺が死ぬことは許されないし、止められる。

それならどこにいても変わらない。ただ俺がどうやって死ぬかを考えればいいだけの話だ。

俺は照明の消された部屋で目を見開き、ひたすら頭を働かせた。ひたすら暴れた。

今日も手首と足首が縄にこすれ、傷つき、裂け、血がシーツを汚した。

どうしたら、この状態から死ねるのか。

病院食を食べなくても栄養剤は無理やり点滴から入れられる。刃物はない。首もつれない。飛び降りもできない。薬で死ぬのも難しい。

ああ、溺死すればいいんだ。

お風呂も最近は監視がついているけれど、トイレの中はさすがに一人だ。

なら、トイレの便器に顔を突っ込んで溺死すればいい。もしくはいっそ苦しくて嘔吐するくらい便器の水を飲んでも構わない。どんなに苦しくてどんなに汚くてどんなに醜くても構わない。死ねればいいんだ。

俺はそう思ってトイレに行く時のみ、呼ぶことを許されたナースコールへ手を伸ばす。

わずかな動きでも縄のこすれが皮膚にひりひりと痛んだ。

あとちょっとで届く、ボタンが押せる、そう思った時だった。

「もう、そんなに苦しまなくていいんじゃないか？」

誰かの声がした。

男の声だ。

「誰だ？」

その声の正体を求めて首を動かすが、人の姿は見えない。

俺はいっそう激しく暴れた。

「まあまあ落ち着きなさい」

男の声が近くなった。

男は足音もなく俺の隣に立っていた。

首を横に向けると男の姿がしっかりと確認できる。

窓から入る月明かりに照らされる顔は、品がなく、釣り目が特徴的な醜い様だった。

しかし首から下のスーツはやたらと高そうなのが見るからにわかる。

あまりに不釣り合いな様が怪しさを演出している。

そんな見るからに怪しい男はすっと手を伸ばしてきたかと思うと、俺の手の縄を切ってくれていた。

俺は何が起きているのかわからず、呆然と男の行動を見守っていた。

男はただ淡々と何も言わず俺の手と足、腰を縛る縄を切っていた。

全てきり終わるり、俺が起き上がると男は俺の足元に立ち、向き合うようにしてこちらを見つめてきた。

そしてその縄を切った刃物を投げてる。

鋭く、重みのあるナイフが布団の上に落ちた。

「死にたければそれで死ぬがいい。君は十分苦しんだ。きっと君が死んだところで誰も責めはしないだろう」

俺は男とナイフを交互に見つめた。

ここにきて初めて、死ぬことを許された。

ここ数日触れられなかったナイフが、刃物が目の前にある。

俺はゆっくりとナイフを掴み、刃を撫でた。

しっかりと研ぎ澄まされた刃。これなら首を切れば一発だろう。もしくは心臓を一突き。あっさり死ぬるに違いない。

だがいざ手にしてみると、その重みに、体が震えた。

「どうした？ 死ぬのが怖くなったか？ それとも自分で自分を殺す勇気がないか？ それなら俺がこの手で殺してやってもいいぞ」

男は笑っていた。

何かが背中を這った。

ナイフを握る手がじんわりと汗をかく。

「どうした？ ほら、ナイフをこちらに渡したまえよ。殺してあげるからさ？ ずっと望んでいたんだろ、死ぬことを、さ？」

頭は渡せと叫んでいる。だが心は嫌だと拒んでいる。

俺は震える手を押さえつけるように、布団に押し付けた。

すると男はゆっくりと歩み寄ってきたかと思うと、ベッドの端に腰かけた。

そしてナイフを握る俺の手に、自分の手を重ねてくる。

「それでいい。本当は死にたくないのに死にたいと思う必要なんてないんだ。そんなに罪の意識に苛まれることはない。大丈夫。死ななくても誰も責めはしないさ」

そう言ってゆっくりと俺の手からナイフを抜き取った。

男はそれを仕舞う。

「君は世の中が理不尽だとは思わないかい？」

唐突に男がそう問いかけてくる。

「何故そもそも君を苦しめる出来事が起きたのか。別にそれは君に降りかかる必要はなかったはずなのに、その災難は君に降りかかった。そんなのって理不尽だし不条理

だと思わないか？ おかしいと思わないか？」

男の問いを脳内で噛み砕いていく。

だがいまいち言われている意味が理解できなかった。

確かに世の中は理不尽かもしれない。でも静香が死んだのはあくまで俺のせいであって、世の中の理不尽さとはあまり関係ない気がする。

首を傾げる俺に男は続ける。

「つまり君にとっての大切な誰かを失ったわけだが、それは君のせいではなく、世の中のせいなんだよ。君は何も悪くない」

「……」

「世の中が理不尽で世の中がおかしいから大切な人を失わざるをえなかった。君が苦しむ羽目になった。とてもおかしいことだ」

俺のせいじゃなくて、世の中のせい……？

「そんな、はずは……」

「君は優しい人だ。だから自分のせいだと思い込んで自分に罪をかせようとする。けれど君はもう十分罪を背負った。その代償として心に大きな傷を負ったし、大切な人を一生忘れてはいけないという重荷を背負った。それだけで十分なんだよ」

「違うっ！ 静香は、静香は俺のせいで」

「ならば私が、君にそれ相応の罰を与えよう」

俺の言葉を遮る声は、魔法のような、麻薬のような、逆らえない、でもどこか心地良い響きがあった。

「君を今日から我が兎として迎え入れよう。私を主と思い、私に従い、己を捨てて本能と罪の意識に苛まれながら快樂に包まれるといい」

「つまりどういう……？」

「ついてきなさい。私の可愛い、兎よ」

男が優しく微笑んだ。

黄ばんだ歯が唇の間から除く。

それは決して美しいとは形容しがたく、何がそんなに魅力的だったのかわからない。ただ今まで誰の言葉にも動じなかったが、奴の言葉だけは違って、どこか突き動かされるものがあった。

この人についていけば、死よりも楽で、死よりも重い罪が科せられる気がした。

男は歩きだし、すっと病室の扉を開け、姿を消した。

俺もすぐさま布団をはぎ、男の後を追った。

暗闇に包まれる病棟を抜け出し、俺は兎として歩み始めた。

その後俺は兎としての教育を受けた。

燃やすことが静香への償いで、そして俺への罪。

フラッシュバックが流れ、その声に苦しみもがき、楽しむことが使命だと教えられ、俺

はゲームの駒として生きることになった。

それが、佐上清隆、いや、ナンバーファイブという兎の誕生である。



僕の家はたぶん、お金持ちの方だったのだと思います。

幼かった僕にはあまりそのお金の価値観とかはわかりませんでした。周りの子たちはいつも新しい仕立てのいい服を着ていることや、最新のおもちゃを持っている僕を羨んでいました。

だからきっと恵まれていたのでしょう。

僕の母親は日本人でしたが、父親と結婚し、家族三人でアメリカに移住し、アメリカで住んでいました。

そのためハーフだけど僕の国籍はアメリカだったのだと思います。

それなりに大きな家でなに不自由なく生きていきました。

僕は父親の血を強く引いたのか、ひどく音楽に惹かれていました。

三歳の時からヴァイオリンを習い始め、五歳の時には将来の有望性を期待されていました。

ピアノ演奏者だった父親はそれが嬉しかったのか、いつか僕と一緒にコンサートを開くんだと話していたような気がします。

それを楽しそうに母親がカメラを用意しておかなくちゃと笑っていた気がします。

うちの両親は結構仲が良く、いわゆるおしどり夫婦だったのだと思います。

互いに愛し合った中で生まれたのが僕だったので、僕もとても愛情を受けて育ったし、とても可愛がられているというのは幼いながらも少し感じ取っていました。

「トーマ、またヴァイオリン上手になったんじゃないか？」

父が頭を撫でてくれるのがとても嬉しくて。

「あなたが仕事に行っている間もずっと練習していたのよ」

母が抱きしめてくれるのがとても嬉しくて。

僕はたぶん、物心がついてはいなかったけど、とても幸せだったのだと思います。

そんな僕ら家族を壊し、僕の未来を奪ったのは、心も財布も貧しい強盗でした。

日曜日の夕方ごろだったと思います。

その日は僕の六歳の誕生日でした。

誕生日だから特別豪勢に、と外食する予定でした。

僕も父も母も、これでもかかってくらい、おしゃれをしました。

父はスーツに身を包み、母はドレスアップをし、僕は黒いズボンに白いシャツ、赤いリボンのネクタイに、ジャケットを羽織っていました。

みんな上機嫌で幸せな時間を過ごすはずでした。

ところが出かけようとしたその時でした。

父親がタクシーを呼ぼうと電話を取り、僕と母親が別室で持ち物の最終確認をしていた、まさにその瞬間です。

突然玄関が大きな音を立てて空いた音がしました。

ドタドタとやかましい足音とともに父親の怒鳴る声がありました。

それを聞いた母が僕を抱きしめ、囁きます。

「どこかに隠れていなさい」

そっと母が僕を離したので、僕はその言葉に従い、ベッドの下に潜り込みました。

大きな三人で眠るためのベッドです。

でも床とベッドの隙間は狭く、大人では入れないでしょう。

僕一人で入るのにちょうどいいくらいの広さしかありません。

僕はそこでじっと息をひそめ、様子を伺っていました。

すると父親のだと思われる足と、知らない人の足二人分が見えました。

その二人は寄り添う父と母に怒鳴ります。

「金を出せ」

「早くしろ」

「金ならその引き出しに入っている。カードはここだ」

父は冷静にそう答え、どうやら財布を投げたようでした。

足元に黒い長財布が転がります。

それを一人が拾うために屈みました。

手の太さや、声からして男性でしょう。

一瞬僕のこともばれるのではないかとドキッとしました。

でもそれはありませんでした。

男は財布の中を物色し終えたのか、財布を投げ返していました。

そのあとがさがさと何かを漁る音もしたので、きっと父が言った棚を物色しているのでしょう。

「他に隠しているものは？」

男の低く、いかつい声が室内に響きました。

でも父は動じませんでした。

「もうない」

「嘘だ」

しかし男は間髪を入れずに疑いの言葉を口にしました。

「本当だ」

「通帳か？ 通帳はどこだ？」

父の大きなため息が聞こえました。

そして父は、しゃがみ、ベッドの下をのぞいてきました。

僕と父の目が合います。

堀の深い父のまっすぐな青い瞳は強く、かつこよく、僕にとってのヒーローです。

だけど僕は不思議に思いました。

通帳はここにはなかったはずです。

だってベッドの下には何も置いていないのだから。

それでも父は何かを探しているふりをしてベッドの下を覗き続けました。

それから口パクで僕に告げました。

『何があってもここからパパが良いと言うまで出てきてはいけないよ』

その言葉に僕は声を殺し、首を縦に動かすことで了承しました。

すると、父は優しく微笑み、僕の頬を包み込むように撫でると、ゆっくりと離れていきました。

そして完全にベッドの下から出る直前、もう一度口パクでこう言いました。

『ハッピーバースデー、僕の可愛いトーマ。僕の可愛い息子よ、世界で一番愛してる』

その時僕は「一番はママでしょ」と思わず言いそうになりました。

だけどそこはぐっとこらえ、黙っていました。

父はそのまま立ち上がり、しらばつくれた演技を始めました。

「あれ、ここじゃなかったっけ？」

「やだあなた。この間整理して向こうの筆筒に入れたでしょう？」

母も何か察したのか、その演技に合わせ、答えていました。

「ああ、そうだったね」

そう言って父は初めからわかっていたのであろう、通帳のある場所まで近づいていき取り出したようでした。

それを再び強盗男の方に投げつけます。

今度はそれは床に転がることなく、男がキャッチしたようでした。

「他には？」

「もう金はない。あと金になりそうなのは妻のアクセサリー類だけだ。それは二階の妻の部屋にある。欲しければ勝手に持って行ってくれ。もういいだろう」

父はどこまでも冷静で、どこまでも落ち着いていました。

もうこちらは要求に答えたのだからさっさと帰ってほしいと願いました。

ところが男たちは、こう言ったのです。

「そうか。じゃああなたたちはもう用無しだ」

そして。

パアアアアアアアン—————。

銃声が響きました。

僕はその大きな音に耳を塞ぎたくなり、急に恐怖が襲ってきました。

体が震えだします。

そんな僕を煽るように、血を吐いた父が倒れるのを、目撃しました。

「あなたっ！」

母がそれに寄り添います。

しかし次の瞬間。

パアアアアアアアン————。

二度目の銃声が響きました。

過去に一回だけ、父に射撃場へ連れて行ってもらったことがありました。

アメリカでは銃を使えるようになった方がいいと。

でもその時は耳に耳当てもしていましたが、あくまで撃っていたのは的だったのであまり恐怖心はありませんでした。

だけど実際こうして目の当たりにすると恐ろしいほどその音は大きく、鼓膜を破ってこようとします。

それに何よりも、人の心臓を容赦なく貫きます。

寄り添った母も床に倒れ伏しました。

僕は思わず飛び出し、二人に駆け寄ろうとしました。

しかし最後の力を振り絞った母が、こちらを見つめ、小さく口を動かし「だめ、よ」と言いました。

僕は飛び出したい思いを押し殺し、ぐっところえました。

やがて男たちは部屋を後にしましたが、しばらくガタガタと物色する音が聞こえていました。

僕はそれが止むのを、男たちが出ていくのをまだかまだかと待ちました。

どのくらいベッドの下に隠れていたか、記憶は定かではありません。

男たちが出ていくのを音で確認し、僕はすぐさま父と母に駆け寄りました。

その時既に父と母は息絶えていました。

二人とも胸から血を流し、口から血を吐いて目を見開いていました。

当時の僕は人の死というものに慣れていませんでした。

だからつい取り乱し、二人に縋って泣き叫びました。

「パパ！ ママ！ ねえ！ パパママ起きてよ！ ねえねえっ！」

あれほど泣いた誕生日はなかったと思います。

またあれほど人を恨んだこともなかったと思います。

とにかく憎くて、悔しくて、悲しくて、涙が止まりませんでした。

そこから僕の「幼さ」というものは失われました。

周りの大人は可愛そう、あまりに酷すぎると騒ぎ立てましたが、結局犯人は捕まりませんでしたし、僕の心は救われませんでした。

全米のニュースでも取り上げられましたが、所詮皆他人事でしかありません。

救いの手はありませんでした。

僕はヴァイオリンをやめ、身寄りがいる日本へと送られました。

そこから転落人生の始まりです。

母の弟、山神大介という僕から見ると、叔父さんに引き取られました。父の兄弟は皆、子供が多く引き取る余裕がなかったそうです。

ただ母の方の叔父の山神さんもしぶしぶと言った様子で僕を引き取ったのでした。

実際山神さんの家に転がり込んでからというもの、地獄の始まりでした。

経済的にギリギリだった山神さんは僕の食事を容赦なく抜き、服とかも新しいものを買ってもらえることはなく、洗濯もしてもらえずいつもボロボロの服に身を包むようになりました。

もちろんおもちゃなんて買ってもらえることは、まずありえませんでした。

山神さんと過ごせば過ごすほど、元の生活がどれだけ幸せなものだったかを痛感しました。

お腹が空いて死にそうと思ったことなど、過去に一度もありませんでした。

でも、山神さんのところではしょっちゅうです。

だけどそれを山神さんに言えば、強く頬をぶたれるのでした。

「うるせえ！ 居すわらせてもらってるだけありがたいと思え！」

ベチンという激しい音と共に鋭い痛みが全身を駆け巡ります。

僕はアメリカにいた頃、父にも母にも一度もぶたれたことはありませんでした。

男ではあるけれど、蝶よ花よと育てられた僕は、大きな怪我をすることもなかったし、比較的「痛み」というものを体感したことがありませんでした。

だからこそ初めてぶたれた時は、痛みのあまりに泣き叫びました。

すると山神さんは「うるせえ！ これだからガキは嫌いだ」とさらにぶってきます。

僕の体は気がつけばどんどん痩せていって、どんどん痣が増えていきました。

我ながら鏡に映る自分は、昔の面影を残していません。

それでも山神さんは僕が死なない程度にはご飯をくれたし、そもそも雨風しのげて布団で眠れるだけ幸せなんだと思うようになり、感謝していました。

むしろ今までが贅沢すぎただけでこれが当たり前なんだと思うようになりました。

けれど、そんな山神さんを追い詰める山神さんの敵、即ち僕の敵が現れました。

確か、名前は大空ひなたと言った気がします。

彼は下々の僕らからも容赦なくお金を奪い取り、払えないと暴力を振り、下手したら殺す勢いでした。

僕はその姿が、両親を殺した強盗と被って見えました。

だからこそ時折僕にくれるおにぎりや、チョコレートなどの食べ物には何か裏があると思っていました。

毒が入っていてもおかしくないと考えたこともあります。

それでも僕は食べないと死んでしまうし、このままでは山神さんを殺してその肉を食

べてしまうと思い、貰ったものを食べていました。

毒は入っていませんでした。

でも、今でもあの男の考えが、意図が読めません。

ただ僕は、両親を殺した強盗と同じくらい憎くてたまりませんでした。

僕の命の恩人、生きる場所を与えてくださった人を苦しめるあの男が、憎くて憎くて死んでほしいと願いました。

結局追い込まれた山神さんは僕を誰かに売ることで、逃れようとしてました。

実際どうやら僕を売ったお金でその大空ひなたは追い払えるようです。

僕はほっとしました。

これで恩返しができる、もう山神さんを苦しめるものはなくなったと安堵しました。

僕は決して売られたことを恨んだり、悲しいと思ったりしていません。

それが山神さんの選択で、山神さんの救いになるのなら、それで構わなかったのです。

そして僕自身も今の主の元に来てからというもの、食事はしっかり三食与えられ、昔はひどく恨んでいた銃を使いこなせるようになると、昔父がしてくれたように撫でて褒めてくれるのでした。

さらに火薬を舐めて見せると、とても喜んでくれるだけでなく、僕には勿体ないくらいの褒め言葉をくれるのです。

「トーマ、お前は私の最高の兎だ。自慢の兎だよ。こんなに出来のいい兎はそうそういない」

それがまた嬉しくて、僕は僕で幸せな生活を送っています。

だから何も後悔していないし、ただひたすら残る恨みと消えて欲しいという願いは、今だ捕まらない強盗二人と、山神さんを責め立て続けた大空ひなたのみに向けられるもので、それ以外は全て感謝の念なのです。

その大空が今回この舞台に舞い降りたと聞いた時、僕は必ずこの手で殺してやろうと決意しました。

これが僕と言う兎ですが、何かおかしいですか？



私たちは、片親でした。

私たちのパパとママは仲が悪く、私たちが幼いころにどうやらお別れしたそうです。

私たちはママの方に引き取られたわけですが、パパと別れてからというもの、ママは豹変しました。

まず帰って来るのが遅くなりました。

お仕事なのか、新しい「こいびと」に会っているのか、私たちには見当もつきません。

おかげでいつも私たちはお腹がぺこぺこでした。

だって朝ご飯は用意されていないし、お昼ご飯はないし、夜も帰って来るのが遅いからなんですもの。

時たまおうちにいる時や、何かのあまり物があると私たちに回ってきましたが、ほとんど食事はありませんでした。

だから私たちは、協力し合って冷蔵庫を漁る、という事を覚えたのです。

「ミミ？ 何か良いものはありましたか？」

「ネネお姉さま、ソーセージが入ってますの」

「ではそれを食べましょう」

ちなみに私たちのこの名前は、ママがつけてくれたものではありません。

本当は別な名前があったのですが、パパと別れてから「あんたたち」と呼ばれるようになり、本当の名前で呼ばれなくなってしまって忘れてしまったのです。

でも私たちには互いを確かめ合うためにも呼び名が必要でした。

だから互いにそう付け合ったのです。

つまり、この名前はある意味特別な名前なのです。

さて、それはさておき私たちは物色したものをこそそと食べることが日課となっていたわけですが、それをママは良しとしませんでした。

ある時双子でありながら、ほんの数秒早く生まれたネネの私を姉とし、物色したことに対する罰を与えられました。

それは、首に首輪をされ、鎖で繋がれることでした。

身動きを取れない私、ネネに言います。

「物色するなんてはしたない！ お姉ちゃんのおんたがしっかりしないでどうするの！ この役立たずがっ！」

ベチン！

腕に鋭い痛みが走りました。

黒いエナメル地の鞭でぶたれたものによる、痛みでした。

ママは悪いことをした私にお仕置きとして鞭でぶつようになったのです。

繋がれ、トイレは桶の中にさせられ、私の自由は完全に奪われました。

だけど私、ミミがネネお姉さまを助けると決めたのです。

私はネネお姉さまの糞尿をトイレまで運び、流し、タオルで体を拭きました。

そして今度は私一人で物色を始め、見つけては持って来て私とネネお姉さまではんぶんこして食べました。

私はネネお姉さまを守りたかったし、助けたかったのです。

しかしそれはあっさりとママにバレました。

私も罰として鞭でぶたれ、ネネお姉さまと一緒に鎖で繋がれるようになりました。

更にはそんなに好きならと、私とネネお姉さまの手を手枷で繋がれ、私たちの距離

が縮まりました。

それは決して嫌な事ではありませんでした。

だってこんなに私たちはそばにいれるのだから。

ただ完全にどちらも身動きができなくなったので、どちらかがどちらかを助けることが出来なくなってしまったのです。

私たちはどうしたものかと懸命に考えました。

その姿はどうやら不気味で人形めいていたそうです。

肩と肩を寄せ合い、互いに頭を寄りかからせ、一点を見つめて無言で考え事をする姿はさぞかし気味が悪かったのでしょう。

「ほんとと可愛くないしどっちがどっちか分かりやしないわ！ そうだ片方髪を切ればいいのよ」

そう言ってママはどっちがどっちか知らずして、ミミの髪をぱっさりと切り落としました。

二人して長かったロングヘアは一瞬にして短く、ショートカットに変わりました。

それでも私たちは動じることなくただ黙っていました。

ただ、ママがいない時、こっそりと私、ネネは言います。

「ミミ、あなたはショートカットも似合う、とても可愛い女の子よ」

私、ミミはそれにこう答えます。

「でもネネお姉さまとお揃いではなくなっちゃったわ」

「お揃いで無くなったからと言って私たちが姉妹で無くなるわけではないわ」

その言葉に私は妹ながらに安堵しました。

私たちの絆は大変深く、誰にも切り離せないのです。

ただどれだけ絆が深くても空腹には耐えられないし、生きることはできません。

そこで私たちは考え、思いつきました。

まず首輪の鎖をどうにかしなければいけないと考えた私たちは、ママにこう提案しました。

「ねえ、この鎖、机に繋ぐのではなく、手のようにお互いを繋いでくれませんか？」

「そうしたらもう私たちは決して悪いことはしません」

その言葉にママは一瞬眉の根を寄せ、疑いの眼差しを向けてきましたが、ここ数日大人しい私たちを見て、信じてくれたようでした。

提案通り私たちの首と首が繋がりました。

これでまたさらに絆は深まりました。

そして私たち二人は阿吽の呼吸でママから鞭を奪い取りました。

足に噛みつき、腕に噛みつき、二本の鞭を奪い、それぞれ一本ずつ持ち、交互にママをぶちました。

「悪い子にはお仕置きが必要なんですよ？」

「ママは私たちにご飯をくれませんでした」

「それはいけないことです」

「だって私たちこんなにもお腹を空かせているんだもの」

「だからお仕置きをさせてください」

「これはママの教えです」

「ママは私たちが冷蔵庫を物色するといけないことだとぶちました」

「ママは私たちが首輪をはずそうとするといけないことだとぶちました」

「それならご飯をくれないというのは私たちにとっていけないことです」

「だからお仕置きです」

ベチンベチン！ ベチンベチン！

言葉に合わせて振り下ろされる鞭は容赦なくママの皮膚を裂き、紅い液体をにじませました。

ママはやめたと叫び、逃げまどいました。

でも私たちは逃げることを許されませんでしたし、やめたと叫んでもやめてはくれませんでした。

「私がミミを守ろうとした時、ママは容赦なく私をぶちました」

「ネネお姉さまを庇った時、私を容赦なくぶちました」

「それなら気が済むまでぶたれる義務があります」

私たちはママの言葉を無視してぶち続けました。

皮膚が裂け、血が滲み、肉が削ぎ落とされました。

最初は「やめて」「ごめんなさい」「許して」と叫んでいたママですが、後に何も言わなくなりました。

よく見ると、ママは既に息をしていませんでした。

私たちは幼く、力加減がわからなかったのです。

そして「気が済むまで」と言いましたが、私たちがいつ「気が済む」のかわかりませんでした。

その結果ママは死んでしまいました。

部屋には強い血臭が漂い、生臭さが充満しました。

だけど私たちは悲しいとか、辛いとか、そういった感情はなく、何故死んでしまったのか、何がいけなかったのか、という疑問の方が強かったのです。

さらに言えば私たちの空腹は限界でした。

冷蔵庫を漁ることを禁じられ、一日一回食事があれば良い方、なんていう生活は、いくら小さな体とはいえ、耐えかねます。

だから私たちは、ママから削ぎ落ちた肉を焼いて食べることにしました。

火の取り扱いには行ったことはありませんが、もう私たちを叱る人はいません。それならきっとどうにかなるでしょう。自由にやっても構わないのです。

私たちは椅子に乗り、二人でフライパンを持ち上げ、何とか焼くことに成功しました。

火傷をしそうにもなりましたが、無事終わりました。

けれどいざ食べてみると、味はなく、やたらと筋ばって固いのです。

とてもではありませんが、食べられたものではありませんでした。

でも、冷蔵庫には何もありませんでした。

叱る人がいなくなったところで、漁る物すらなくなっては私たちの手ではどうにもできないのです。

だって私たちにはまだ金銭感覚はありませんでしたし、買い物に行く手段がなかったのですから。

どうしたものかと悩んでいると、一人の男の人が私たちの元を訪れました。

「やあ、お嬢さんたち。お母さんは、いるのかな？」

ちょっと怖そうな人でしたが、私たちに視線を合わせて聞いてくれました。

私たちは顔を見合わせ、やがて二人で首を横に振りました。

「ママ、死んじゃいました」

「私たちが殺しちゃったのです」

私たちの言葉に男の人は一瞬驚いた顔をしましたが、その後優しく私たちの頭を撫でてくれました。

こんなことをされたのは、いつぶりのことでしょうか。

「ねえ君たち、おじさんと一緒に来る気はないかい？」

男の人は唐突にそう尋ねてきました。

「きっと君たちはここにいたら警察って人がやってきて、君たちをまた酷い目に合わせる。でもおじさんなら君たちを守ってあげられる」

「ケーサツですか？」

「また体に痣が出来るのですか？」

「お願いします、ミミを助けてください」

「ネネお姉さまを助けてください」

私たちは懇願しました。

互いに互いを救って欲しいと願いました。

すると男の人は、大きく頷いて笑いました。

「大丈夫。私に付いてくれば君たちは離ればなれになることも、痛い目に合うことも、お腹を空かせることもない。全ておじさんの言う事を聞いてくれれば君たちには楽しい生活が待っている。お兄さんやお姉さんも増えるよ」

「それでミミが助かるのなら」

「それでネネお姉さまが助かるのなら」

私たちは、当時はどこかの誰かも知りませんでしたが、互いを助けたい思いで、その人に付いて行くことを決意しました。

そして今ではたくさんのお兄ちゃんやお姉ちゃんに恵まれ、何故兔と呼ばれるのか

分かりませんが、楽しい日々を送っています。

お腹を空かせることも、痛い思いをすることもなく、ただ時折やってくる兄妹を傷つける悪い人をお仕置きすれば、褒めてもらえるのです。

これが私たちにとってどれだけ幸せな事か。

私たちはとても主様に感謝しているのです。

だって今こうして私たちが二人で一人として存在していただけるのは、全て主様のおかげなんですもの。



「この間さ、家族で京都行ってさ、あ、これそん時のお土産な！」

「ありがとう」

「いただきます」

「あいつさ、毎回毎回うざくね？ 何？ 家が金持ちですアピール？」

「この間もスマホ変えましたとか言って最新版持ってきてんのな」

「ほんと、うるせえよな」

人は、話しすぎると、疎まれる。

「ねえねえ、これどう思う？」

「……うん、いいと思うよ」

「反応うすっ。あんたはさ、こういうの興味ないの？」

「な、ないわけじゃないけど……詳しくないから」

「あっそ」

「あいつさ、いつも暗いしさ、しゃべんないしつまんないよね」

「何考えてるかも分かんないしね」

「自分の意見とかないんじゃない？」

人は、話さなすぎると根暗だとか意思がないとか、蔑まれる。

「俺と付き合っただけで欲しい」

「……ごめんなさい。気持ちは凄く、嬉しいよ。でも、私今好きな人いるから……」  
「そっか。こっちこそ、ごめんね……」

「あいつさ、よくあんな顔で私に告白してきたよね」  
「超キモいんですけど」  
「あんなブスと誰が付き合うかよ！」

人は、所詮第一印象は顔だ。

「やめなよ。困ってるじゃん！」  
「……助けてくれて、ありがとう」  
「うん、嫌なら嫌って言わないとだめだよ」

「何あいつ。良い子ちゃんぶって」  
「偽善乙」  
「まじムカツク」

人は、自分がいいと思っていることでも偽善と笑われることがある。

結局人は、しゃべりすぎてもしゃべらなすぎても嫌われるし、顔が悪ければ相手にも  
されない。

良かれと思ったことは偽善と笑われ、何が正しくて何が正しくないのか、その判断基  
準は誰が決めるのか。

分からないことばかりで考えることすらうんざりする世界で、毎日が不条理で理不尽  
に思える現実を受け取めるキャパなんかない。

生きていることがめんどろで、生きている意味すら知らない僕たちは、私たちは、俺  
たちは、どう生きれば良かったのか。

気がつけば、兎の道選んでいた。



「雪菜は本当に綺麗な髪をしているなあ。お兄ちゃん、すごく好きだぞー」

「そう。とっても綺麗な人だ。綺麗過ぎてお兄ちゃんを困らせる奴だ」

「お兄ちゃん、困っちゃうの？」

「うん。でも自慢でもあるよ」

「雪菜、綺麗な人になる！ 髪の毛も伸ばしておしゃれさんする！ それでそれで、いつかお兄ちゃんと結婚する！」

昔の会話が脳内に再生される。

雪菜と離れる前に俺が溢した最初で最後の褒め言葉。

それを大事にして今日まで髪を綺麗に伸ばしてきた雪菜。

それが今—————。

パサッ……………。

無残にも断髪された。

ブワッ！

どこからともなく風が吹き、賢治が握っていた毛束が宙を舞った。

「やめろ、ひなた！」

誰かが俺の名を呼んだ気がした。

だけど、もうそれは聞えていないも同然だった。

周りが何も見えない。

俺の視界に映るのは、雪菜だけだった。

俺は、短く無造作に髪を切られた雪菜の元に走っていた。

走って走って走って。

あと、数十センチで手が、届く。

雪菜を、取り戻せる。

ああ、雪菜、おかえり—————。

ピタッ。

何かが頬に張り付いた。

俺は壇の目の前で足を止め、自分の頬に触れた。

するとそこにはべっとりと粘着力のある紅い何かが付いていた。

「あーあ、だから言ったのに。下手に動くと君の妹は死ぬよって」

振り返ると、ひびやが肩を竦めていた。

訳が分からなかった。

ゴトンっ。

理解できないまま足元に何かが転がって来た。

俺はそれを見下ろす。

仰向けになり、全く生気を感じない目玉がぎょろりと俺を見上げている。充血した瞳に、血まみれになった口元。そして、喉がぱっくりと引き裂かれ、変な方向に曲がった四肢。その四肢の手先は爪がなかったり指がなかったり。

なんだか数分前に見た誰かの姿によく似ていた。

「ああ。お前のせいでうちの優秀な兎が一羽、死んじゃったよ」

「.....  
.....

.....は？」

つまり、俺の今日の間転がっているコレが？ 雪菜だっていうのか？

パチパチパチ。

乾いた音がした。

「お見事。最高視聴率突破だよ。今日の売り上げは最高だね」

顔を上げると、上袖から一人の男が出てきた。

仕立てのいいスーツにネクタイは着いていなかった。右目が前髪で隠れている。しかしその前髪に何の意味があると言うのか。

そもそもその顔は見えなかった。

何故ならその顔には、人を小馬鹿にするようなひょっとこのお面をしているのだから。

「優秀な兎だったんだけどねえ。とても、残念だ」

「その声……まさか……」

俺の代わりにいつの間にか体育館に姿を現した、誠が反応した。

もしかしてさっき俺を呼んだのは、誠だったのかもしれない。

「やあ、久しぶりだね？ 誠」

「しら……みね？」

動揺する声が響いた。

俺は何もかも理解できないまま呆然と立ち尽くす。

「そうだよ。忘れていないだろうね？ この顔を。上司に見たくもないと言われた、この顔を」

そう言って男はひょっとこのお面を外した。

露わになった顔は、どこか貧相な表情をしていた。

くぼんだ瞳の下には濃い隈ができ、骨ばった頬骨は神経質そうに見える。

「ようやくこの時が来たんだ」

「白峰、どうしてあんたが……？」

「どうして？ 決まってるだろ。この私が『兎狩り』ゲームのオーナーだからだよ」

「え、あ、どういう……？」

誠も俺と同じように全てを理解していなかった。

何が起きているのか分かっていない。

「はあ。貴様はほんと無神経で馬鹿で最低な人間だよ。私が警察をやめ、今日というこの日まで貴様の事を忘れた日など、一日もなかった」

「お、俺だってあんたが急に事件捜査中疾走してから一度も忘れた事はなかった。ずっと心配していた。生きているのか死んでいるのかも分からない中、相棒の事をずっと想ってた」

「相棒？」

白峰と呼ばれた男の左眉が跳ねあがった。

「よく言うよ。私は貴様を一度たりとも相棒と思ったことなどない」

「っ」

誠が息を呑む音が背後に聞えた。

「俺はお前と組んだことでずっと周りから期待の大型新人と尻拭いのめんどくさい新人で比べられ、蔑まれてきた。お前だってみんなの前ではぺらぺらと調子い事言って、本当は私の事を見下していたのだろう！」

「そんなこと、俺は……」

「貴様は覚えていないかもしれないが、私は聞いたぞ、この耳で」

そう言ってある時の呑みの席での話しを始めた。

その日は私のミスで万引き犯を逃してしまった時の事だった。

追いかける途中、路地裏に入られて、誠がそのまま追いかけて、私が先回りをして挟み撃ちにかける予定だった。

ところが私はその途中で間抜けにも転んでしまった。

新人だったし必死だったのだが、それがから回ってしまったのだ。すぐに起き上がって追ったけれど、たまたまあった石が膝に入って割と大きな傷を負ってしまった。そのせいもあり、走るのが遅くなって結局犯人を取り逃がす要因になってしまった。

私が付く前に路地を抜けどこかに曲がってしまったらしい。

誠が追っていたが、見失ってしまったという。

もし、私が転ばなければ、もしくは転んだ時怪我をしていなければ、捕まえられていたかもしれない。

申し訳なさで一杯だった俺は、その日の帰り誠を呑みに誘った。

当然そこは俺の奢りで。

ところが案外酒に弱かったのか、誠はビール三杯目あたりから容赦ない本音をぶち

まけ始めた。

「万引き犯一人も捕まえらんねえとか、情けねえわ……」

「ご、ごめん……。俺の、せいだよね」

私が低姿勢に謝ると、誠はジョッキに残っていたビールを煽り一瞬の沈黙を経て口を開いた。

「あんたさあ、もっとどうにかなんないの？」

「え……？」

あれだけ上司の前では自分の責任だとかなんだとか言って良い人ぶっていた男が、今私を責め立てようとしている。

「もっとさ、走り込みするとか努力した方がいいと思うんだよね。俺はさ、ずっと誰かを助ける仕事したくて、この仕事を天職だと思ってるわけよ。あんたとき、意気込みが違うんだわ」

ふにやふにやした口調で、今にも眠りそうな勢いではあるけれど、その言葉は間違いなく棘と毒を孕んでいた。

「だから俺は、一人でも悪い奴を捕まえて、更生させて、多くの人を助けたいわけよ。それをさ、やっぱ万引き犯一人捕まえられない相棒じゃ先が思いやられるって言うか……」

「ごめん……」

「あ、じゃあ俺と一緒に鍛えるか！ そしたら、少しはマシになるんじゃない？」

そう笑う顔は、小馬鹿にされてるようにしか見えなかった。

それに俺だって決して努力をしていなかったわけではない。走り込みや、ジム通いだってしていたし、筋トレだって行っていた。

だけど元々内気だったし、高校まで運動は苦手な方だった。

でもある日自分の妹が学校でいじめにあっていることを知った。年が離れていて、私が大学三年生の時、中学一年生だった。

私は妹を助けたくて学校にも警察にも相談した。

だが学校側はいじめのことを認めようとはしなかったし、学校側が認めない限り警察は動いてくれなかった。

それでも私は何としてでも助けたかった。

だからこそ自分自身が警察になって妹を助けようと思った。

その一心で苦手な運動を始め、ない体力を作ろうと走り込んだ。

けれど努力が必ずしも報われるとは限らない。

誠みたいにすぐ成果を出す人もいれば、私みたいに一向に成果が上がらない人もいる。

それを理解できず、人を表でしか見られない癖に、やたらと自分はわかってやれると偽善ぶるこの男が憎くて仕方がなかった。

空になったジョッキでこいつの頭を殴りたいと心底思った。

でも、私は私を馬鹿にされることはまだ許せた。

私が誠の事で一番許せなかったのは、妹を馬鹿にされた時の事だ。

「てか、なんであんたは警察になったんだっけ？」

ビールの次は焼酎を煽りながら尋ねて来る。

「……妹が、学校でいじめにあつてて、それを、助けたかった、から……」

私は進まないビールをちびちびと喉に流しながら、歯切れ悪く答えた。

すると誠は、おつまみの枝豆でこちらを指しながら質問してきた。

「で、その夢は今叶ったわけ？ それでそんな気が抜けてんの？」

「……叶ってないよ。間に合わなかったんだ」

「間に合わなかった？」

枝豆を口に含む誠の眉がピクリと動いた。

私は黙って頷く。

「中学二年に上がったあと、自殺した」

「自殺？」

その声は裏返っていた。

さすがに酒の席でするには重すぎたと少し後悔した。それにこんな状況で慰められても惨めになるだけだと思った。

ところが。

「はあ。なんで自殺なんかするんだらうな？ 生きてくても生きられない奴はたくさんいるのに。自ら命を絶つ理由がわかんねえわ。そんなことしたって何にも変わらないし、逃げてても同然じゃんね」

まだ慰めてくれた方が良かった。

なんだその言い草はと本気で怒りを覚えた。

そのまま誠は完全に酔い潰れたのか、机に突っ伏して眠った。

やろうと思えばなんでもそつなくこなし、人付き合いが基本的にうまく、年上に可愛がられるような男に何がわかる？

どんなに足掻いてもがいて必死に生きてもどうにもならないことだってある。それを知らない奴にどうこう言われる筋合いは、ない。

「なあ、覚えているか、伊座波誠。貴様がそう漏らした言葉の数々を」

ちらりと誠を盗み見ると、すっかり顔が青ざめていた。

「俺、まさか……」

「そうだよなあ？ 覚えてないよなあ？ だって次の日私と会った時、ケロッと忘れてたもんなあ」

それが、誠の本性であり、このゲームの裏側ってわけか。





「ひなた……」

誠の切なそうな、寂しそうな視線が見上げて来る。

俺はそれに対し虫でも見るような、冷たい視線を送り返し、銃口をも向けた。

「勘違いするな。俺はお前も殺したいんだよ」

「ひなた、俺はこれ以上お前に傷ついて欲しくないんだ」

銃には一切眼もくれず、真っ直ぐに俺を見上げて来る視線が、鬱陶しい。

「誰かを傷つけても残るのは罪と苦しみだけだ。何も解決なんかしない。俺はあんたの気持ちが分かるなんて安っぽい言葉は吐かない。ただあんたが十分傷ついているのは見ていれば分かる。だから助けたいし、これ以上傷ついて罪を増やしてほしくないんだ。もちろん清隆のことも許しがたいけど、それでも」

「ごちゃごちゃうるせえな」

ハンマーを外し、トリガーに指をかける。

「この期に及んで綺麗事吐いてんじゃねえよ。言っただろ。助けたいって言う時点で相手を見下してるから出て来る言葉なんだって」

「それは違うよ。もっと純粋なものだ。あんたがさっき雪菜さんを助けたいって思っただろ？」

「うるさいうるさいうるさい雪菜はもういない」

「それと同じことなんだよ」

「黙れ黙れ黙れ黙れ！ お前に何がわかる！ 分かった口を利くな！」

「ひなた、聞いてくれ」

「その名で呼ぶなって言っただろうが！」

パァン！

勢い余った銃が発砲された。

だがそれは誠の脇をすれ、床を叩いた。

俺は髪を掻き耨り、もう一度構える。視界と手元が震えた。歪んだ。

冷静さを失った俺はこんなにも近距離な的さえ、捉えられなかった。

「なあ、ひなた」

誠が立ち上がる。

「確かに俺は肉親を失ったお前の苦しみなんて分からない」

誠が切なそうな、苦しそうな表情を浮かべながら俺の震える手を包むようにして掴んできた。

「だけど誰かを助けたいっていうのは理屈的な感情じゃなくてもっとう、純粋なものだろ？」

「……」

ぬくもりが、ゆっくりと体に伝わって来る。

その一方で頭から冷水をぶっかけられた気がした。

かつてそもそも俺を助けたいと、このドブみたいな、黒くて滲んだ、歪んだ世界の中で助けたいと言ってくれた人は、いただろうか。

明るい光を見せようとしてくれた人は、いただろうか。

「そりゃ世の中は理不尽でどうして自分だけがこんなに苦しいのか、辛いのか、なんて自分は無力なんだって思うことは誰にだってある」

誠がゆっくりと語る。

「ほんと、生まれる環境が変わっていれば自分はもっと違う道に行けたんじゃないかって。親や環境のせいにしたくなることばかりだ」

そう、俺はずっとこのくそ親父の元に生まれた事を深く恨み、後悔し、絶望してきた。「でもそれでも生きていかなきゃいけないし、前に進まなきゃいけない。そしてその生きていく上で俺たちは選択していかなければならない。でも選択する余地も、権利もある。自分の意思で選んで自分の意思で進める。もう親も何も関係ないんだ。あんたの意思でこの先はどうにでも開けるんだよ」

気がつけばトリガーから指を外していた。

別に感化されたわけじゃない。自分の情けなさに気がついて気力を失ったのだ。

俺はいつも生まれた環境のせいにして、言い訳して自ら明るみに出ようとしなかった。自分には闇に染まった暗い世界しか存在しないと決めつけていた。

本当は雪菜だってもっと前に動いていたら助けられたかもしれない。連れていかれたあの日から必死で探していれば、助けられたかもしれない。

結局俺は全てに親父をかこつけて言い訳して、逃げていただけだったのだ。

それを今、大切なものを失って、人に言われて気がついた。

本当の馬鹿で低能は、自分だ。

遅すぎた。何もかもが。

「ちょっと白けさせないでもらえるかな」

パキューンツ。

「っ！」

俯く俺の目の前で、誠の腕から血が噴き出した。

「誠！」

倒れる誠に寄り添い、銃弾の出先を目で追う。

「僕は、君のさっきの発狂した姿に殺されたかったの」

ひびやが銃を構えたままこちらに歩み寄って来る。

そのひびやの瞳はどこまでも絶望していて、どこまでも落胆していて、どう見ても死んでいた。

「まあ約束通り誰かには殺してもらえと思うけどね？ でも僕は君のあの狂気的な姿に殺されたかった。さっきの君は本当に最高だった。僕の事も恨んで憎んで殺意に満ちた目で見下してトドメを指してくれれば良かったのに。それなのに」

倒れる誠に銃口を突き付け、氷点下よりもずっとずっと冷たい視線を向けて一言。  
「どうして貴様は余計な事をする？」

そこでちらりと俺の方も見つめて来る。

「君も君だよ。憎くないのかい？ 妹があんな無様に殺されたんだ。遊ぶだけ遊ばれて死んだんだ。それをこんな男の言葉で許せるのかい？ 君の狂気はその程度だったのかい？ ガッカリさせないでくれよ」

「お前こそガッカリさせるんじゃないよ」

俺は銃を持つ手首を掴み、グッと引き寄せて手首を捻った。

その反動と痛みにはびやが銃を離す。

離れた銃を俺が拾い、ひびやの手を離す。ひびやがよろけた。

その隙に俺は立ち上がり、銃を構えた。

「ひな、た！」

駄目だと言わんばかりに誠が叫ぶ。

だが俺は銃を構えたままひびやを睨みつけた。

「何だ、殺してくれる気あるんじゃない」

ひびやが穏やかに笑った。

それに合わせて俺は弾がある限り、全て発砲した。

パァンパァンパァンパァンパァン—————。

銃声がうるさく体育館内に響く。

そして最後に響いたのは。

カランっ……。

銃が体育館の床を叩く音だった。

ひびやが眉根を寄せ、不機嫌な顔をする。

「どういうつもり？」

「まさか、俺が殺してほしいという奴を殺してやるほどのお人好しだなんて思っていないよな？ 俺が誰かの望みを叶えてやるとでも思ったか？ もしそうだと思ってたならお前は相当の馬鹿だな」

「っ……」

苦い顔をするひびやを笑い、冷静さと余裕を取り戻す。

しかし本当の敵はこっちではない。

「なら、もう一度発狂してもらえばいい」

耳障りな声に振り返ると、白峰が壇上を下り、雪菜に歩み寄っていた。

そして。

グシャッ—————。

内臓を強く踏みつぶす。

息はなくとも開かれた瞳は、苦痛に歪んでいるように見えた。

「てめえっ！」

俺が攻撃をしかけようとした、その刹那。

「オーナー様を傷つけはさせませんよ」

トーマが立ちはだかった。

銃を構え、こちらを睨みつけて来る様は、本物の狩りをする野生の動物さながらで迫力がある。

だが俺自身も今回ばかりは見逃すわけにはいかなかった。

向こうがその気ならこっちも本気になるだけだ。

俺は銃を構え、トーマに向けた。

「ようやく本気で殺す気になってくれました？」

嘲笑うようなトーマの声が響く。

「今までは手を抜いてくれていたみたいですからね。もう、そんなお遊びはいりませんよ」

カチャリとハンマーを外す音がする。

全てお見通してわけか。

俺も覚悟を決めてハンマーを抜く。

その瞬間。

「やれ、兎ども！ そこにいる狩人を殺せ！」

賢治の声が響き、その場に待機していた兎達が一斉に武器を構え、敵意をむき出しにしてきた。

その数百以上。

俺一人ではさすがにどうにもできそうにない。

だが兎達はすでに襲ってくる直前だった。

嫌な汗が頬と背中を伝う。

仕方がない、交わしてオーナーとか言う奴と賢治を殺すしかない。そして指示する人が消え、兎達の動きを奪うしかない、そう思った。

誠はこれ以上俺に罪を重ねるなと言った。

もう傷つくなと言った。

そこまで言ってくれた奴は他にいない。

だけど、それはここを生きて出られたらの話だ。

生きて出るならこれ以上俺は罪を重ねるべきでもないし、傷つくべきではない。

でも、もし二人を殺して俺が満足できるなら、そのまま雪菜を追えるのなら、それはそれで悪くないと思う。

俺はチラリと誠の方を見て、ほんのわずかに口角を上げてみる。

やはり笑うのは、苦手だ。

すぐさま視線を戻し、トーマに狙いを定め、トリガーに手をかけた、その時だった。

「ウチのモンが随分お世話になったなア？」

ドラマのワンシーンよろしく体育館のドアが派手に開け放たれる。

その先には兎達に劣らぬ数の男たちが立っていた。

派手なシャツを着た奴もいれば、真っ黒に身を包んだ奴もいる。

まるで統一感のない団体だが、どいつもこいつも威圧的で、いかついことに変わりはない。

そいつらをかき分け、前に進み出てきたのは――。

「久しぶりだな？ 大空賢治」

「貴様はっ……！」

一瞬にして賢治の顔が青ざめる。

それは、我らが大平組組長だった。

相変わらず野太い声と、左目についた傷が高圧的で逆らう者を強く拒んでいる。

「随分探したんだぜ？」

黄ばんだ歯を見せながら壇上に近づいて行く姿に賢治は肩を震わせ、後退した。

「来るな！ 兎ども！ その男を始末しろ！ 殺せ！」

賢治の鬼気迫る声に兎達が一斉に動き出す。

俺は組長の元に駆けつけようと構えると、トーマが銃を発砲した。

パキューンという空気を切り裂くような音に、一気に緊張感が高まる。

しかしその弾はわざと、外された。

俺の目の前を一瞬で通って行った弾はずっと先にある壁を叩く。

「よそ見なんてしていていいんですか？ 貴方の敵は、僕ですよ」

「ちっ」

その言葉に思わず舌打ちをし、銃を構え直す。

本気でこいつを殺さなければいけないのか。

俺は覚悟を決めて発砲する。

だがトーマはそれを跳躍することで交わし、俺の手をめがけて撃って来た。

見事に命中した弾は俺の右手甲を傷つけ、銃を飛ばした。

カランという音を立てて落ちる銃を見つめ、拾おうと試みる。

けれど痛みで鈍った体が思うように動かない。それにトーマの発砲を引き金に始まった、兎とヤクザの全対決のせいで、あちこちから銃声や、叩くような音が響いた。

そのせいで流れ弾を喰らう可能性もあったし、トーマがどの方向からくるかも予想が困難だった。

それでも一瞬の隙を狙って屈む。

パン！

やはり肩を撃たれた。

「その程度ですか？」

トーマは煽りの言葉を吐き、今度こそ致命的な傷をつけようとしてくる。  
嫌な汗が額を流れる。  
俺は銃を拾うのを諦め、短刀を取りだした。  
両手に一本ずつ握り、狙いを定める。  
すると近くを岡崎が駆け抜け、何かを俺のポケットに忍ばせた。  
俺はそれがなんなのかを瞬時に察し、トーマに向かって駆け寄る。  
刀を構え、走りくる俺にトーマは慎重に狙いを定め、発砲する。  
だがその引き金を引く直前、俺はトーマの腕を蹴りあげた。銃が飛び、弾は天井に  
向かって発砲される。

俺はそのまま小さな肩を蹴り飛ばし、倒れた所を刀で肩を突き刺した。

「うはっ……！」

痛みに声を漏らすトーマは、ごくごく普通の子供のように苦痛に歪んでいて目には  
涙が浮かんでいた。

「悪いな」

「結局貴方はいつでも情けをかけはしない。殺すのなら殺せばいい。叔父さんにした  
ように僕の事も容赦なく殺せばいいじゃないですか」

覆いかぶさるように位置する俺を涙目で睨みつける。

体は震えていて、死への恐怖が滲み出ている。

まだ、死を怖いと思えるなら、涙が出るなら戻れる。

俺は、自分のポケットに手を突っ込み、岡崎が入れてくれたハンカチを取り出した。

それを思い切りトーマの口元に押し付ける。

一瞬驚いたように目を見開き、苦しそうに体をじたばたと動かしたが、やがて静かに  
目を閉じ、体から力が抜けた。

その様子を見つめ、俺はそっと立ち上がる。

すると岡崎が戻って来た。

「兄貴、お怪我の手当てを」

「いや、今は俺のことはいい。それよりさっさと兎達を寝かせろ」

詰め寄る岡崎を払いのけ、そう指示する。

「はあ。兄貴の事だからそうかと思いましたよ……。やっぱ睡眠剤をつけたハンカチ大  
量生産したのは正解でしたね……」

「みんな寝ちゃって大変でしたよ、兄貴」

そう言って近づいてきたのは、シャツにびっしょりと汗が染みついた高木だった。

「でもトーマのことも知っていたので兄貴はきっと子どもたちを殺そうとはしないと思っ  
たので、用意しました」

得意げに胸を張って主張する高木は、やはりヤクザに向いていない。

怖い見た目をしているくせにしっかりと俺の考えを読めていて、さらにちゃんと優しさ

を兼ね備えている。

俺は思わず笑った。

「お前らが舎弟で良かったよ」

「え？」

「兄貴、今、なんて？」

岡崎と高木が二人して同時に目を丸くする。

だが俺はずっと視線を彷徨わせる。白峰の方はどさくさにまぎれてどこかに行ったようだ、賢治はまだ壇上にいた。俺は賢治の方に向かって走り出す。

「俺は賢治を殺す。援護は任せたぞ」

しばらく二人は呆気にとられていたようだが、斧を振り下ろしてくる兎で我に返ったようだった。

俺は我に返った所を見届けたところで賢治へ意識を集中させる。

例えどんなことがあってもあいつだけは、俺の手で殺さなくてはいけない。

そうとどん距離を詰めた、その時だった。

「悪い子には、お仕置きです」

「私たちは、そう教わりました」

俺と賢治の間にミミとネネが立ちはだかった。

俺は一瞬苦虫を噛み潰したような気持ちになった。

またこんな幼い子たちを傷つけなければいけないのかと。

ところが、ミミとネネが鞭を向けていたのは、賢治の方だった。

「主様は罪もない雪菜お姉さんを殺しました」

「それはいけないことです」

「例え主様でもそれは許されません」

交互に話す姉妹に、賢治は眉を跳ねあげさせた。

「はあ？」

「主様も私たちにそう教えてくださいました」

「家族を傷つけるのはいけない行為です」

「だから主様は媼の事に腹を立ててタヌキを殺したのですよね」

「それで私たちは兎として依頼を受けているのです」

「そうでしょう？」

「その理屈なら、主様はタヌキになります」

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

ミミとネネがそう謝った刹那、鞭が飛んだ。

振り下ろされる鞭に賢治が顔を歪めた。だがその鞭は賢治に触れることなく、真っ二つに切れた。

短くなった鞭に驚愕する姉妹。

その二人を蔑むような目で見つめる男の両手には鋏が握られていた。

スーツにガスマスクという異様な格好をした男は賢治の横に立ち、幼い少女二人を虫けらでも見るような目で見つめる。

「そういう貴様らこそ我らが主様を殺そうなど、とんだ裏切りではないのか」

ガスマスクの内側に籠った声は低く、年のころは二十代前半か。

黒い短髪が一見好印象に見えるが、鋭い目つきとカチカチと鳴らす鋏が異様なまでに恐怖心を煽って来る。

「龍お兄さん……」

「だけど主様は雪菜お姉さんを」

「それはもう主様が雪菜を必要ないと判断したからだろうが」

抑揚のない淡々とした声に幼い肩がびくりと震えた。

そして俺もまた、その言葉は聞き捨てならなかった。

「人間はいらなくなった犬や猫を殺処分するだろう。それと一緒にだよ」

「貴様……！」

俺が怒りに歯を食いしばり、その龍と呼ばれたガスマスク男を手にかけてしようとしたが、賢治がその男の肩を掴み、引き下がらせた。

「その通り。お前には後で褒美としてボーナスを出そう。そして裏切りの貴様らは、殺処分だ」

パンパン！

容赦ない二発。

それは幼い少女の胸を貫き、あっさりと命を奪った。

倒れる二人は最後の最期まで互いを守るように手を取り合い、鎖が切れることなくその時を迎えた。

その光景はあまりに悲惨で、あまりに酷く、あまりに軽薄的で、容赦なかった。

俺はこんな奴と血が繋がっているのかと思うと吐き気がする。

「てめえはそうやって最後まで自分勝手な都合で逃げて、都合が悪くなれば容赦なく切り捨てる。一度だって自分のしたこと責任なんか取ったことないくせに粹がってんじゃねえぞ」

そう短刀を振り下ろす。

ところがカキンカキンという音と共に全て弾かれた。

「主様に指一本触れさせません」

龍という男が俺と賢治の間に立ちはだかる。

今の動きをたった二本の鋏で弾いたというのなら、こいつは相当のつわものと同える。

そして、邪魔だと言うように双子を蹴り飛ばして突き放すさまは血も涙も通わぬ、と

んだ兎(きょうじん)だと言える。

少し離れたところで落下した双子の体がバキッという音を響かせる。

変な方向に曲がった手足が痛々しい。

それでも外れない手枷と首輪がいつそ呪いに見える。

俺はその痛ましい双子を見つめ、すぐにガスマスクへ視線を戻した。すぐさま刀を構え直し、そっちが二本ならこっちも二本だと言わんばかりに突進する。

だが全て四枚の刃でガードされてしまう。

さらにその陰で銃を構える賢治が見えた。

このままではどさくさにまぎれて殺されかねない。

けれどこちらだって仲間がいないわけではない。

「兄貴、援護しますぜ」

「しゃがんでくだせえ！」

岡崎と高木の声に俺はすぐさま身を屈める。すると俺の頭上を無数の弾が飛んだ。無駄に乱射される弾はまるで目では追えない。

それなのに龍は銃を器用に使い、弾き飛ばし、時には弾を真っ二つに割って見せ、全てを交わしていた。

しかしそんなことをしていようが関係ない。

本当のトドメは、俺なのだから。

俺は身を屈めたまま走り寄り、弾に気を取られ、気が付いた時には手も足りないし、動きも間に合わない、そんなタイミングで胸を一突きする。

ずぶりと肉を突き刺す感触はやけに生々しく、気色悪い。

溢れた血が手を汚した。

生ぬるい液体が手を包みこむ。

その上屈んだまま刺しているせいで、口から吐き出された血を肩に浴びる。

スーツから浸みわたる生ぬるく、鉄錆臭い液体が体に吸い込まれるような感覚に陥る。

とても気持ちがいいものとは言えなかった。

俺はそれをもっと奥まで、手が肉に食い込むくらい奥まで突き刺し、勢いよく引き抜いた。

ぶわっと噴き出す血と倒れる男。

おそらく死んでいるだろうが、万が一生きていてもめんどうなのでとりあえず手から離れた銃を遠くへ蹴り飛ばす。

そして喉を引き裂き、すぐに賢治へ視線を向け、刃を向ける。

賢治の頬を大粒の汗が伝った。

あらかた眠るか始末された兎。もう邪魔は入らないだろう。

俺はじりじりと賢治に歩み寄る。

ついにこの時が来た。

この男を俺の手で殺し、苦しめる時が来た。

「来るな」

賢治が俺に向かって発砲する。

弾は見事に肩を掠った。

今度は自分の血がスーツを汚す。しかしそれに対する反応は何もしない。

痛みなど気にならない。

おれは無表情のまま賢治に歩み寄る。

後退する賢治の後ろに倒れていた兎に引っ掛かり、賢治はそのまま尻もちをつく。

その隙に俺は賢治の上に馬乗りになった。

そして腕を押さえつけ左右に刀を突き刺した。

「うおっ！」

痛みを悶えるが突き刺さった刀が自由を奪っている。

まるで十字架に貼りつけられたように腕を広げ、倒れる賢治は真っ青な顔をして  
いた。

俺はその顔を見下ろしながらゆっくりと胸ポケットからカッターを取り出す。

「これ、なんだか知ってるか？」

そのカッターを賢治に近付け、じっくりと目視させる。

賢治は全く分からないと言わんばかりにじたばたと蠢いた。

「貴様の愛した女性、俺の母さんを殺したカッターだよ」

俺の言葉に賢治は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「あの女はこのカッターで自らの手首を切って死んだよ。俺に最期謝って死んでいった。  
せめててめえも謝って死ね」

首を絞め、カッターを突きつける。

賢治は苦しうにもがいた。だが動けば動くほど腕に刺さったナイフから血が溢れだ  
し、痛みが襲った。

それに合わせて俺が軌道を塞いでいるため、呼吸も苦しうだ。

品のない、意地汚い顔が苦痛に歪む姿は見ていて滑稽だった。

人を苦しめ、虐げていた男が今こうして死んでいく。苦しみもがき、無様に死んでい  
くのだ。

ついにこの手で決着をつけられるのだ。

そう思うと感情が高ぶった。

俺はカッターを振りあげ、眼球をめがけて下ろした。

まずはその人を見下す目を、抉りだしてやろと思った。

ところが、頭に変な違和感を覚える。固い何かが押し付けられている。

俺は振りあげた体勢のまま固まった。

「それ以上、動くな」

正義感が強い、澄んだ声が響く。

耳触りで、俺に遠い存在の声。うんざりとした気持ちが押し寄せて来る。

「どういうつもりだ、伊座波」

「そいつは重要な証言だ。ここで死んでもらっちゃ困る。生きて署まで来てもらう」

「お前らの事情など知らない。俺はこいつを殺したいから殺す。それまでだ」

「どんな奴でも命を守るのが警察の仕事だ。あんたの気持ちを酌んでやりたいがそれはできない」

「命を守るのが仕事なお前が俺に銃を向けていいのかよ？」

「だから撃たせないでくれ」

その声は悲しく懇願している。

「さあ、そのカッターを捨てて男の上からどけるんだ」

今誠の顔はどんな表情を浮かべているだろうか。どんな目を俺に向けているだろうか。

ただ俺の頭に触れる固い銃口は、震えていた。

「殺すなら殺せばいい。撃ちたきゃ撃て。お前の都合など知らない」

「頼むよ、ひなた！」

「だが、俺を撃つって事はお前も死ぬ覚悟があるんだろうな？」

「兄貴を殺そうっていうんなら、俺たちは容赦しないぜ」

岡崎の声が響くと同時にカチリというハンマーを外す音もした。

「ウチの大事な仲間を傷つけようものなら、俺たちは情けなんかかけないぜ」

それが最終忠告であるというように組長の低い声が響いた。

その声に誠の銃がわずかに頭から離れた。

誠が手を引くのかと思われた、が。

「それはウチも同じだ。俺の部下を傷つけようものなら俺たちは容赦しないぞ」

次に体育館に団体で姿を現したのは防護スーツと盾に身を包んだ警察だった。

「今回はおたくから情報を回してもらっている。取引の約束上あんたらを傷つけたくはない。だから大人しく手を引いてもらえるかな？」

おそらくその警察の中で一番偉い人であろう男が組長に向かってそう訴えかける。

それに対し組長は表情を変えはしなかった。

しばしの沈黙が落ちる。

「ウチとしてもこの通り負傷者が出ている」

重い沈黙を破る、重い組長の声に誰もが身がまえた。

警察も兎も武器を握る手に力を込めた。

「これ以上のことは無駄だ。血を流すだけもったいない」

「じゃあ……」

「ああ。今回は協定を結んだ仲だ。俺らはてめえらを傷つけないし、てめえらも俺たちに手を出さない」

「ああ。ゲーム関係者の事は俺たちに任せてくれ。悪いようにはしない。ちゃんと聞きだした情報も提供する」

警察官と組長の会話には張り詰めた緊張感と緊迫感があった。

組長は一瞬黙りこみ、体育館全体に響く声で告げた。

「全員撤退。負傷者には手を貸してやれ。警察どもは生きてる兎達が襲ってきた時の援護をしろ。俺たち全員がここから撤退するまでだ」

その言葉に場内がざわめいた。

ヤクザ組の組長の判断に戸惑う声、ヤクザによる警察への命令に対する怒り、様々な声が響く中、組長がそれを全てかき消すように、ドスの聞いた声を響かせる。

「早くしろ」

殺気を感じ取った組の者たちが動き出す。

それに対し、白峰が壇上上手の陰からから叫んだ。

「全員殺せ！ ヤクザも警察も関係ない！ 全員殺せえ！」

兎達が即座に反応し、ヤクザ組に襲いかかる。そこに警察が入り込み、盾で華麗に援護して見せた。

外までできた道のある者は肩から血を流しながら、ある者は足を引きずりながら、ある者は意識が朦朧とする男を肩に担ぎながら歩き出した。

意識ある兎はまだ四十くらいはいただろうか。

眠った兎や死んだ兎もいるが、それくらい残っていたような気がする。

それをおそらく警察たちが殺さないように押さえつけているのが音でわかる。

俺はそんな騒がしい中、ただ父親に馬乗りになり、見下ろしていた。

「話しは聞いていただろう。その銃をしまえ」

そんな俺になお銃を突きつけていた誠に組長が圧力的な声で命じる。

するとゆっくりと俺の頭から銃口が遠ざかって行った。

「てめえらもいつまで銃を構えていやがる。早くしまえ」

きっと岡崎は腑に落ちない顔をしながら銃を収めたことだろう。

この大平組が武力行使をしないなど、名に恥じるとでも思っているに違いない。

だがこの組長の働きがあるからこそ今、俺たちも逮捕されることなく事務所へ帰ることを許されている。

だからこそ俺も今すぐここを撤退するべきだった。

けれどどうしてもこの男の上から避ける気にはならなかった。どうしてもこいつの息の根を止め、死にざまを見てやらないと気が済まない。

そんな俺の肩を誰かが掴んだ。

「ひなた」

太く、ごつい指から感じられるぬくもりは、組長のものだ。

「すみません……。俺は例え死んでも、こいつを殺さなければ、雪菜が、雪菜が報われない。どうかこいつの始末を、させてください」

俺は組長の方を見ることなく懇願した。

「やめろひなた。お前はこれ以上傷つくべきじゃない、罪を重ねるべきじゃないと言ったはずだ」

「ああ。けど伊座波。もう遅いんだよ。これ以上失うものなんてない」

「ひなた遅いなんてことは」

「黙れ」

俺より先に組長が誠の言葉を遮る。

「ひなた、お前の好きなようにすればいい」

「っ」

俺は組長の方を見上げた。

すると組長は何も感じさせない、無表情でこちらを見つめていた。

「そいつは警察じゃない。約束には含まれていない。お前が殺したい、そう思うならやればいい。お前の気の済むようにすればいい。誰かの意思じゃなく、てめえの意思で判断しろ。そしててめえの判断はてめえ自身が責任を持て」

抑揚のない声と、淡々とした言葉の羅列に俺は何を感じれば、どうすればいいのかわからなかった。

ただでも今なら誰の邪魔も入ることなく、俺はこの男を殺せるのだという事だけがわかった。

俺は今一度俺の下で意識が朦朧とし始めた男を見下ろす。

流れた紅い液体の量があからさまに増えている。

きっとこのまま放置すれば出血多量で死ぬだろう。でもここで俺が殺さなければきっと警察の手ですぐさま病院に運ばれ、命が助かる可能性も十分にある。

もし助かって、いつかどこかでこいつと再会することがあったら、俺はきっと後悔するだろう。

俺は、静かに口を開いた。

「なあ。一つだけ聞かせてくれよ」

「……」

虚ろな目をした賢治が、何だと言いたげに見上げて来る。

「なんであの時俺じゃなくて雪菜を連れていったんだ？」

その問いに賢治は残されたわずかな力で瞬きをして見せた。

「もし、あの時雪菜ではなく俺を連れて行って欲すれば、もしかしたら雪菜は別な道を、歩めたかもしれないのに」

自分でも情けない声だったと思う。

怒りと悲しみと涙をこらえた声に、賢治は薄く笑った。

「おんな、の……方が、……金に、なるから、だよ」

ブワッ—————！

とぎれとぎれに語られた理由を聞き終えた瞬間、俺は奴の喉を切り裂いていた。

母親を殺したカッターで父親の首を切り裂き、その声を、人生を奪った。

溢れた血を顔面に受け、血生臭い香りに吐き気を覚える。

髪からポタポタと落ちる血が、賢治の開かれた目の中に落ちた。

俺はふらりと立ち上がり、カッターを投げ捨てた。

そのまま無言で体育館を後にする。

そんな俺を止める奴も、責める奴も、慰める奴もいなかった。

ただ途中隣から組長が投げ渡してきたタオルだけが、妙に優しくかった。

学校の裏道路に行くときたくさんのリムジンとハイヤーが待っていた。

これまたずらっと並ぶ黒い集団が異様なまでに威圧的だ。

それらに組の者たちが俺に一言ずつかけて、それぞれに乗り込んで行った。

そして順を追って少しずつ時間を置きながら出発していく。

あまり目立たないための配慮だろう。それでもこんな黒光りした高級感溢れる車が走っていたら、多少なりとも目立ちはするのだろうけれど。

俺と組長と高木、岡崎は最後に車に乗り込んだ。

リムジンの中は広く、楕円形に組まれたソファ椅子に俺と組長が隣に、岡崎と高木が向かいあうように座った。

雪菜は一つ前の車で毛布に包まれ、運ばれた。

運転手がエンジンをかけ、走り出すと同時に組長が体をソファの背もたれに預け、口を開いた。

「すまなかったな。もっと早く来ていれば」

「いえ……。俺が全て悪いんです。俺がもっと早く動いていれば。雪菜を失った日から本気で探しに行けば良かったんだ」

「いいや、そうは言うもののそれを拘束したのは俺だ。俺にも責任がある」

優しい声だった。

ここまで優しい声で組長に話しかけられたのは、初めてだった。

いつもどこか低く冷酷な、抑揚のない声で話しているのに、今は子どもに話しかけるようなぬくもりを感じる。

「実はお前が行ってからすぐ情報を大平組の連中に連絡して洗いざらい調べさせたんだ」

「そう、だったんですか」

組長がそこで葉巻を啜えた。

すかさず岡崎がライターを準備する。

組長は無言で火を受け取り、葉巻を吸いこんだ。室内が煙たくなる。

「どうやらゲームが始まったのは三年前くらいらしい。警察学校時代から伊座波誠を嫌っていた白峰太一自体は五年前くらいからずっと企画し、ネットに愚痴を書き込んでいたらしい。それを轟ひびやが見て暇つぶしがてら、手を貸した」

ずっと高木が灰皿を差し出すと、組長はそこに灰を落とした。

「その二人が手を組んでからまず社員集めと、兎集めが始まった。まず兎は死んだりいなくなったりしても親が捜索願等を出さないよう基本は人身売買をしていたらしい。もしくは精神に異常をきたしている者など様々だ。だが白峰は最初力加減が分からなかったようで何人かの兎になる予定だった人間を殺している。調教ができなかったそうだ」

呆れたように肩をすくめる組長。

そして俺の方をちらりと見つめ、うんざりした口調で続けた。

「そんな時娘を見世物やら売春して身を鬻めながら生きていたお前の親父、大空賢治に出会った。賢治は娘を売ると同時に自分が調教師になることを志願した。なんせ奴は俺らから色々な仕打ちを受けていたからな、うまく力の使いどころが分かっていたんだろうよ。そうして兎第一号として創られたのが、雪菜だ」

雪菜がナンバースリーと呼ばれていたのは、少なからず二人先に死んでいるからだっただのか。

そこでようやく数字の意味を理解した。

吐き気と嫌悪感が込み上げて来る。

「その後賢治は色んなところを回って兎できる人材を見つけて、調教した。そして何人かできあがったところで初めてゲームを開催した。最初は小規模でゲーム時間は一日とかだったらしい。まあそれがどんどん裏取引で、優越感を味わいたい金持ちや、刺激の欲しい富裕層にウケ、ここまで大きく成長したって話だ。あのゴーストタウンも売り上げで買ったらしい」

一人の恨み辛みが、狭い心がここまで多くの人を巻き込んでたくさんの犠牲を出してきた。

それは、あまりに身勝手であまりに残酷で、あまりに理不尽だ。

「まあ今回ので摘発されたし、今後兎と呼ばれてた奴らは精神科医で治療が進むはずだ。白峰はおそらく死刑判決が下るだろう。ひびやや視聴していた奴らもそれなりの処罰が下るはずだ。それ以外にも現場まで運転したスーツの男たちや俺たちが乗り込んだ時に街の入り口に護衛で立ってた社員ら、そいつらもなんかしらの罪に問われるはずだ」

つまりこれでこのゲームは終わった。

白峰太一が創った会社も終わりだ。

きっと二度と同じことは繰り返されないだろう。だけどそれでも俺は大切なものを失ったし、何も誰も救えなかった。

結局トーマだって、俺の手には負えなかった。

「なあ、ひなた」

組長が葉巻を潰し、真剣な声で呼びかけて来る。

俺はゆっくりと組長の方に視線を向けた。

「お前は賢治をその手で殺せて満足したか？」

その問いに俺は、頷くことができなかった。

未だに賢治の喉を引き裂いた感覚は生々しく残っている。

どんなに拭っても、血の臭いも取れやしない。

でもなんだか感覚だけが妙にリアルに残っていて、殺したという実感があまりにもなさすぎた。

あまりにあっさりと呆気なく無様に死んだ男に抱いた感情は、喜びでも歓喜でもなく

「無」だった。

この程度か、こんなものなのかという虚無感だけが残っている。

それが何故なのか、俺には分からなかった。

「もしお前が賢治だけじゃ物足りず、白峰に復讐を望むなら俺はお前に手を貸すことくらいできる」

そうなのか。もう一人あんな悲惨な現状を生み出した男がいるから、生きているから心が晴れないのか。

いや、どんなに誰かを殺しても雪菜は戻って来ない。

それが痛いほど実感できてしまうからこそ、虚無感が襲いかかって来るのではないか。

俺はただ、俯いて口を結んだ。

それでも組長は静かに言葉を紡ぎ続ける。

「それとももし、俺の事を恨んでいるのなら、組を抜けても構ない。お前に歩みたい道があるなら、自分の選択で歩め。俺はもう、お前を拘束したりはしない」

さすがにその言葉を聞いた瞬間俺は顔を上げ、岡崎と高木は目を見開いた。

まさか組長からそんなことを言われるとは思ってなかった。

「さっきも言った通り執拗に追いたて、賢治が苦しんで逃げるきっかけを生んだのは俺だ。そしていくら親父の借金が残っているからと幼かったお前を縛りつけたのはあまりに理不尽だった。すまなかった」

涙が溢れそうだった。

優しさの中に間違いなく溢れる、仲間に対する愛情がひしひしと伝わって来る。

「もちろん出ていくにしてもお前が社会復帰するまで、働いて金を稼ぐまでは家賃やらの生活費は工面してやるぞ」

組長は怒ると怖い人だ。乱暴で、基本的に敵には情がなくて、容赦がない。追い詰めるところはとことん追い詰めるし、えげつない。

俺だって仕事をしくじって何度指を踏みつけられたことか。

髪を引き抜かれたこともある。

だけど実績を上げれば褒めてくれるし、仲間に対する思いやりは誰よりも強い人だ。

それを改めて実感させられた。

「……ありがとう、ございます」

今の俺は、それしか言葉が出なかった。それ以上の言葉なんて吐きだせなかったし、何かを考える余裕など微塵もなかった。

何年ぶりかの涙が溢れて、何年ぶりか、感情が溢れた。

久しぶりに人らしい行動を、感情を、行い、抱いた気がする。

数日後、俺は菊の花を持って墓の前に足を運んでいた。

立派に建てられた墓石には、大空雪菜と名前が刻まれていた。

その石の前にある筒へ、菊を入れ手を合わせる。

雪菜、救ってやれなくて、ごめんな。情けない兄貴で、申し訳ない。

今でも雪菜の髪が断髪された瞬間を思うと、吐き気と怒りが込み上げてきた。だが、どんなに怒りをぶちまけたところで雪菜は戻って来ない。

せめて、こうして組長が建ててくれた石の下で眠り、安らかに天に召されることを祈るばかりだ。

「来てたんだな」

目を瞑り、手を合わせる俺に誰かが声をかけて来る。

視線を向けると、腕に包帯を巻いた誠が立っていた。

スーツ姿に相変わらず捜査一課のバッジが光っている。その手には花と線香が抱かれていた。

「何故お前がここを？」

「あんたのとこの舎弟が伝えにきたよ。組長命令だつてさ」

「組長が？」

眉根を寄せる俺をよそに、誠は花を添え、線香を焚いた。

独特の甘い香りが広がり、青い夏の空に吸い込まれて行く。

「今、白峰太一は裁判にかけられるところだ。他のトーマくんやミミさん、ネネさんは治療中。轟ひびやだけが実はあの後姿を消して行方不明なんだ。調査してる所でさ」

軽く手を合わせた後、誠はそう語った。

ひびや以外は組長の言う通りになっている。

ひびやは一体あの状況でどこに行ったというのだろう。

「あの騒動に紛れて逃げられてもそりゃわからないよな」

悔しそうに誠がそう言う。

だが何かを決したように俺に向きあい、真剣な眼差しを送って来る。

「なあ、ひなた」

俺は何だと言わんばかりに視線を向ける。

「俺と一緒にひびやを探さないか？」

「……どういう意味だ？」

「つまり俺の相棒になってほしいって言ってるんだ。俺がお前を推薦してやるから、警察に來い」

「馬鹿言え」

スーツのズボンポケットに手を突っ込み笑って見せる。

「俺は人殺しだ。俺もあのゲームで人を殺してる。それも大事に証言を、な。そんな奴が警察？ 笑わせないでくれ」

「それは護身として認められるはずだ。大空賢治のことも。罪には問われない。俺、お前とならうまくやれると思うんだ。頼む、考えてくれ」

初めてあった瞬間の誠と重なった。

俺とは程遠い熱い視線、光を放つ瞳を持った男。絶対に気が合わないと確信し、真っ直ぐすぎる考えが鬱陶しい。

「お前、忘れちゃいないか？ 俺はお前の旧友すら殺した」

「あれは……」

「それに俺は決めたんだよ」

俺の言葉に項垂れていた誠が顔を上げる。

「俺は今の組長の元でやっていく。組長には何だかんだ感謝してるし、世話になってる。もちろん親父の借金を返し切ってないっていうのもあるが、俺の意思であの人の元にいるって決めたんだ。大平組こそ、俺の居場所って気がついた」

「ひなた……」

「だから悪いがお前の申し出には応えられないし、きっと反りが合わねえよ。俺はこれからも人を脅し、時には殺す。場合によっちゃ、お前にも牙を剥く」

じっと見据えると、誠は一瞬落ち込んだような表情を見せた。

けれど、次の瞬間には微笑んでいた。

穏やかに目を細め、口元を緩ませている。

「非常に残念だよ。良い相棒になってくれると思ったんだけど。でも、初めて会った時よりもひなたの目に光が溢れているから。ひなたが自分の意思でそう決めたのなら、俺は何も言わずに身を引くよ」

それから引き締まった顔をし、鋭い視線を俺に向けて来る。

「ただし、あんたがそうであるように、俺も場合によってはその手に手錠を嵌めるから」

